

石川県金沢市

戸水 C 遺跡

平成 2・3 年度発掘調査報告書

1993

石川県立埋蔵文化財センター

石川県金沢市

戸水 C 遺跡

平成 2・3 年度発掘調査報告書

1993

石川県立埋蔵文化財センター

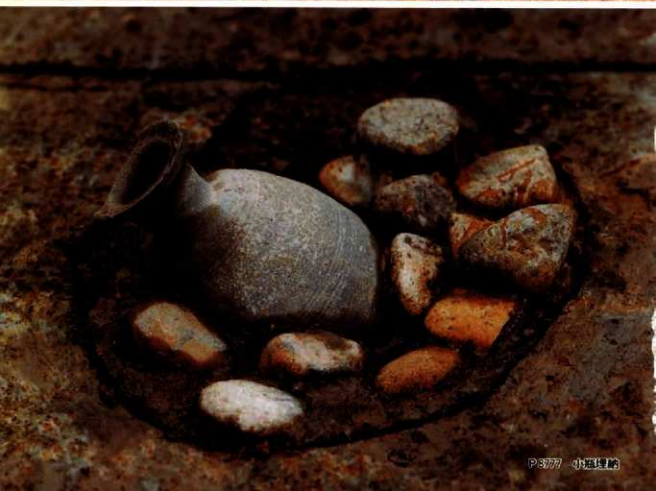








P 8333 平瓶埋納



P 8377 小瓶埋納

例 言

1. 本書は、平成2・3年度に実施した金沢港南地区埠頭用地整備工事に係る埋蔵文化財（戸水C遺跡：県遺跡No01282、戸水C古墳群同No01283）の発掘調査報告書である。調査地は金沢市御供田町地内である。戸水C遺跡の発掘調査としては、通算で第7次、第8次にあたる。
2. 調査は石川県港湾課（金沢港湾事務所）の依頼により、石川県立埋蔵文化財センターが実施し、費用は県港湾課が負担した。
3. 現地調査は、当センター調査第一課長平田天秋が統括し、以下の職員が担当した。
平成2年度 主事北野博司、嘱託小阪 大 調査面積1,200㎡
平成3年度 主事北野博司、主事伊藤雅文 調査面積2,500㎡
なお、両年度には市町村埋蔵文化財専門職員長期研修生が参加した。
平成2年度 林 栄輝…鹿島町教育委員会
平成3年度 上野 敬…志雄町教育委員会、田中健一…津幡町教育委員会
4. 本書の執筆分担は目次のとおりで、編集は北野が行った。執筆にあたっては久田正弘（社団法人石川県埋蔵文化財保存協会）、芝田悟（本センター）、垣内光次郎（本センター）の協力を得た。「戸水C遺跡漆紙文書」については『拓影』（石川県立埋蔵文化財センター所報）第35号より転載した。
5. 本書で用いる方位は座標北（国土座標第Ⅷ系）、水平基準は海拔高である。
6. 本調査の出土品・記録資料類は現在、石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

目 次

第1章 はじめに	北野 博司	1
----------------	-------	---

第2章 調査の経緯と経過

1. 過去の調査	5
2. 調査の経緯と経過	6

第3章 調査の概要

1. 調査区・層序	10
2. 弥生時代	13
3. 古墳時代	13
4. 7世紀前半	21
5. 8世紀	21
6. 9～10世紀	22
7. 11～13世紀	33
8. 近世以降	40
9. 漆塗り土師器長胴甕について	41
10. 墨書土器	41

遺物実測図・遺物観察表	42
-------------------	----

第4章 考察

1. 縄文から弥生時代中期の土器	久田 正弘	94
2. 戸水C遺跡漆紙文書	平川 南	96
3. 戸水C遺跡の出土銭貨	芝田 悟	99
4. 戸水C遺跡出土の初期貿易陶磁器	垣内光次郎	101

写真図版

【付図】 遺構図1/500 (第1次～第8次)、遺構図1/200 (第7・8次)

第1章 はじめに

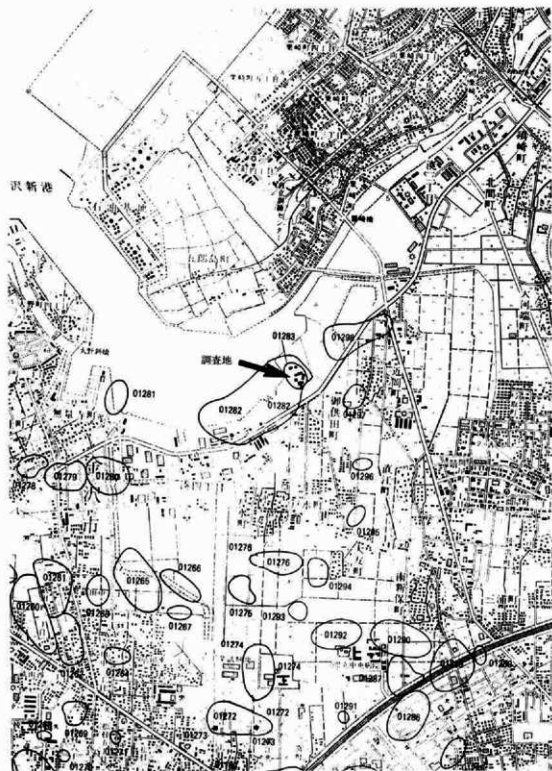
戸水C遺跡は金沢市御供田町から戸水町にかけて所在する。遺跡は、県都金沢市の中心部から北西へ約6 km、県内最大の潟湖、河北潟の排出河川—大野川の左岸、海拔0.8m—1.0m前後の沖積低地に存在する。地下水自噴地帯であり、農作業には田舟が欠かせない地域である。周辺には広範な低湿地帯が広がるが、遺跡の立地する地点は微高地をなしている。大野川は海岸砂丘を切断して日本海に注ぐが、旧は大野町の南を流れており、河口付近では犀川と合流していたとも言われている。

大野川・犀川河口は古代においては、加賀地域北半の物資(水上交通)が集約する地点にあっており、戸水C遺跡の立地環境の重要性が窺われる。大野川は、河北潟周辺地域はもとより、金沢平野沖積地の水を集めており、戸水C遺跡を南下すれば、大友遺跡、藤江周辺の遺跡群、西念・南新保遺跡など古代の主要な遺跡に容易に到達することができる。また、犀川とその支流の合流点付近には、7世紀後葉から活発な活動を展開する金石本町遺跡が存在する。ここはそのやや上流で安原川が合流し、これをたどれば広く手取川扇状地の物資を集積できる位置にもあたっている。

金沢平野沖積地の遺跡は、近岡遺跡のように縄文時代晩期頃から点々と見られるようになり、弥生時代前期末から中期初頭頃には一定の広がりを見せる。中期末からは本格的に集落が成長し、後期後半から古墳時代初頭にかけてその広がりがピークを向かえる。古墳時代後期には遺跡数が減り、8世紀中葉から新たな開発が始まる。これは全国規模で展開した律令期の集落動向に対応するものであるが、これらも多くは9世紀末—10世紀初頭には変質・解体していく。以後、11—12世紀代は確認できる遺跡数が減っていく。

このような金沢平野の集落動向は、そのまま本遺跡にも当てはまる。戸水C遺跡は、弥生時代—中近世におよぶ長期の複合遺跡である。それは上記のごとく、立地において常に交通・経済・情報などの点で要衝の位置を占めていたからに他ならない。

01096	松村A遺跡 (縄文・古墳・中世)	01277	金石北遺跡 (不詳)
01102	藤江B遺跡 (弥生—平安)	01278	柱遺跡 (弥生・古墳・中世)
01201	二口六丁A遺跡 (弥生・古墳)	01279	無量寺B遺跡 (古墳)
01258	寺中遺跡 (弥生中期・後期)	01280	無量寺遺跡 (古墳・中世)
01259	寺中B遺跡 (縄文晩期—平安)	01281	無量寺金沢港遺跡 (縄文—古墳)
01260	畝田・寺中遺跡 (古墳—中世)	01282	戸水C遺跡 (縄文—中世)
01261	畝田遺跡 (縄文晩期—平安)	01283	戸水C古墳群 (古墳)
01262	畝田大徳川遺跡 (奈良—室町)	01284	二口六丁B遺跡 (弥生・古墳)
01263	畝田B遺跡 (弥生—平安)	01285	西念東遺跡 (弥生)
01264	畝田御台場跡 (江戸)	01286	西念・南新保遺跡 (弥生—平安)
01265	畝田C遺跡 (弥生—平安)	01287	南新保三枚田遺跡 (弥生・古墳)
01266	畝田無量寺遺跡 (弥生・奈良・平安)	01288	南新保D遺跡 (弥生—平安)
01267	畝田ナベタ遺跡 (奈良・平安)	01289	南新保B遺跡 (弥生)
01268	観音堂遺跡 (不詳)	01290	南新保C遺跡 (古墳前期)
01269	松村西の城遺跡 (古墳・平安)	01291	二ツ屋町遺跡 (弥生・平安)
01270	松村平田遺跡 (弥生中期)	01292	南新保遺跡 (不詳)
01271	松村寺の前遺跡 (室町)	01293	大友B遺跡 (不詳)
01272	藤江C遺跡 (弥生—中世)	01294	大友C遺跡 (不詳)
01273	藤江C古墳群 (古墳)	01295	大友A遺跡 (奈良・平安)
01274	戸水B遺跡 (弥生・平安)	01296	近岡カンタンボ遺跡 (弥生—奈良)
01275	戸水D遺跡 (奈良・平安)	01297	近岡ナカシマ遺跡 (弥生・奈良・平安)
01276	戸水オモ子遺跡 (奈良・平安)	01298	近岡遺跡 (縄文—古墳・平安・中世)



第1図 調査地と周辺の遺跡 (1/25,000)

■港湾の区域

港湾法、港則法、公有水面埋立法、による水域面積は19,060,000平方メートルである。

港湾法による港湾区域は、「旧専光寺三角点（18.57メートル）から253度1560メートルの地点、同地点から306度2,000メートルの地点、同地点から36度7,700メートルの地点及び同地点から126度2,000メートルの地点を順次結んだ線と陸岸により囲まれた海面並びに大野川河川水面、浅野川鞍降橋及び犀川普正寺橋各下流の河川水面、大根布三角点（49.61メートル）から48度1,600メートルの地点から111度に引いた線以南の河北海水面並びに金石本町、普正寺町及び無量寺町の各地水面。

■金沢港の沿革

金沢港は、日本海沿岸の中央部に位置し、金沢市街を貫流して日本海にそそぐ大野川、犀川両河口を包含し、日本海に面する港湾であり、昭和29年7月10日、旧大野港、旧金石港を合併して金沢港となし、夫々を大野地区、金石地区として成立している。大野川河口の大野地区は古くから栄えた港泊地で遠く奈良朝時代から大陸との往来があり渤海国の船もしばしば来航していたことが明かになっている。下って江戸時代には加賀百万石の権威を背景に、北前船がこの地を本拠として活躍し、いわゆる御手船、廻米船の名で江戸、大阪に往来していた。このころ商標銭屋五兵衛が宮の腰（金石地区）を根拠地として、広く海外と貿易し、関西、東北、北海道の諸港との間に米、雑貨の移出、木材、海産物の移入を主とした海運が活発に行われ商船も入港して繁栄を極めていた。しかしながら、その後明治31年（1898年）鉄道が開通し、陸上交通網が整備されるにつれて、本港の港勢は衰えはじめ、往時のおもかげは一時なくなり、近くは満州事変から第2次大戦へと激動する内外情勢の試練をうけて大野や金石の港はきびしい消長の年月を経てきた。金沢港が堀込港湾として、その開発が時代の要請として打ち出されたのは、昭和6年頃からである。金沢市及び小松市の産業、経済活動としての物質は伏木富山港、七尾港よりの二次輸送によって産業活動が行われていた。昭和38年1月北陸地方を中心に金沢市が豪雪により陸の孤島となったため民需物資及び燃料等の不足が生じた。これらの問題解決のため物質の海上輸送による確保と日本海沿岸航路の避難港としての要請を受け、これらに応えるため石川県が中心となり、昭和38年12月に金沢港の港湾計画が立案された。昭和39年4月から大野川右岸に堀込港湾の建設に着手した。

●金沢港の主な歴史

- | | | |
|---------|------|------------------|
| 昭和9年4月 | 1934 | 金石港指定港湾となる |
| 昭和27年9月 | 1952 | 大野港指定港湾となる |
| 昭和29年7月 | 1954 | 大野港・金石港合併、金沢港となる |
| 昭和39年4月 | 1964 | 港湾法による重要港湾に指定 |

金沢市大野町に七尾港工事々務所金沢工場設置大野西防波堤工事に着手

昭和40年7月	1965	港湾審議会第25回計画部会で金沢港湾計画（昭和39～50年）策定
昭和42年12月	1967	航路泊地浚渫工事着手
昭和45年9月	1970	石油岸壁（－7m）完成
昭和45年10月	1970	第1船入港（タンカー鶴松丸2、138D/Wトン）
昭和45年11月	1970	関税法による開港に指定
昭和45年12月	1970	港湾審議会第44回計画部会にて計画改訂（昭和45～55年）
昭和46年4月	1971	戸水岸壁（－7.5m）130m完成
昭和46年5月	1971	大浜埋立護岸着手
昭和47年10月	1972	戸水岸壁（－10m）2バース完成
昭和48年12月	1973	無量寺岸壁（－7.5m）1バース完成
昭和49年6月	1974	港湾審議会第62回計画部会にて計画改訂（昭和49～60年）
昭和50年5月	1975	無量寺岸壁（－7.5m）2バース完成
昭和53年11月	1978	御供田岸壁（－10m）1バース完成
昭和54年3月	1979	大浜埋立工事完了
昭和57年5月	1982	金沢開港400年
昭和58年3月	1983	五郎島岸壁（－9m）完成
昭和59年12月	1984	港湾審議会第108回計画部会で金沢港湾計画一部変更（大野西防波堤延伸計画小型船だまり計画）
昭和62年6月	1987	港湾審議会第119回計画部会にて計画改訂（昭和61～75年）
昭和63年10月	1988	日韓定期航路開設（金沢港－新潟港－釜山港（韓国））

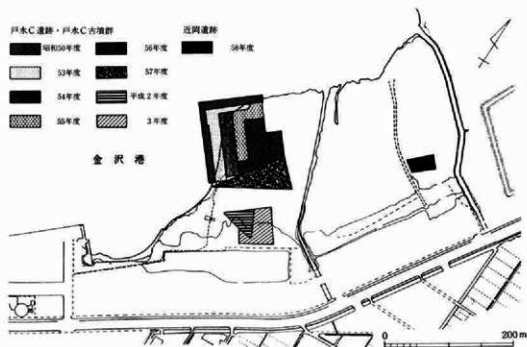
「金沢港」運輸省第一港湾建設局金沢港工事事務所、1990より

第2章 調査の経緯と経過

1. 過去の調査

戸水C遺跡の調査は、運輸省第一港湾建設局七尾港工事事務所（後に金沢港工事事務所）が所管する金沢港の泊地造成事業を原因として1975年（昭和50）に始まった。これに先立ち、1972年（昭和47）には同事業に関連して戸水遺跡が調査されている。戸水C遺跡は、1975年度に2,150㎡（A区・第1次）、1978年度に2,000㎡（B区・第2次）、1979年度に2,000㎡（C区・第3次）、1980年度に2,000㎡（D区・第4次）、1981年度に3,800㎡（E区・第5次）、1982年度に3,400㎡（F区・第6次）が調査されてきた。1983年度には隣接の近岡遺跡で約900㎡が調査されている。各発掘調査の調査主体は、戸水遺跡および戸水C遺跡の第2次までが石川県教育委員会、それ以後は石川県立埋蔵文化財センターである。各調査の概要は以下の文献を参照していただきたい。

『金沢市戸水遺跡』第Ⅱ次調査概報	石川県教育委員会	1972年
『金沢市・戸水C遺跡発掘調査概報』	石川県教育委員会	1976年
『金沢市戸水C遺跡発掘調査概報』	石川県教育委員会	1979年
『金沢市戸水C遺跡発掘調査概報』（4）	石川県教育委員会	1981年
『金沢市戸水C遺跡発掘調査概報』（5）	石川県教育委員会	1982年
『金沢市戸水C遺跡』（6）	石川県立埋蔵文化財センター	1982年
『金沢市戸水C遺跡』	石川県立埋蔵文化財センター	1986年



第2図 調査区位置図（S = 1/6,000）

弥生時代では稲作文化の波及を示す前期の遠賀川式土器が出土し、県内でも初期農耕が最も早く開始された地域の一つであることが明らかとなっている。弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、集落や前方後墳が存在し、同期の拠点集落の一角を形成していたとみられた。

最も本遺跡を有名にしているのは、平安時代でも9世紀を中心として形成された大規模な建物群である。立地環境と質・量とも豊富な出土品などから濠に関連した官衙遺跡とされ、その性格については国津、郡津、国府関連遺跡などの説がある。8～9世紀、能登半島は日清交流の拠点となっており、加賀地域は渤海使の着岸地・安置場所として文献にその名が頻出する。「越前国加賀郡佐利翼津」「越前国便処」など、当時の国際交流の最先端の地の所在をめぐって本遺跡の内容が注目を集めているのである。

2. 調査の経緯と経過

今回の調査は、運輸省が金沢港の御供田埠頭を拡張するのに伴い、その背後地を石川県が埠頭用地として整備することに伴うものである。1989年（平成元）6月、金沢港湾事務所より本センターへ分布調査の依頼があり、同年8月に試掘を実施したところ、調査対象区のはほぼ半分の地域で埋蔵文化財の存在が確認され、戸水C遺跡の広がりであることが推定された。埋蔵文化財の取り扱いについては保存協議の結果、発掘調査の対応となった。調査は事業者側の都合により2カ年に分けて実施することとなり、1990年度に1,200㎡、1991年度には2,500㎡を発掘した。出土品はそれぞれ、コンテナ28箱、60箱であった。現地調査の期間は、1990年度が5月7日～7月31日、1991年度が5月7日～10月16日である。

発掘作業にあたっては以下の方々のご協力を得た。

1990年度：北川 綾、北野さや子、北村清二、新保清作、戸水寿美栄、寺西栄松、永井静子、中村政則、西川重治、西川 緑、丹羽住子、藤田美和子、孫田文子、水戸清子、安田重子

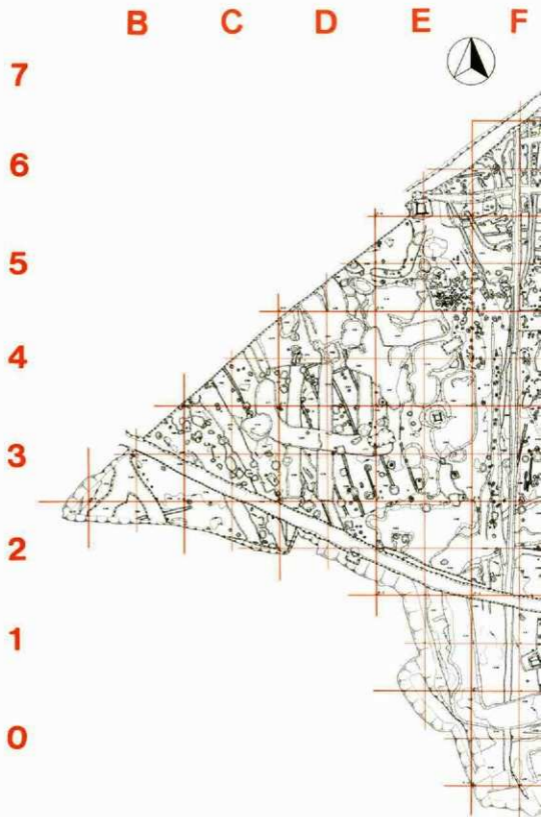
1991年度：大谷啓介、北野さや子、北村清二、坂井かず子、坂井澄江、坂田進午、坂野美智子、新保清作、千田清一、高崎春子、高柳美代子、竹山くに子、永井静子、西井賢一、西川愛子、西川重治、西川 緑、西田清二、西村みどり、丹羽住子、比良弥之助、藤田美和子、村上勝次、最里健太郎、渡辺恵美

出土品整理は1992年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施したほか、藤田美和子、渡辺恵美、坂野美智子、高橋由起の協力を得た。土壌の水洗選別は山本澄美子、池村ひとみ、木製品の整理には伊藤志津子、高橋陽子、横川明美があたった。

報告書作成は同年度に大藤雅男（本センター調査員）の協力を得て行った。

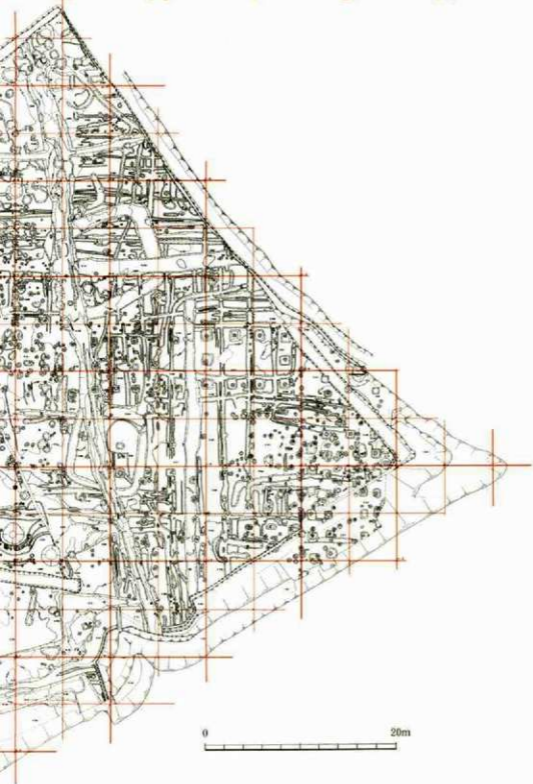
本遺跡周辺はサギ類のコロニーとして著名であり、毎年春先にはアオサギ、ゴイサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギなどがそれぞれ高木、低木で営巣している。またヨシが生い茂る湿潤な荒蕪地で、普段は立入禁止の地であるため、地上にはカルガモやキジなどの営巣もかなり認めら

れた。これらの取り扱いについては県自然保護課および県野鳥園の協力を得て対処していったが、1991年度には、調査区内の木にゴイサギのつがいがかが営巣・抱卵しているのを発見した。調査はとりあえずこの木の周囲を島状に残して行うこととし、ゴイサギの巣立ちを待って木の伐採、掘削を行うこととなった（写真図版36下段）。ゴイサギは雄雌が交互に抱卵し、結局、5月20日にひながかえった。しかし、数日後につがいはひなをくわえて？飛び立っていったため、5月28日に樹木を伐採してその下の調査に入った。この島状に残した木の周囲には、ちょうどこれを取り囲むように幅約1.5mで溝が方形に巡っているのが検出されたが、樹木伐採後これを精査したところ一辺約8mの方墳であることが明らかとなった。（調査日誌より）



第3区 グリ

G H I J K



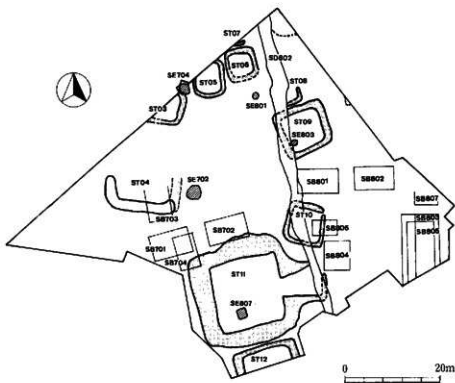
平配置図

第3章 調査の概要

1. 調査区・層序

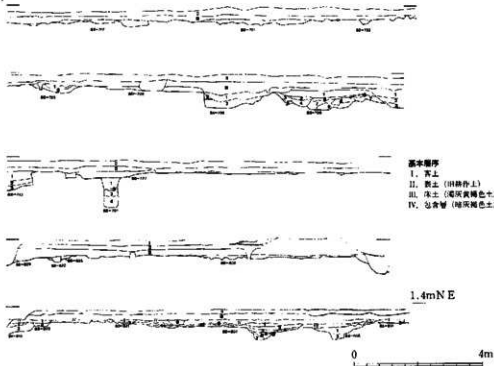
調査区は南西に任意の基準点を設け、北へ1、2、3……、東へA、B、C……と10mグリッドを設定した。南西隅の杭番号でグリッド名を呼称する。1991年度はグリッド内を4分割(5mグリッド)して遺物の取り上げ等を行った。南西小区を1区、北西小区を2区、南東小区を3区、北東小区を4区とし、「G2-4区」のように5m四方単位に呼称することとした。単に「G2区」とした場合には、10mグリッドの位置を示すこととする。

調査区内の層序はほぼ均一であるが、南半は調査以前に2~3mの盛土が施され、旧地表以下が還元変色していた。土層断面は調査区の北西辺の壁面のものを示している(第5図)。基本層序は旧の水田耕作土と床土の直下が地山である黄灰白色粘土~シルトとなる地点が大半であった。地山はそのほかE2区~D5区にかけて粗砂層が帯状に露呈し、この周辺は水位が高く井戸が造られていた。本調査区付近は微高地であるため地盤を削平して周辺の低地部へ客土することが多かったとみられる。1990年度の調査区では土取り穴が多数検出されている。耕作土・床土の下は調査区南東部など低地部で暗灰褐色土が遺存し古代・中世の遺物を含む。遺構の埋土は時代



第4図 主要遺構配置図(古墳・平安)

SW



基本層序

- I. 黄土
- II. 黄土 (田舎作上)
- III. 床土 (暗灰黄褐色土)
- IV. 包含層 (暗灰褐色土)

SX-707

暗灰褐色土

SD-701・703

暗灰褐色土

SD-706

1. 暗灰褐色土

2. 暗灰褐色シルト

SD-706

灰褐色砂混土

SX-708

1. 高灰褐色土

2. 高暗黄灰色粗砂混土

3. 高黄灰色粗砂

地山：黄灰～黄灰色粗砂

SX-709

1. 高灰褐色粗砂混土 (黄褐色シルトブロック多量に含)

2. 高暗褐色土 (シルトブロック含まない)

3. 高暗褐色土 (黄褐色粗砂混)

4. 高暗褐色粗砂混土 (粘質、灰白色シルトブロック含)

5. 高暗褐色土 (黄褐色粗砂の混層含む、3層に亘る)

6. 灰褐色土 (粘性、粗砂少量)

7. 暗灰褐色粗砂混土 (灰褐色土混じり、やや粘質)

8. 高暗褐色粗砂 (暗灰褐色土ブロック含)

9. 高暗褐色土 (粘性、粗砂少量混)

地山：高黄灰色粗砂

SD-713

1. 暗灰褐色粗砂混土

2. 暗灰褐色粗砂混土 (1より色調濃く、やや粘性)

(1, 2層間：黄褐色粗砂の混層)

3. 高灰褐色土 (粘性帯に砂少量混)

地山：黄褐色土 (上部)、青灰色粗砂 (下部)

SD-722

灰褐色土

SE-701

1. 黒褐色土

2. 黄灰白色地山ブロック

3. 高暗褐色土

4. 黒色土 (粘質・青灰白色シルト混)

地山：黄灰白色シルト (上部)、青灰白色シルト (下部)

SD-826

高暗灰褐色土

SD-822

暗灰褐色シルト (黒褐色土ブロック含)

SD-825

高灰褐色シルト

SX-810

1. 高暗灰褐色土 (2層が混)

2. 灰褐色土 (砂質)

SD-820

1. 淡灰褐色土 (鉄分含)

2. 暗灰褐色土

地山：青黄灰白色中粗砂

SD-821

1. 青黄灰白色粗砂

2. 高灰褐色土

SD-802

1. 灰黄褐色土

2. 灰黄褐色土 (1層より細かい)

3. 暗灰褐色粗砂 (1層より明るく、黄色が強い)

4. 暗灰褐色粗砂 (1層より灰色が強く明るい)

5. 黄褐色粗砂

6. 黒褐色土 (粘質)

6'. 黒褐色土 (粘質、地山混)

7. 黒褐色土 (粘質、灰白色地山ブロック含)

8. 暗灰褐色土 (シルト)

9. 灰褐色土 (鉄分含)

10. 暗灰褐色土 (IV層より灰色が強く明るい)

11. 黒色土 (地山ブロック含)

12. 暗灰褐色シルト

地山：黄灰白色シルト

SX-808

1. 黄灰白色シルト (粘質)

2. 暗灰白色シルト (粘質)

SX-801

1. 高暗褐色シルト

2. 高暗灰褐色土 (多量の炭化物含)

第5図 調査区北西辺土層断面図

により大まかな特徴がある。自然堆積か否かでも差があるが、大まかには弥生時代前半期は地山質の黄灰白色シルト、奈良・平安時代は暗灰褐色土、中世は灰褐色土となる。古墳の周溝の上位

P8004

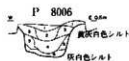
S X 801 (古墳か)



1. 黒灰褐色シルト (2層の炭灰混)
2. 黒灰褐色シルト (黒色炭灰含有層一帯状)
3. 黒灰褐色シルト (黄灰白シルトないしは灰褐色砂の地山土混じり)
4. 黒灰褐色シルト (腐状)
5. 黒灰褐色シルト (炭粒多い)
6. 灰褐色シルト (炭粒最も多い)
7. 明灰褐色シルト (かたくしまる)
8. 明灰褐色シルト (地山質、炭粒含む)
9. 濁黄灰褐色砂混土
10. 灰黄褐色砂混土
11. 濁灰黄褐色砂混土
12. 灰褐色細砂混土 (細かい炭粒含む)
13. 灰褐色細砂混土 (12より濃い色調)
14. 濁黄灰白色シルト (地山質、細かい炭粒含む)



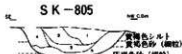
1. 濁灰褐色-濁灰白色粘土 (多量の炭混じり)
2. 灰白色シルト-粘土 (炭粒含む)
3. 濁灰褐色砂
4. 灰白色細砂 } 地山か?
5. 黄灰色砂



1. 黒灰褐色シルト
2. 灰褐色シルト (粘質、炭粒多い)
3. 黄灰色シルト (粘質最も強い、炭粒多い)
4. 濁灰褐色シルト (粘質最も強い、炭粒多い)
5. 黄灰褐色シルト (黄灰白シルト地山混)
6. 濁暗灰褐色シルト (灰白色シルト混)



1. 黄褐色シルト (弱粘質)
- 1'. 黄白色粘の地山質土
2. 灰褐色シルト (弱粘性、黄灰白色粘土混、炭粒多い)
3. 黄褐色シルト (粘結質、炭粒多い)
4. 濁灰褐色シルト (灰白色地山質土混)
5. 灰褐色シルト (各層位レベルの地山質土混)
- 5'. 黄灰白色地山シルト混
 - a. 灰白色粘土
 - b. 灰色細砂
 - c. 灰と混じ
 - d. 淡褐色細砂



1. 明灰褐色シルト (粘質、僅多量の炭混含む)
2. 灰褐色シルト (粘質、炭粒中量含む)
3. 灰褐色シルト (最も強い粘質、僅多量の炭粒含む)
4. 黄褐色細砂 (混シルト、炭粒少量)
5. 濁黄灰褐色細砂 (混シルト、炭粒少量)



1. 濁暗灰褐色土
2. 暗灰褐色土
3. 濁暗灰褐色土 (地山と混合)
4. 濁灰褐色土 (地山と混合)
5. 濁黄褐色土
6. 濁黄灰白土 (粘質)



1. 灰褐色土
2. 濁暗灰褐色土 (濁褐色土と灰褐色土の混合)
3. 濁灰褐色土 (地山と灰褐色土の混合)



1. 灰褐色土
2. 濁暗灰褐色土
3. 濁暗灰褐色土 (2層より薄い) (3, 4層間に炭が入っている)
4. 濁灰褐色土 (小さい地山のブロック、灰白色、黄灰白色含む)
5. 濁黄灰白色土



1. 灰褐色土
2. 濁暗灰褐色土 (4層よりも明るく、粘性が強い)
3. 濁黄褐色土
4. 濁明灰褐色土
5. 濁暗灰褐色土 (地山と混合)

0 2 m

第6図 弥生時代の遺構

には特徴的に黒色の薄層が堆積する。

2. 弥生時代

弥生時代の遺構は大きく中期初頭のものと同後期末のものに分けられる。前者は調査区北部に遺構が偏在する。さらに2群に分けられ、一群はG7区SK805・808、P8003・8004・8005・8006、もう一群はE・F6区SK42・43、E5区SK717である。掘り方の壁が比較的立つものは、P8004・8006の上層断面図(第6図)にみるように柱穴の可能性が高い。P8005からは枕木状の木材が出土した。この周辺に平地式建物ないしは掘立柱建物が存在したのであろう。土坑は掘り方がすり鉢状となるもので、上面が地山質の埋土をもち、その下に灰褐色土で細かい炭粒を多く含む層を有するのを特徴とする。時期は弥生時代中期初頭を中心とする。

弥生時代後期の遺構は明確なものはF6区SK809のみである。このほか、時期を特定する遺物は出土しなかったが、これと切り合うSD826は埋土の特徴から同後期頃のものと同推定された。SK809は長軸2.1m、検出面からの深さ0.2mの浅い長楕円形の土坑で大量の土器が出土した(第31・32図)。完形品はなく、破片をまとめて廃棄したものと思われる。器種別では高杯形土器が多い。出土土器は弥生時代後期末の「月影式」でも相対的に古い特徴を持っている。

このほか、同時期のものは前方後方墳ST11後方部北側の周溝やSD802南端部からも断片的に出土した。

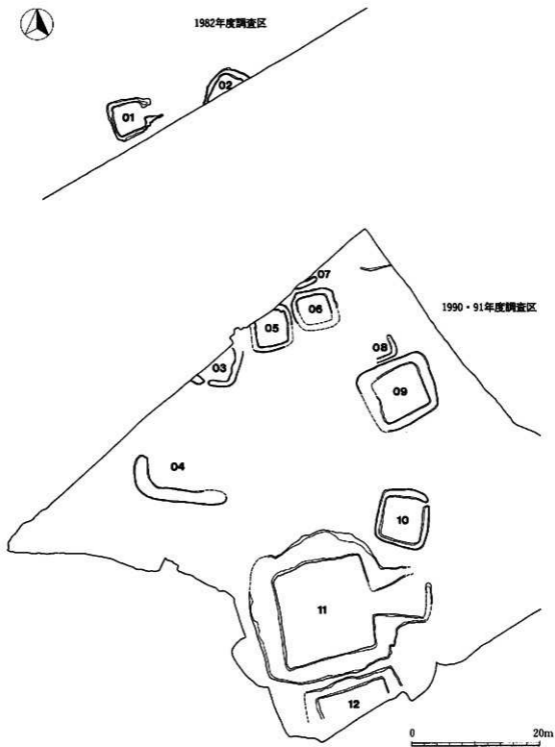
3. 古墳時代

今回の調査の大きな成果の一つは戸水C古墳群の本体を検出したことである。第6次調査では小規模な前方後方形の周溝を検出したが、明確な群構成が確認されなかったことから、「古墳」と見るのには慎重な意見が多かった。しかし、今回検出されたものと照合してみれば、若干の未調査区を残すもののほぼ同一の群に含まれる古墳と見て間違いないだろう。今回、それらを含めて通し番号で古墳名を付した。

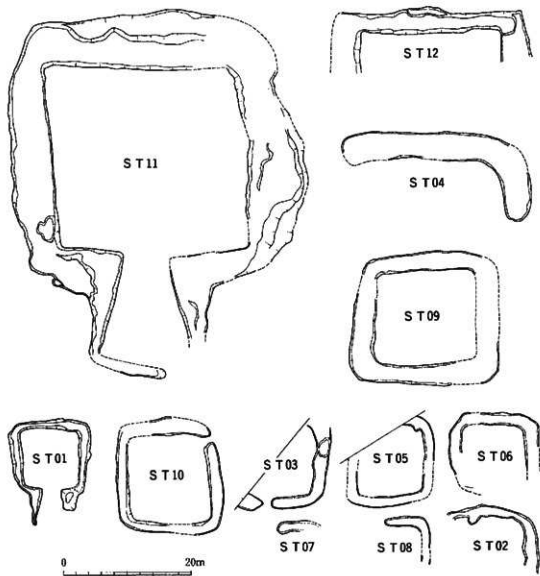
本遺跡の集落は弥生時代後期末をもって廃絶し畠地にかわる。古墳時代初頭の白江式段階から造墓が始まるとみられるが、ほぼ同時期の集落は現在のところ、南東約300~400mにある近岡ナカシマ遺跡が知られている。発掘調査された区域では白江式段階で溝が大量の土器の廃棄とともに埋められていた。また本遺跡でも、第1・2次調査区北方の溝に白江式から古府クルビ式期の溝群があり、建物遺構は不明であるが当該期の集落が存在したものとみられる。

古墳群はいずれも墳丘が削平され周溝のみを検出したものである。埋葬施設の検出されたものはない。古墳群は微高地に沿って南北に細長い分布を示す。南端はさらにのびるであろうが、それ以外はほぼ今回の調査の範囲で確定できた。第6次調査の2基を合わせると12基が確認されたことになる。その他、G7区SX801は古墳周溝埋土と同一の落ち込みで、当該期の土器(No62)を出土しており古墳の可能性が高い。H5区にも同様の溝がある。

古墳はいずれも方墳ないし前方後方墳で円墳はない。主丘部の規模では一辺5~7m前後の小型、約10m前後の中型、約15m以上の大型がある。大型・中型は幅広の周溝を持ち、小型は幅が



第7図 古墳群分布図



第8図 古墳一覽図

狭く深い傾向がある。墳丘の盛土形態の応じた必然的なものであろうか。最も小型のものは一辺約5mでよく揃っている。これに前方部が伴うのがST01である。大・中型はST04・11・12がある。大型のST11は前方部を持つが、中型でも大きめのST04・12が前方部を持つかは不明である。

ST11は前方部を東に向ける。全長24.0m、後方部約16×15m、前方部前端幅約7.5m、くびれ部幅4.0mである。全体に主軸対象形とはなっておらずゆがみがある。周溝は墳形にそってまわり、前方部前面にも幅の狭い溝が巡る。ただし北東端は切れている。周溝は墳丘側が一段深くなっており、まず主丘部に幅広の溝を掘削して盛土を施し、その後整形をかねて墳丘側を深く掘ったと考えられる。前方部の溝は南側で見るようにこの部分からのつながりとして捉えられ、全体

の墳丘築成工程の中では前方部の構築は比較的后半になされたとみられよう。後方部南側の周溝の急な立ち上がりに見るように全体に墳丘側の整形は丁寧である。周溝埋土は第10図のとおり、おもに墳丘側から自然堆積していった様子がよくわかる。

ST11に隣接するST10の周溝は同じく北東端が切れている。ST03や04は切れているのではなく遺構面が削平されてしまったものである。ST11の北側は、遺構面が極端に削平されたことを想定しなくてよければ、古墳の空白地帯といえる。

古墳の時期を考える手だてとなる土器が出土したのはST01・04・11・12の4古墳とSX801である。ST01は全長約8.0mの前方後方墳でくびれ部の両側周溝底から粗製の壺形土器といわゆる東海系の高杯形土器が出土した。白江式期である。ST04は南側の周溝底から高杯形土器(Na46)と小型高杯形土器(Na47)のセットが据え置かれたような状態で出土した。出土位置は溝内でも墳丘と反対側の壁近くである。古府クルビ式とみられる。ST11ではくびれ部を中心にいずれも埋土中から破片となって出土した。Na53はくびれ部の5区を中心に、Na54は同じくくびれ部から南側周溝よりで、Na55は前方部北側で、Na56は比較的まとまって後方部南西コーナー墳丘外よりから出土した。Na53・54には底部付近に焼成後の穿孔が認められる。出土土器は多型式の壺形土器からなるのが特徴である。時期は古府クルビ式とみられる。ST12では周溝西側で甕形土器(Na50)が、西側で小型鉢形土器(Na48)が墳丘から流れたような状態で埋土中から出土した。Na49の壺形土器は東側を中心に細片となって出土している。土器はST11の次段階に位置付けられ、本古墳群の中では現在最も新相を示すものである。なお、H2-1区SD802の底から古府クルビ式前後の土器(Na57~59)が出土した。SD802自体は7世紀初頭の溝であり、それらはこの段階に流れ込んだものであろうが、ST11・12から流れ込んだ可能性がある。SX801は埋土中から底部穿孔した薄手の壺形土器が出土している。古墳の可能性が高く、周溝幅からすればST11同様、本古墳群の中では大型のものとなろう。

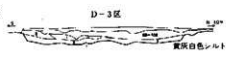
古墳時代初頭の白江式期に属するものはST01、SX801、古府クルビ式期がST04、ST11、次段階(高島式)がST12となり、全体には北から南に遺構が展開していったように見える。ただし、遺構単位が複数あるとも見られ、各々の展開は上記のように単純ではなからう。

戸水C古墳群は高島式をもって消滅する。古府クルビ式~高島式期には各地の伝統的集落遺跡や墳墓群が解体・消滅し、その後あらたに大型前方後円墳や円墳群が登場するなど、地域社会が政治的に再編成されたとみられる南期にあっている。本古墳群の展開はこの間にあって当該時期の政治的動向を端的に示した事例といえよう。その母体集団については、金沢平野沖積地では畝田・寺中地区に有力な集団の存在が想定され、藤江C遺跡や西念・南新保遺跡では古墳時代前期の墳墓が発見されており、これら集落や古墳群の分布から考えると本古墳群は大野川左岸の近岡・大友・戸水一帯を生活基盤とした集団の墓域と考えられる。

古墳群消滅後の遺物としては水晶切子玉(Na567)、石製紡錘車(Na568)がある。後者には文字らしき線刻があるが定かではない。ともに単独出土であり時期は特定できないが、古墳時代後期のものであろうか。第6次調査区では6世紀前半から半ばにかけての集落遺跡が存在する。



ST-04



1. 黒色土 (黒ボク状で軟、やや粘性)
2. 黒灰褐色土 (シルト質)
3. 暗灰褐色土 (やや粘りを感じる、黄灰白色シルトの地山ブロック多く含む)
- 3' 暗灰褐色土 (地山質土を多く含むシルト質が強い)

ST-06



1. 灰褐色土
2. 濃暗灰褐色土 (黒褐色土と灰褐色土の混合)
3. 濃灰褐色土 (地山と灰褐色土の混合)



1. 濃暗灰褐色土 (地山ブロック含む)
2. 濃暗灰褐色土 (黒褐色土と灰褐色土の混合)
3. 黄灰白色土



1. 濃暗灰褐色土
2. 濃灰褐色土 (灰白色土と黄灰白色土の地山ブロック含む)
3. 黒色粘地 (灰白色土と黄灰白色土の地山ブロック含む)



1. 濃暗灰褐色土
2. 濃暗灰褐色土
3. 濃暗灰褐色土 (粘質、地山ブロック含む)
(3層の上面に約1cmの黒色炭化物層)

ST-09



1. 暗灰褐色土
2. 濃灰褐色土 (灰多量に含む)
3. 灰褐色土 (黄灰白色地山ブロック少量含む)
4. 濃灰褐色土 (黄灰白色地山ブロックが主体)



1. 暗灰褐色土
2. 暗灰褐色土 (1層より薄い)
3. 黒褐色土 (灰多量に含む)
4. 灰褐色土 (黄灰白色地山ブロック少量含む)

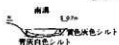


1. 灰褐色土 (灰少量含む)
2. 灰褐色土 (黄灰白色地山ブロック含む)

ST-10



1. 黒褐色シルト (砂少量混)
2. 灰褐色シルト (やや粘質)
3. 2層に黄灰白色シルトの地山ブロック散在
4. 濃灰褐色シルト (黄灰白色シルト混)
5. 濃灰褐色シルト (黄灰白色シルトが層(縞状)に堆積)



1. 黒褐色シルト
2. 灰褐色シルト (薄く縞状に堆積)
3. 濃灰褐色シルト (黄灰白色地山ブロック含む)
4. 濃灰褐色シルト (青灰白色地山混)



1. 黒褐色シルト (砂少量混)
2. 黒褐色シルト (やや粘質)
3. 2層に黄灰白色シルトの地山ブロック散在
4. 濃灰褐色シルト (黄灰白色シルト混)



1. 黒褐色シルト
2. 黒褐色シルト (地山混)
3. 濃灰褐色シルト (地山混)

ST-12



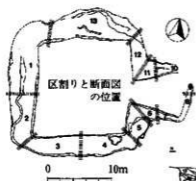
1. 黒灰褐色シルト (細かい灰粒含む)
2. 黒色有機物層
3. 淡灰褐色シルト (粘り弱く粘性強い)
- 3' 3層より色調黒っぽい(地山混)
4. 黒褐色シルト (地山混)
5. 濃灰褐色細砂 (黒褐色土混)
6. 濃灰褐色シルト



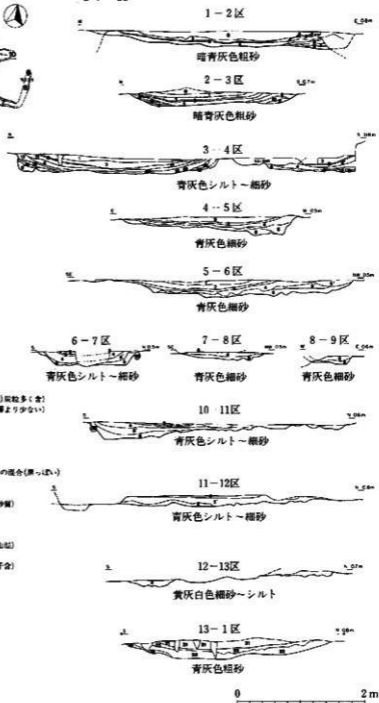
7. 濃暗黄褐色シルト
8. 灰褐色シルト (粘質、地山混)
9. 灰褐色シルト (粘質、少量の地山混ざる)
10. 濃黄褐色シルト
11. 濃黄褐色シルト (12層より地山土が少なく)
12. 濃黄褐色シルト (地山と黒褐色土のブロック含む)



第9図 古墳周溝土層断面図

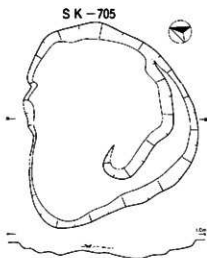


ST-11



0. 暗青褐色粗砂
1. 黒灰褐色シルト(粗砂混、細かい(2-3mm)粒较多く含)
2. 黒灰褐色シルト(粘質、細かい炭粒含、1層より少ない)
3. 黒色有機物層
4. 淡黒灰褐色シルト(粒子細かく粘性強い)
- 4'. 4層より色深黒い
- 4''. 4層より色深黒い
5. 地山質土と4層の混合
- 5'. 地山質土と4層、明黄褐色土、黒色シルトの混合(黒っぽい)
- 5''. 地山質土と明黄褐色の混合
6. 淡暗灰褐色シルト～細砂
7. 淡黒灰褐色シルト(4層より粘性弱く、粗砂混)
8. 暗黄灰褐色性砂(黒灰褐色シルト少量混)
9. 淡黒灰褐色細砂
10. 灰褐色シルト(粘質)
11. 暗灰褐色シルト(粘質、青灰色シルトの地山混)
12. 明灰褐色シルト(地山混)
13. 暗灰褐色シルト(青灰色シルトと粗粒砂若干含)
14. 淡暗灰褐色シルト～細砂(アロックス状)
15. 黒灰褐色シルト(地山アロックス)
16. 淡暗灰褐色シルト(地山混)
- 16'. 16より色深黒い
17. 黒褐色シルト
18. 地山アロックス
19. 暗青褐色シルト
20. 灰黒褐色土
21. 黒褐色土(粘質、灰褐色砂混)
22. 淡灰褐色土(粘質、上面に黒色炭灰層)
23. 暗灰褐色土(粘質)
24. 23層と地山の混合土

第10図 古墳岡清土層断面図

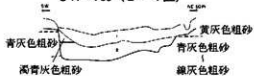


SK-708 (D-3区)



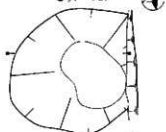
1. 灰褐色土と黒褐色土と黄灰白色地山土（中層）の混合
2. 1層より地山質土の割合高い
3. 2層より地山質土の割合高い（黒褐色土は少ない）

SK-709 (D-4区)



1. 濁灰褐色土（上面に粗砂多）
2. 濁青灰色粗砂混土

SK-717



灰黄色シルト
明青灰色砂層
青灰粗砂

1. 灰黄褐色シルト（地山質）
2. 明青灰シルト（粘性、炭化物较多）
3. 灰黄色土（粘質）
4. 濁青灰褐色粗砂混土（青灰粗砂（地山）を含む）

SK-711 (D-5区)



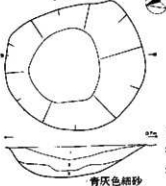
1. 濁灰褐色土（粘土→灰褐色土→黒褐色土）
2. 濁灰褐色土（灰褐色粘土→黄褐色→青灰色砂層、黒褐色土は少量）
- a. 黒褐色土ブロック
- b. 黄褐色砂→シルトの地山ブロック

SK-715南 (E-4区)



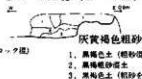
1. 黒褐色土（粗砂混）
 2. 黒褐色土（粘質をおびる）
 3. 灰褐色粗砂混土
 4. 黒褐色土（砂混で粘質である）
- 4・2層上層に黒色炭灰層

SK-716



1. 暗灰色土（シルト質）（オリーブ灰色シルトの地山ブロック混）
2. 灰褐色土（シルト質）（炭化物较多）
3. 濁灰褐色土（地山シルトと地山粗砂混）

SK-715北 (E-4区)

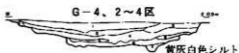


1. 黒褐色土（粗砂混）
2. 黒褐色粗砂混土
3. 黒褐色土（粘質を含む）

0 2 m



1. 灰褐色土
2. 灰褐色土 (シルト、1層より明確(茶色がかる))
3. 暗灰褐色土 (粘質)
4. 暗灰褐色土 (粘質、3層より明確(灰い))
5. 灰黄褐色砂 (細砂)
6. 灰黄褐色砂 (粗砂)
7. 灰黄褐色砂 (中粒砂、黄色が強い)
8. 灰黄褐色砂 (細砂)
9. 灰黄褐色砂 (中粒砂)
10. 灰褐色土
11. 黒色粘土



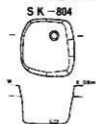
1. 暗灰褐色シルト (砂質)
2. 黒褐色シルト (炭化物質)
3. 暗灰褐色シルト
4. 黄灰黄褐色砂 (粗砂~細砂)
5. 黒褐色シルト (灰褐色砂混)
6. 濃暗黄灰褐色砂 (黒色粘土混)
7. 黒色粘土 (黄褐色砂少量)



1. 暗灰褐色シルト
2. 黒褐色シルト
3. 灰褐色シルト
4. 暗灰褐色シルト (小さな地山ブロック混)
5. 黒褐色シルト (青灰色地山混)
6. 濃黄灰色砂 (粗砂の中に細砂小混)
7. 黒色シルト (青灰色地山混)
8. 黒色シルト (粘質)



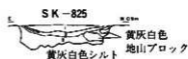
1. 暗灰褐色シルト (砂質、灰が混)
2. 灰褐色シルト (粘質)
3. 灰褐色砂 (細砂 (上の方) - 粗砂 (下の方))
4. 白色粘土 (砂混じり)
5. 黒褐色シルト (1層より暗い)
6. 濃黒褐色シルト (地山ブロック少し混)
7. 濃黒褐色シルト (地山ブロック多量に混)



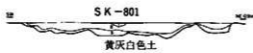
1. 暗灰褐色シルト (炭粒混)



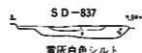
1. 暗灰褐色シルト (地山混)



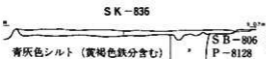
1. 暗灰褐色シルト (炭粒多(含))
2. 暗灰褐色シルト (細粒、上位に炭層を含、地山混)
3. 暗灰褐色シルト (細粒、大形の地山ブロック含、炭粒はあまり含まない)



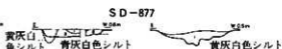
1. 灰褐色土
2. 濃暗灰褐色土
3. 濃暗褐色土 (地山混)



1. 黄灰褐色土
2. 濃黄灰褐色土 (地山ブロック含)



1. 暗暗灰褐色シルト (やや粘質、地山混)
2. 黒褐色粘土と青灰色シルトの混合土 (塊の土)



1. 灰褐色シルト
2. 暗灰褐色シルト



4. 7世紀前半

明確な建物遺構は検出できなかったがSD802から当該期の土器が出土した。溝は幅約2～3m、深さは約0.5m。第5・6次調査区へのびていく。最上層は平安時代の土器を多く含んでおり、当時においても僅かなへこみであったとみられる。上層はシルト質土で、下層は砂層を中心とする。土器の出土地点はG6・7区を中心として北半が圧倒的に多い(第～図)。砂層上位からの出土が多かった。器種は通有の土器セットのほか、甕が多量出土している点が興味深い。甕が水場から出土する例は小松市佐々木ノテウラ遺跡など全国的にも類例があり、祭祀と関連する例も報告されている。製塩土器も多く出土している。北加賀の7世紀前半に特徴的な砂粒がすくなく赤色粒を含む、橙褐色軟質のものである。ほとんどが尖底であるが、1点のみ小さな台部を持つものがある。147は上面の8世紀以降のものと思われる。

SD802の食器類は須恵器が約65%を占める。土師器種類の黒色率は約4割である。第6次調査の6世紀前半代の10号土坑ではそれぞれ25～30%、9割以上であり、この段階で大きな変化を示していることが分かる。ただ、同じ頃の南加賀では8～9割程度は須恵器が占めることからすれば、依然として土師器が多いと言えるかも知れない。須恵器は、能美窯産・南加賀窯産が主体を占め、羽咋窯産、高松・押水窯産が約15%含まれている。6世紀代までは南加賀窯産がほとんどであったが、この時期から能美窯はじめ各窯が生産を活発化させたためであろう。

土器の他には砂層中から長さ158cmの棒状木製品が出土した(木器No35)。片方の端部には両側からえぐりを入れ頭部を作り出している。

5. 8世紀

8世紀代の遺構としては、SK705、SK804、SE801などがある。SK705はC3区にある不整形の土坑で、径約2.5～3.0m、深さ約0.3m。埋土は濁暗灰褐色土で、土器はほとんどが上半から出土した。8世紀末を中心とする。No333は9世紀代に下る(混入か)。墨書土器が1点含まれる。「J」ないしは「万」か。

SK804はG7区にあり、0.9×0.85m、深さ0.6mの隅丸長方形の箱形の上坑である。埋土は濁暗灰褐色土で、床面から正位で完形の杯B1点(No342)のみが出土した。埋納品であろう。時期は8世紀中葉(Ⅳ1期)である。

SE801はF・G5区の井戸である。井筒はごく一部を除いて遺存しなかったが掘り方からは方形の縦板組の構造と推定される。土器は8世紀末頃～9世紀初頭頃のもの出土している。上層からNo248とともに胴部完形の250が出土したが、後者は古墳時代初頭頃のものであろう。

8世紀代の土器はこのほかにも包含層などから断片的に出土している。極僅かの8世紀前半代の土器を除けば、定量的に出土してくるのは8世紀第4四半期からと言える。今回の調査では確実にこの段階の建物跡とできるものは検出できなかったが、井戸や土器廃棄土坑から見てその存在はほぼ間違いないであろう。注目すべきは、G5・6区から出土した墨書土器の「官」2点(No428・429)がともにこの時期のものであることである。この段階に「官」と呼べるような施設が

存在したことを示すものとして非常に重要である。

6. 9世紀～10世紀

掘立柱建物跡等 古代の掘立柱建物跡は11棟が確認できた。

SB701は3間×2間の東西棟で主軸はN75°E。柱穴掘り方は方形で一辺80cm前後。P7053とP7061は多量の炭化物を含む。

SB702は3間×2間の東西棟で主軸はN75°E。柱穴掘り方は方形で一辺80cm前後。SB701と柱筋を揃えている。両者とも柱穴掘り方埋土に暗灰褐色土を多く含むもので共通点が多い。

SB703は3間以上×2間の南北棟で主軸はN8°W。柱穴掘り方は方形で一辺80cm前後、前記建物よりやや大きめでより方形に近い。埋土は地山質土である。南東隅柱穴P7059にのみ礎板が遺存した。遺構面の削平が著しく北側の柱穴は確認しづらかった。桁行は3間以上となる可能性もある。

SB704は4間×2間の南北棟で主軸はN14°W。柱穴掘り方は略方形で一辺50～60cmと小さい。埋土は暗灰褐色土を多く含む。北梁列以外は攪乱が著しく検出できた柱穴は少ない。

以上は第7次調査の建物跡である。SB701・702柱穴からは出土状態は定かでないが8世紀後半から9世紀中葉までの土器が出土した。SB702の柱穴に切られたP7060から8世紀後半の杯B(No171)が出土した。時期を特定する遺物に乏しいが後述する井戸との位置関係などから9世紀前半代のもと考えたい。SB703、SB704からは9世紀前半の遺物出土している。両建物は主軸方位や掘り方の形状・埋土がかなり異なることから同時期のものではなかろう。SB703は井戸SE702との対応関係を想定すれば9世紀中葉となる。

SB801は3間×2間の東西棟で主軸はN90°。東側の梁が1間庇状に張り出して桁行が4間となる。柱穴掘り方は方形で一辺70～80cm。掘り方埋土は暗(黒)灰褐色土混じり。柱痕跡は比較の見やすかった。P8118の柱痕部から完形の内黒土師器椀(No176)が出土した。中央のP8083は柱痕跡はなく、埋土は地山質土がほとんど混じらない黒褐色土で多量の炭を含んでいた。上位からは鉄滓が出土した。P8079柱穴南西隅から約35cm西で銅銭9枚(隆平永寶含む)が出土した。SD802の上面を掘り下げ中、検出面より約20cm下から出土しており、確認できなかったが、何らかの遺構に伴っていたのかもしれない。本建物の地鎮等の祭祀行為に使われた可能性があろう。

SB802は3間×2間の東西棟で主軸はN90°。柱穴掘り方は方形で一辺110～120cmと大きい。掘り方埋土は地山質土が主体である。柱痕跡から柱材の径は約30cmと推定される。柱は抜き取られたとみられる。

SB803は7間以上×2間・西面庇付(東は不明)、南北棟で主軸はN1°W。掘り方埋土は黒褐色土をかなり含んでいる。P8291には径30～35cmの柱根が遺存した。基部には筏穴がある。P8168とP8176は他の偶柱と違い、ともに10～15cmと浅い柱穴で礎板が出土した。関連柱穴が周りで見いだせないことから本建物に伴う可能性を考えた。

SB804は3間×2間の南北棟で主軸はN1°W。梁行の中柱は存在しない。柱穴掘り方は方形で一辺70cm前後と最も小さい。埋土は黒褐色土混じり。

SB805は5間以上×2間、南北棟で主軸はN0°。柱穴掘り方は方形・長方形で一辺80～120cm、SB803に比して深い。埋土は地山質土を主体とする。北側の梁中柱は検出されなかった。P8304にのみ礎板が遺存した。

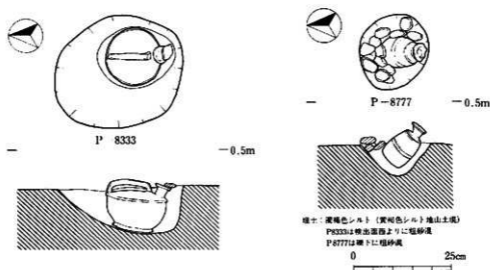
SB806は2間×1間の東西棟で主軸はN0°。柱穴掘り方は方形で一辺80～100cm。埋土は地山質土を主体とする。北側の中柱は精査したが検出されなかった。

SB807は2間以上×2間の南北棟で主軸はN0°。柱穴掘り方は方形で一辺約70cm。埋土は暗灰褐色土混じりで、SB803の柱穴に類似する。

SA801はF4区で検出したもので2個の柱穴からなる。主軸はN10°W。掘り方は一辺約70cmの方形で、埋土は地山質土を主体とする。方位や柱穴埋土からはSB703に付随する可能性がある。門のような施設であろうか。

時期については、SB801の柱穴抜き取り後の埋納土器が手がかりとなる。それによればSB801の廃棄年代は10世紀前半といえる。建物は、方位はほぼ座標北で揃うが柱穴掘り方や埋土の特徴からすると大きく2群に分かれる。相対的に掘り方が大きめで深く、地山質の埋土を主体とするものと、掘り方が小さく、暗褐色土混じりの埋土のものである。前者はSB802・SB805・SB806、後者はSB801・SB803・SB804・SB807である。建物群は全体配置から見ると3ブロックに分かれている。東側には南北棟の大型建物のSB805とSB803、北側には東西棟で3～4間規模のSB802とSB801、西側には小規模建物のSB806とSB804がある。大型建物の同一敷地内での建て替えから類推すると、一時期に3棟の建物が配列され、それが一斉に建て替えられたのではないかと考える。各建物の柱穴掘り方埋土から出土した土器群の時期をみると前者の一群が相対的に古い様相を持つ。以上から前者を9世紀後葉の建物群、後者を9世紀末～10世紀前葉ごろの建物群と考えたい。全体配置の企画性については未検討である。

建物に付随して地鎮が行われたとみられるピットがある。I2～4区のP8333とP8777である



第13図 土器埋納ピット実測図

(第13図)。この付近は包含層が残っており、遺構検出は移植ゴテを用いて行ったが、比較的良好な状態で検出できた。上面の削平は少ないと考えられる。両者は心々で1.4mの距離をおいていた。

P8333は径70cm×60cmの楕円形で検出面からの深さは25cm。完形の平瓶(No211)が口を南に向けて出土した。ピットは片側の壁が直立し、反対側が緩い傾斜となる。下場は土器が収まる大きさである。埋土は地山質土混じりの濁褐色シルトで上面に粗砂が混じる。土器埋納後埋め戻されたとみられる。平瓶の口には偏平な小石が1個蓋をするように置かれていた。やや前へずれたような状態で検出された。

P8777は径35～40cmのほぼ円形で、深さは20cm。底面は小さなすり鉢状を呈する。徳利形小瓶(No210)1点が出土した。埋土はP8333と同様である。小瓶は約45°の角度で、平瓶同様、南に口を向けて埋納されていた。口縁部が若干欠けている。ピットの北側から東側にかけては小瓶の安定化のため小石が詰められていた(13個)。小石の下には粗砂が混じていた。口縁部付近では小石は検出できなかった。平瓶と同じく小石で口を塞いでいた可能性もあるが定かでない。

この量法の平瓶と小瓶は酒器ともみられ、他の一括土器埋納の事例からしてセットであったと考えられる。建物の地鎮にこの種の土器が用いられた事例は、県内では鹿島町武部ショウブダ遺跡(1983年、県埋蔵文化財センター調査)が知られる。大型建物に近接した2個のピットに10世紀初頭頃の双耳瓶、長頸瓶がそれぞれ埋納されていた。福井県武生市下ノ宮遺跡では皇朝銭を伴って9世紀代の平瓶と長頸瓶などが埋納されていた(久保智康「皇朝銭を埋納する祭祀の一類型」『福井県立博物館紀要』第1号、1985年)らしいが、この例は建物の地鎮ではなく、「桑田郷」の墨書にみるような在地共同体のなんらかの祭祀に関わるような事例であろう。また、これら「甕」の瓶(酒器)と認識される器種は、奈良県榛原町南山3号墳の9世紀後半の木棺墓から平瓶と小瓶が出土するように、墳墓の副葬品にも用いられた。いずれにしても、本例は埋納状況が知れる貴重な例となろう。

このほか、P8104から完形の皿A(No222)が出土している。上記のような建物との関係は定かでない。時期は9世紀末頃である。

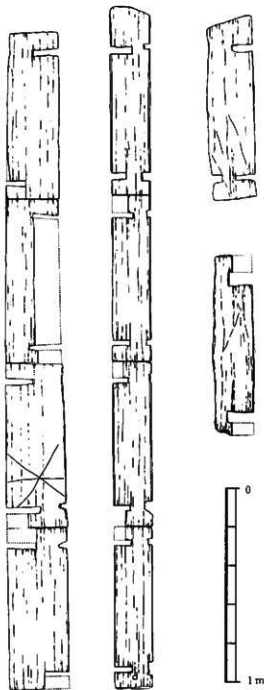
井戸 当該期の井戸は、8世紀に遡る可能性のあるSE801を除けば他に3基がある。

SE702はE3区にある。周囲は南北方向に粗砂層が上面に見える「水道(みち)」にあたり、その延長線上には数多くの井戸が営まれている。本例においても地下水位は高く、掘削すると掘り方の壁を維持するのは困難である。検出した掘り方は上面が不整形、下半が略方形の2段掘りとなる。埋土からみて廃棄後はほぼ自然堆積したようである。井戸側は広義の蒸籠組みで3段積みである。上段の2枚が失われていた。下段・中段は東→南→西→北と時計回りに組む。上段は2枚しか遺存しないが、切り込みの状況から東→北の順が想定できるので前記と同様と考えられる。下段の板は縦割れが著しく、東側(No2)はその切り込み間の上半部が割れ落ち、別の板(No13)で修復している。そして、その間に隙間調整のためさらに別の板(No14)を横にして挟んでいる。底に一枚の柱目板を2枚に剥いだもの(No11・12、光谷拓氏によればスギ材で年輪は37本あり、最外年輪は687年)をずらして敷き、浮き上がりを防ぐため2本の細棒(No15・17)で留めている。これはその大きさや棧の留め方からみて、井戸側埋設後に上部内側から入れたも

のとみられる。北側のみ外側に接して基部の折れた7枚の矢板が打ち込まれていた（遺存していた）。また、北側の下段の板の外側西寄りに第14図にみるような線刻がある。これは転用前の線刻の可能性もあるが北西隅という位置からして祭祀的な意味のあるものかも知れない。井戸側で

興味深い点は、ノコギリで切断された各段4枚の板がそれぞれ長大な一枚の板に接合することである。さらに切り込み外側の割れた部分を掘り方内に埋め込んでおり、これと横板とで接合する例が存在する。その他の廃材とみられる木片も掘り方から出土した。これらの点から、板の切断から組み合わせまで現場において行われたものと考えられる。ほぼ原形を復元できた中段板は長さが約3.55mとなり、ほぼ2間分にあたる。片側には方形の小穴があき、反対側は斜めに切られている。同様の端部は東上段の板にもみえる。また小穴のあいた板はSE704の縦板に多くみることができる。下段の板は幅広であり、両端部は切断されて原形は分からない。方形の小穴のあく2間程度の板材については、使用方法の復元はいくつか想定できるが、とりあえず掘立柱建物の壁材の可能性を考えておきたい。樹種はスギとみられるが同定は行っていない。最下層の砂層からは墨書土器「友」2点（No238・244）が南西隅から出土した。祭祀に関わるものとして斎串（No41）や土器を打ち欠いた円盤状のもの（No491～494）が出土している。後者は類例の中では時期的に古く注目される。そのほか、第6層上位から曲げ物底板が、第3層から「依」墨書土器が出土した。本井戸は最下層の土器から9世紀中葉のものとみられる。

なお、本井戸は南東側にも若干の縦板列を確認しており、作り替えがなされて



第14図 SE702井戸側接合状況

SE702井戸の復元

SE702は地山面に砂層が露出する地下水位の高い部分に作られている(写真5)。したがって、井戸側全体を埋設するほどの大きな掘り方を作って、そこへ井戸側を納めようとしても、掘り方の壁が崩れてそのような方法をとることができない。

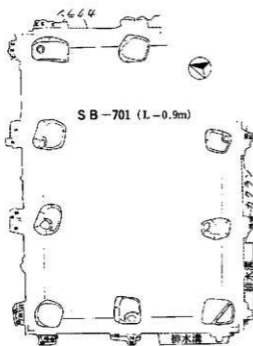
実際の遺構においては、井戸側にあわぬほど大きく浅い掘り方を掘り、その中心に掘り方の不明確な井戸側が埋設されている。さらに、北壁の外側に縦板が打ち込まれていた(写真図版26下段)。これらの点を考慮し、以下の写真に示すような方法でSE702井戸の復元実験を試みた。

写真解説

- 1: 1枚の板材をノコギリで切断して部材を作り、順に組みあげていく。組む過程で仕口のうまくかみ合わない部分は再調整する(実験用の井戸側の組み方は実物とは異なる)。実際の井戸材にもそのような形跡が認められている。
- 2: 相欠きの仕口を施す際にたくさんの木っ端が生じる。SE702ではこれらを掘り方に埋めていた。現場で井戸側を製作したことが想像できる。
- 3: 設置箇所を一定の掘り方を作り、第1段目を掘えつける。井戸側内の砂を掘り出す。
- 4: 井戸側の上から圧力を加えながら、どんどん中の砂を掘り出し、井戸側を沈めていく。1段目は容易に設置できたが、2段目からは、井戸側内の砂を掘り出しても、その外側の砂が水圧で底から中へ入り込んでなかなか深くはならない。
- 5: そこで、SE702の北壁沿いに打ち込まれていた縦板を思い出し、外からの砂の進入を防ぐ目的で同様の縦板を打ち込んだ。予想どおり、砂の流入は減少し、なんとか3段目までを設置し終える。それでも写真の水溜まりにみるように、相当量の砂が井戸側内部へ流れ込んだ。
- 6: 縦板を抜きとる。SE702の縦板は、板の頭部が乱雑に折られた状態であり、当初からある用途での使い捨てであったのだろう。この縦板は、板の合わせ目からの砂の流入を防ぐ機能を持っており、抜き取らずに遺棄されたのであろう。
- 7: 掘り方を埋め戻す。
- 8: 完成。



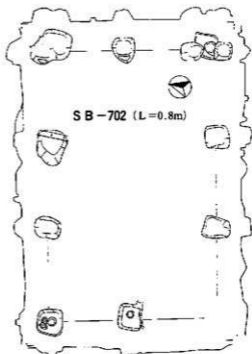
SE702井戸の復元作業



SB-701 (L=0.9m)

SB-701:

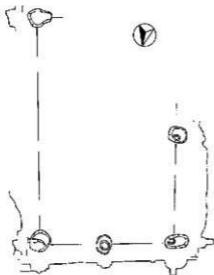
1. 暗灰褐色土 (粘質)
2. 暗灰褐色砂泥土 (3より深い色)
3. 暗灰褐色土 (炭粒中量)
4. 暗灰褐色土 (5より色深い)
5. 黒灰褐色土 (多量の炭を含む、黒灰白色シルトブロック少量)
6. 黒灰褐色土 (7より色深い)
7. 黒灰褐色土 (多量の炭を含む)



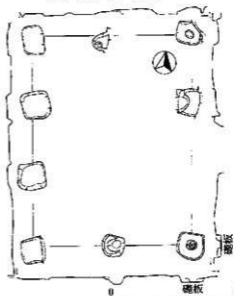
SB-702 (L=0.8m)

- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 8. 灰褐色土 (粘質) 9. 濃黒灰褐色シルト (暗灰褐色土層) 10. 灰褐色土 (粘質) 11. 灰褐色シルト層十 12. 黄灰色シルト 13. 暗灰褐色土 (粘質、炭粒多い) 14. 暗灰褐色土 (シルト質、粘質) | <ol style="list-style-type: none"> 15. 濃黒灰色シルト (灰褐色土層) 16. 暗灰褐色土 (シルト層) 17. 灰褐色、シルト粘土 18. 暗灰褐色土 (粘質) 19. 暗灰褐色シルト泥土 20. 暗灰褐色砂泥土 21. 薄オレンジ灰色砂層 |
|---|---|

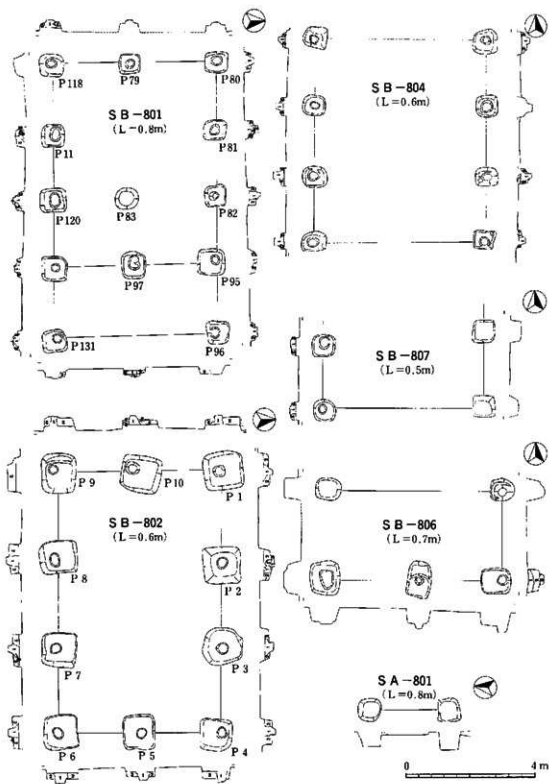
SB-704 (L=0.9m)



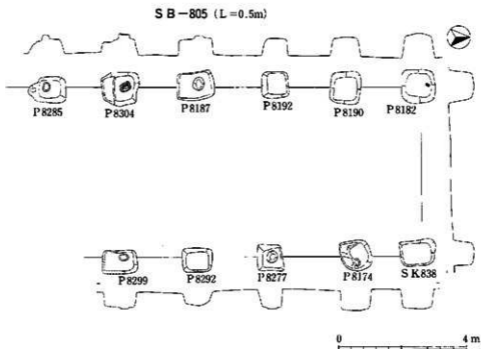
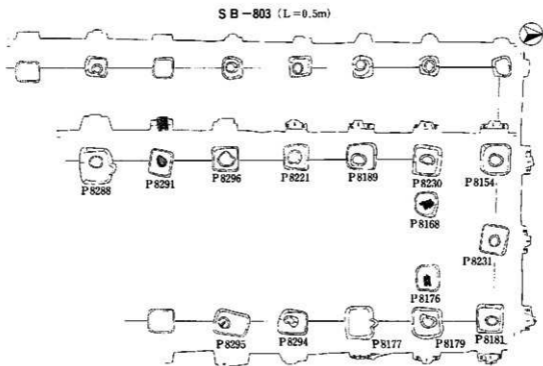
SB-703 (L=0.9m)



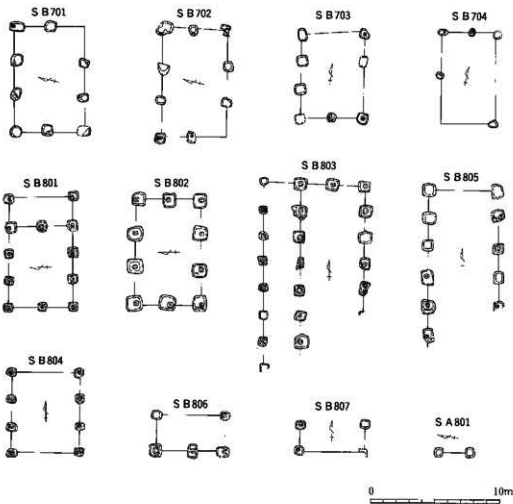
第15図 掘立柱建物跡実測図



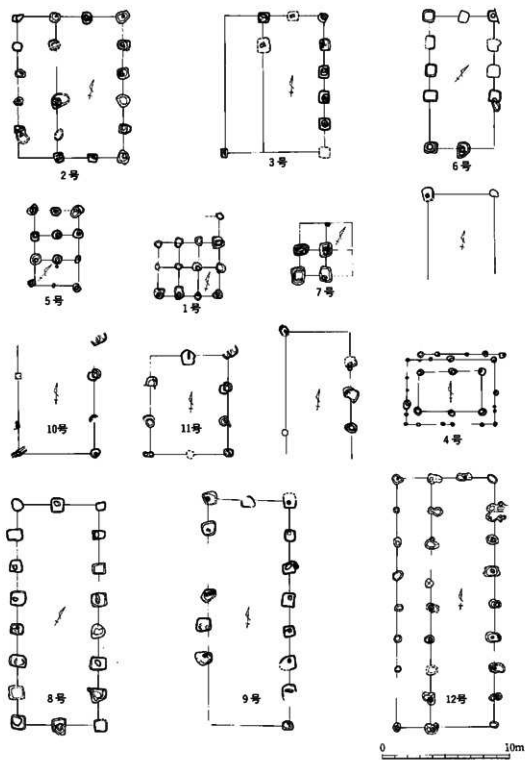
第16图 组立建物群实测图



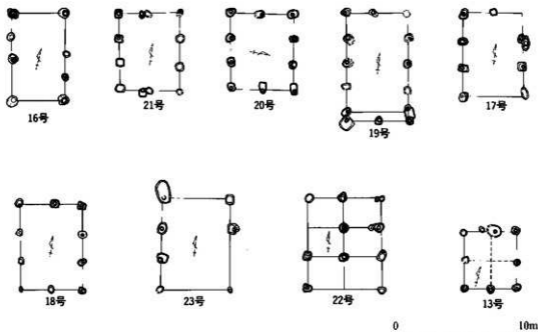
第17図 獨立柱建物跡実測図



第18回 獨立柱建物跡一覽圖



第19図 過去の調査で検出された掘立柱建物跡



第20図 過去の調査で検出された掘立柱建物跡

いた可能性が強い。

SE803はG 3区にある。掘り方は略方形で、遺存した板材からは井戸側は縦板組隅柱横棧どめの構造とみられる。最下層から出土した土器 (No251) から9世紀後葉のものと思われる。

SE807はF 1区にある。井戸側は抜き取られていたが、縦板組隅柱横棧止めの井戸とみられる。掘り方は方形の2段掘りで、下段が東側による。掘り方埋土は丁寧に埋められているのが分かる。井戸側内埋土の第3層から第4層上面にかけて土器食膳具や曲物底板 (光谷拓実氏によればスギ材で、最外年輪年代は718年) などが一括出土しており、その上位が埋め戻し土とみられることから、廃棄にあたって何らかの祭祀行為がなされた可能性が高い。そのうち、墨書土器「紀」が4点 (No275、279~281) 含まれる。時期は9世紀前葉である。

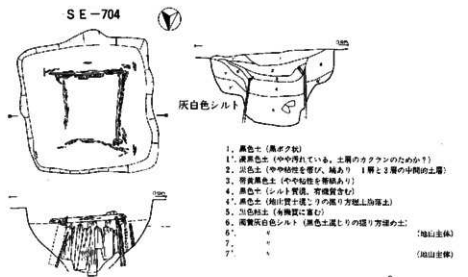
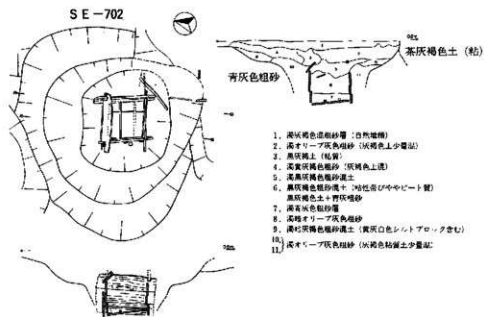
SE702、SE807は周辺の建物ブロックに付随すると考えられるが、順序としてはSE807 (9世紀初頭~前葉) → SE702古 → SE702新 (9世紀中葉) と推移したと考えられる。そして最終廃棄には井戸側を抜き取らなかったと考えたい。

7. 11~13世紀

掘立柱建物と井戸 SB705はF 2区にある3間×2間の総柱建物である。SE703が近接するが切り合っているのか同時存在なのかは定かでない。

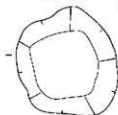
SB706はE 5区にある3間×2間の総柱建物とみられるが周囲の擾乱が著しく全形が分からない。中央西よりのP7136から土師器小皿片が出土しており、12世紀後半~末頃とみられる。関連の井戸としては、西側にはSE701、北東にSE802がある。

SE701はD 5区にある円筒形掘り方の井戸である。深さ約1.0m、下層は自然堆積、中層に地



第21図 古代の井戸跡

S E - 801



1. 緑灰色シルト
2. 黒色シルト
- 2'. 黒色シルト
(黄灰白色地山アロック層)
3. 玉色粘土
- (黄灰白色・灰白色地山アロック層)
- 3'. 黒色粘土
- (地山アロック多い)



S E - 803

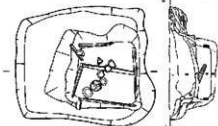


1. 緑灰色シルト
(黄灰白色地山アロック層)
- 1'. 緑灰色シルト
2. 黒褐色シルト (黄灰白色地山アロック層)
3. 黒褐色シルト
(2層より細かい地山アロック層)
- (3層と4層の間: 鉄分がきまれば赤味を帯びる)
4. 黒色粘土
5. 黄灰白色粘土



砂礫層

S E - 807

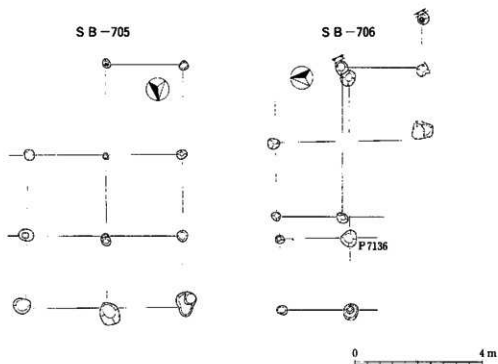


1. 黒灰色土 (藍砂混、黄褐色地山上面)
青灰白色シルト (地山分含) と黒灰色シルト (粘土質) の不規則な混合、地山アロックは僅かしかないが、埋め土と観察される。
- 2'. 黄褐色粘土 (黄灰シルト混)
3. 玉色シルト (粘土、微細砂混、上面に有機物 (茶色の木炭等) の層をはさむ)
- 3'. 黒褐色シルト (粘土、青灰シルト混)
4. 黒灰色シルト (粘土、微細砂混 (濃い緑状、互層をなす))
5. 黄褐色シルト (小粒など植物質多く含む)



0 2m

第22図 古代の井戸跡

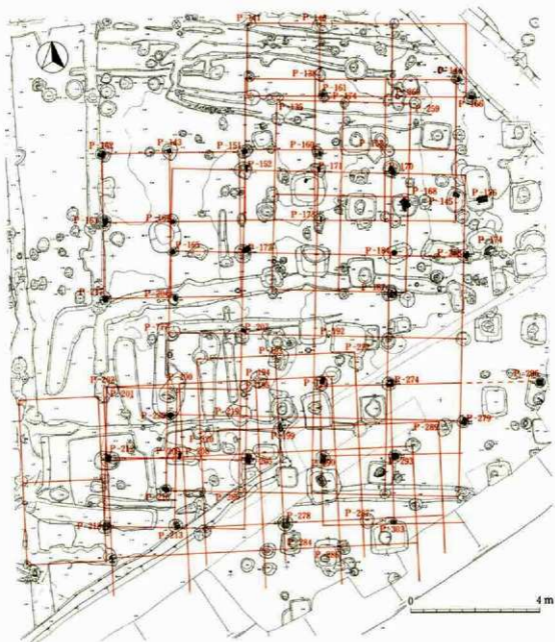


第23図 中世の建物跡

山質土を含む層があり、上層は自然堆積となる。井戸側は遺存しなかったが掘り方の形状からは曲げ物埋設であったと推定される。時期は12世紀頃とみられる。SE802は略方形の掘り方で、埋土はSE701に類似する。SD822よりは本井戸より新しい。

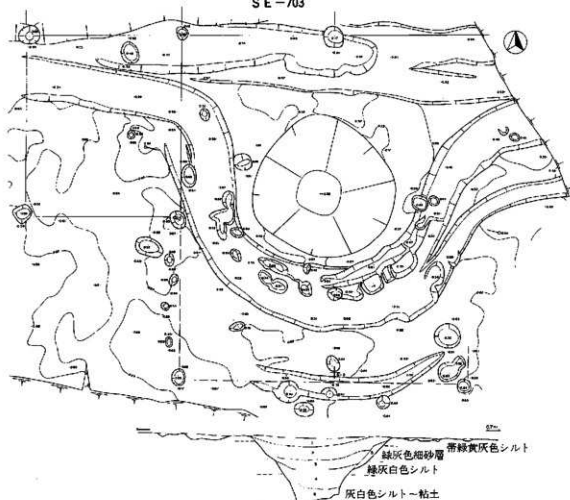
SE703はF・G2区にあり、周囲に溝（SD720）と覆い屋を想定できるようなピットが存在する。井戸側は遺存しなかった。掘り方上部の形状や土層堆積からみて抜き取られたと考えられるが、特に埋め戻された形跡はない。掘り方下半が略方形を呈することから方形の縦板組みであった可能性がある。掘り方は粘上中にとどまる。下層の第4・6層からモモの種子6個が出土した。時期を特定する遺物は出土しなかったが、周囲の溝や柱穴等からは12世紀頃のものともみられる。

SE704はE6区にある方形縦板組隅柱横棧どめの井戸である。掘り方は一辺約1.1mの正方形で深さは約1.2mを測る。二段掘りとなっており、掘り方は地山質土でしっかり埋められていた。縦板はいずれも転用材とみられるが、先端が部材のままのものと尖らせて打ち込んだものがある。実測図にあるとおり方形の小穴を持つ点は、SE702で復元された長大な板材と同様であり、建物壁板の転用と推定される。時期は11世紀後半頃とみられる。なお北西隅最上層（掘り方上面）から獸蹄付円面硯（No265）が出土した。格狭間をもつ獣象硯の一種であるが、獸蹄基部にはくずれているとはいえ獸面裝飾をもち、さらに格狭間と獸蹄を生かして祭神を思わせるような顔を造り出すという造形的にも優れた品である。硯面はよく使用され平滑となっているが墨痕はほと



第24圖 中世獨立柱建物跡復元圖

SE-703



1. 赤褐色土
2. 黄灰褐色土 (緑灰色シルト地山混)
3. 暗黄灰褐色土 (緑灰色シルト地山混)
4. 砂灰褐色土 (炭化物少量含む均質な土、ややシルト質)
5. 黄灰褐色土
6. 同層灰色土 (4層に地山の緑灰色シルト混じる)

1. 黒褐色土 (地山+粒少量、赤褐色粘土粒 (1cm) おずかに含む)
2. 同層褐色土 (黒褐色+地山土)
3. 黒色土 (粘質、黄灰白色シルト混じる) (ややビート質)

SE-701



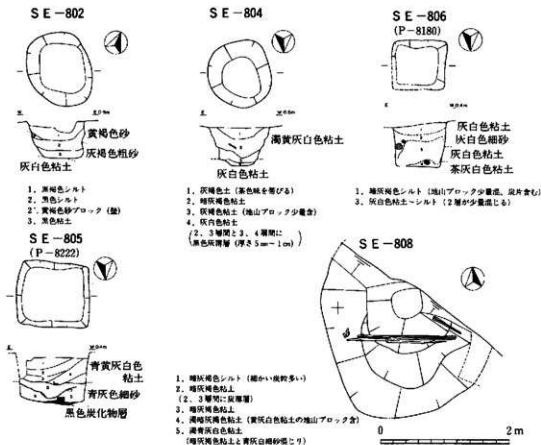
茶灰白色
地山ブロック

黄灰白色シルト

青灰白色シルト

0 2m

第25図 中世の井戸跡



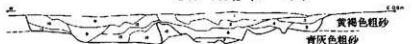
第26図 中世の井戸跡

んど残らない。丁寧に使われたのであろうか。円面碗に通常のごとく竈では倒立して焼成している。この碗の使用者は加賀国内でも極限られた人物であっただろう。碗の年代は9世紀前半(南加賀窯産)と考えるが、この井戸との関係は不明である。1980・81年度調査区で出土したものと接合したが、両者は100m以上離れていた。後世に拾われ、その異形からこの井戸の祭祀に使われた可能性も無いわけではない。

調査区南東部には古代の建物群と重なるように中世の総柱建物群が錯綜して存在する(第24図)。これらの特徴は柱穴に礎板を持つ点である。P8208などから出土した土器などにより12世紀後半前後を主体として考えられる。関連する井戸にはSE804、SE805、SE808、SE809、SE806(P8180)などがある。SE805からは柄のとれた曲物製の杓(No44)が出土した。SE808の中下位より多量の箸状木製品と若干のシジミが出土した。SE806(P8180)の底からは大型の石が5個出土した。他に白磁碗(No521)がある。

中世には多くの溝が存在する。SD837とSD877が地割りの基準となる。その他にも方位に合った細溝が多数存在するが性格は分からない。

S X-709北 (D-5区)



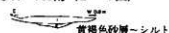
- | | |
|-----------------------------|-----------------------|
| 1. 暗灰褐色粗砂混土 | 9. 黒灰褐色粗砂混土 (やや粘性) |
| 2. 灰褐色土 (粗砂少量、やや粘性) | 10. 黒暗灰褐色粗砂混土 |
| 3. 暗灰褐色土 | 11. 暗灰褐色土 + 青灰色粗砂 |
| 4. 黄褐色粗砂 + 暗灰褐色土 | 12. 暗灰褐色土 (黄褐色粗砂層を含む) |
| 5. 灰褐色粗砂 + 青灰色粗砂 + 暗灰褐色土 | 13. 灰褐色土 (やや粘性、粗砂少量) |
| 6. 暗灰褐色粗砂混土 (やや粘性、1より色濃い) | 14. 黒褐色粗砂土 |
| 7. 黒灰褐色土 + 青灰色粗砂 | 15. 暗青灰色粗砂 (地山、やや汚れる) |
| 8. 黒暗灰褐色粗砂混土 (黄褐色シルトブロック混り) | |

S X-709中央 (D-4区)



- | | |
|----------------------------------|-------------------------------|
| 1. 暗灰褐色粗砂混土 | 8. 黒暗灰褐色土 (やや粘性、黄褐色シルトブロック多量) |
| 2. 濃灰褐色土 (黄褐色粗砂ブロック混) | 9. 暗灰褐色粗砂混土 |
| 3. 濃黄褐色粗砂 | 10. 9層 + 黄褐色シルト |
| 4. 暗灰褐色粗砂混土 | 11. 濃黄褐色シルト |
| 5. 暗灰褐色粗砂混土 (やや粘性、黄褐色シルトブロック混) | 12. 濃黄褐色粗砂 |
| 6. 濃暗灰褐色粗砂混土 (黄褐色シルトブロック多量) | 13. 暗灰褐色粗砂混土 (やや粘性) |
| 7. 濃暗灰褐色粗砂混土 (やや粘性、黄褐色シルトブロック多量) | 14. 濃黄褐色粗砂 (地山、やや汚れる) |

S X-709南 (D-4区)

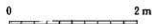


1. 濃灰褐色粗砂混土 (黄褐色シルトブロック多量)
2. 濃灰褐色粗砂混土 (青灰色粗砂混、黄褐色シルトブロック多量)

S X-713 (E-4・5区)



1. 淡黄褐色粗砂混土
2. 黄褐色粗砂混土 (やや粘性)
3. 黄褐色砂
4. 黄褐色粗砂混土 (やや粘性、黄褐色粗砂ブロック混)
5. 暗土褐色土 (粘質、地山粗砂少量混)
- 5'. 暗黄褐色土 (高黄灰粗砂多量混入)
6. 淡青灰色粗砂 (地山)



第27図 中世以降の不整形土坑土層断面図

8. 近世以降

近世は遺物 (No.533~540) は存在するが建物跡は不明である。D 3区やF・G 5・6区の上層では畝状遺構が検出されている。F区に南北に長くのびる溝は現代の水田区画に対応するものであるが、その初現は近世に遡るようである。中世の建物群が廃絶以降は農業生産の場とみられる。D・E区には不整形な土取り穴とみられるものがたくさんある (中世末~近世)。分布が水道に対応しており、土取りよりも水に関わる性格付けが可能かも知れない。いずれにしても農業生産に関連のあるものと推定される。

9. 漆塗り土師器長胴甕について

戸水C遺跡では、9世紀代の土師器長胴甕の内面に漆を塗った個体 (Na480~490) が多量出土する。類例は、加賀では7世紀末頃から確認しているがこれほど多量出土する例は本遺跡を除いて存在しない。土師器長胴甕は、水を入れ熱して蒸気を発生させる蒸し器であり基本的には有機物を入れない。器面に漆を塗布する目的は水漏れを防ぐことが第一義と推定される。本遺跡では、完形に復元できる個体は少ないものの、多くの煮炊具の破片が出土している。官衙遺跡内においても建物群の性格によって土器組成、特に煮炊具の占める比率は差があると予想される。明確なデータを提示できないが、その点では本遺跡では比較的高いと言えるかも知れない。鉄製煮炊具の普及の問題とあわせて、今後の検討課題である。

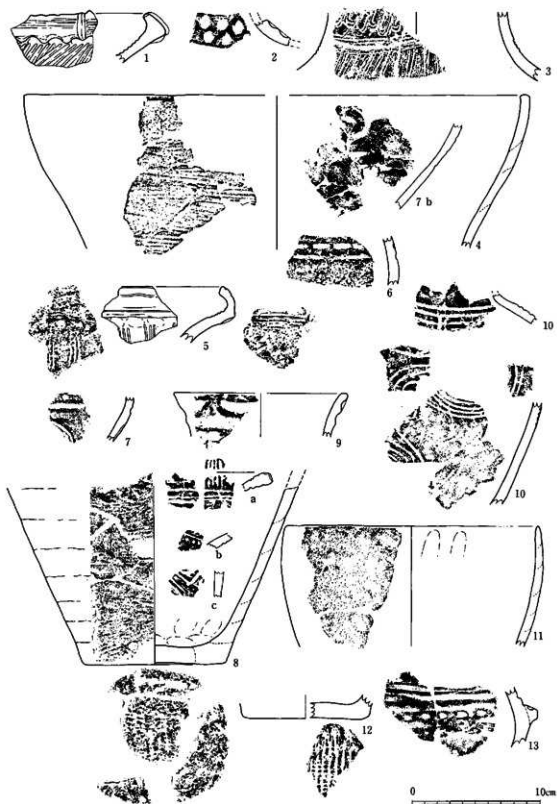
本遺跡からは、漆に関連する遺物として「漆紙文書」が出土している。この漆紙文書は漆を貯蔵した曲物容器ごと出土したものである。また、漆付着土器（要具）や漆塗り土器も出土しており、漆塗り作業が本遺跡で広く行われていたことが知られる。土師器長胴甕もそのような環境において、在来の技術を積極的に導入したものであったと考えられる。

10. 墨書土器

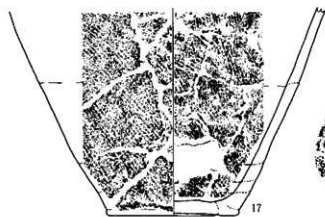
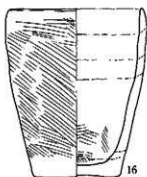
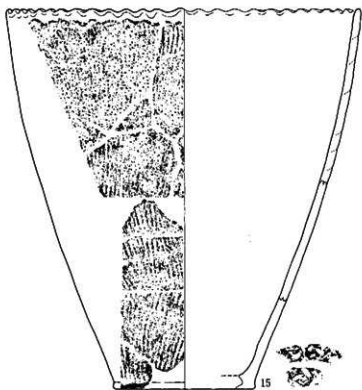
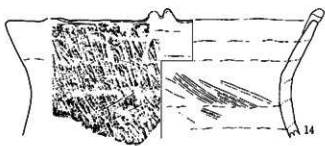
確認した文字種は「官」「東」「依」「友」「紀」「□女」「十」「万」「中」「玉」などがある。「紀」はSE807の一括で9世紀初頭、「友」はSE702の一括で9世紀中葉のものである。「依」は本遺跡に特徴的な墨書であるが、今回も確認数は最も多い。時期は9世紀前半から同後半までである。

注目されるのは2点の「官」である。本遺跡では初出の文字であり、時期はともに8世紀後葉～末である。今回の調査区ではこの段階の建物跡は確認していないが、本遺跡全体の性格付けとも関わるものであり注意しておきたい。

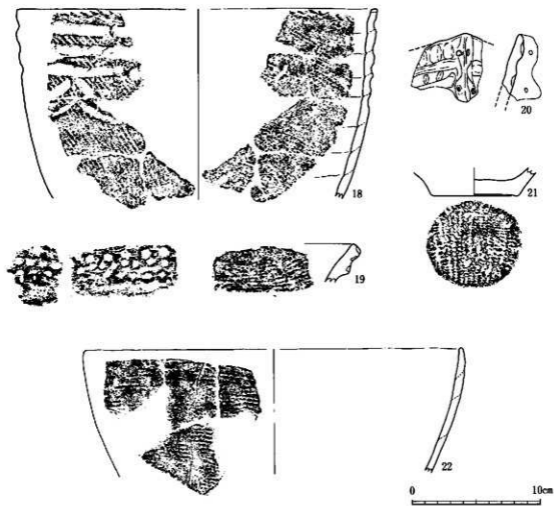
硯では、先の歌麴付の円面硯（眼象硯）のほかにも若干のものが出土している (No444~446)。445は赤色顔料の付着が認められる。



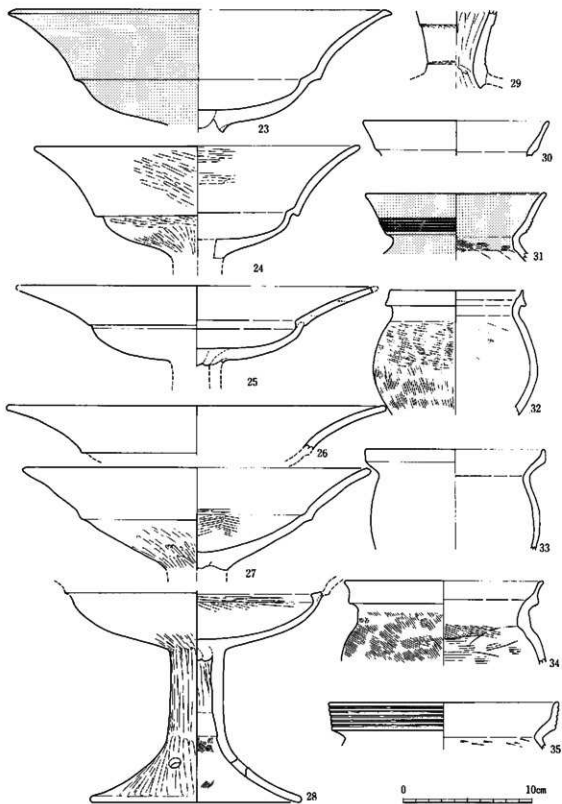
第28图 遺物実測図



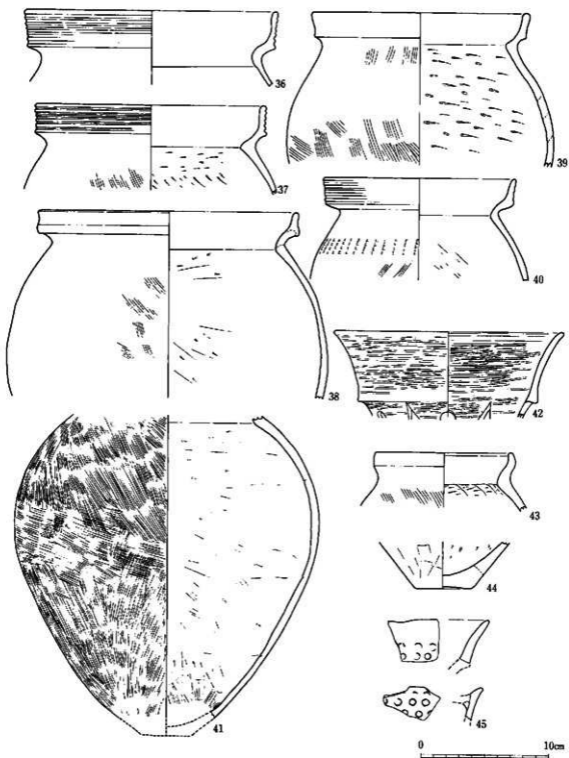
第29图 遗物实例图



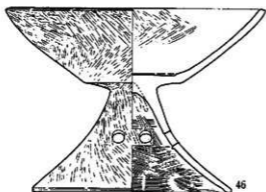
第30图 遺物実測図



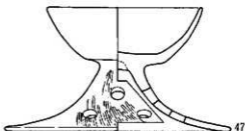
第31图 遺物実測図



第32图 遺物実測図



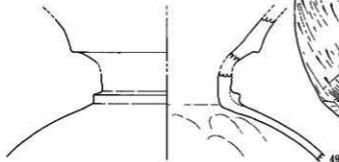
46



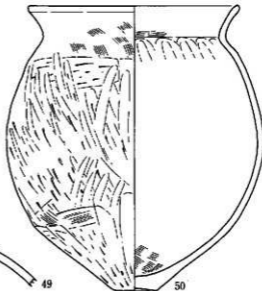
47



48



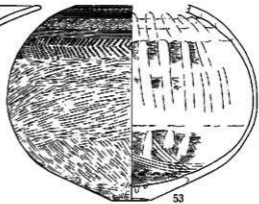
49



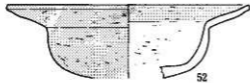
50



51



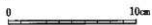
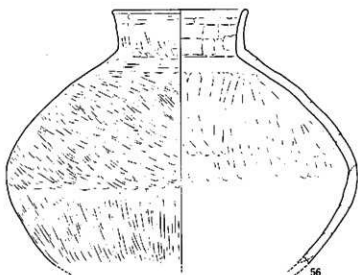
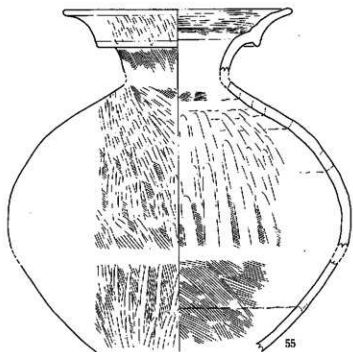
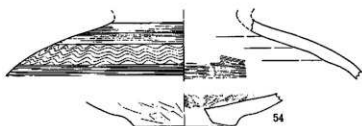
53



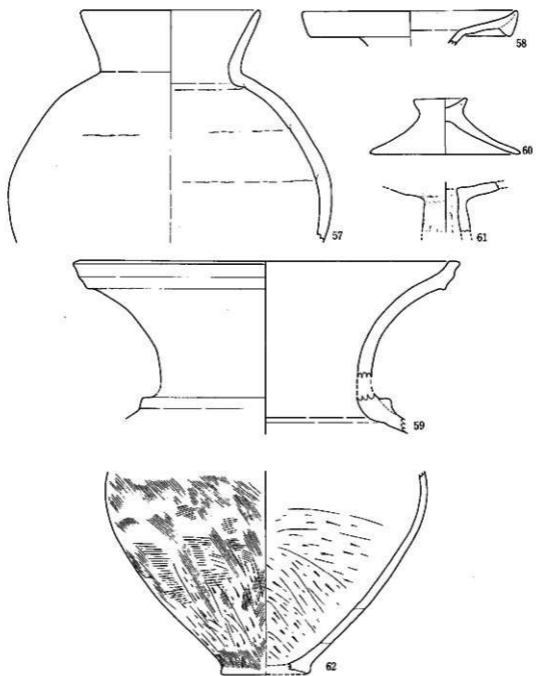
52



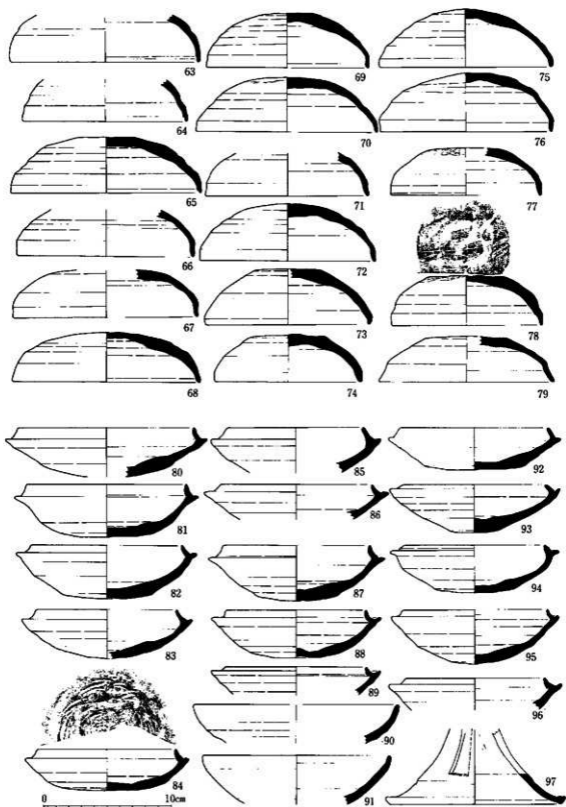
第33图 遺物実測図



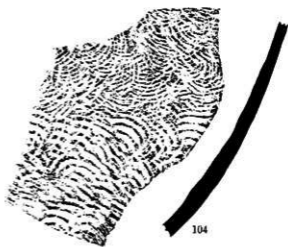
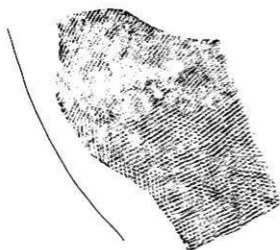
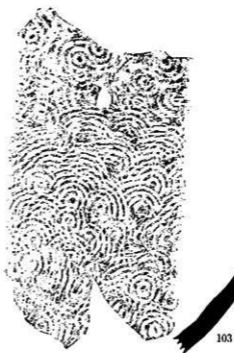
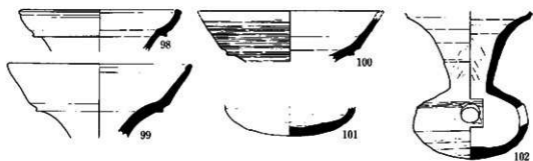
第34图 遗物实测图



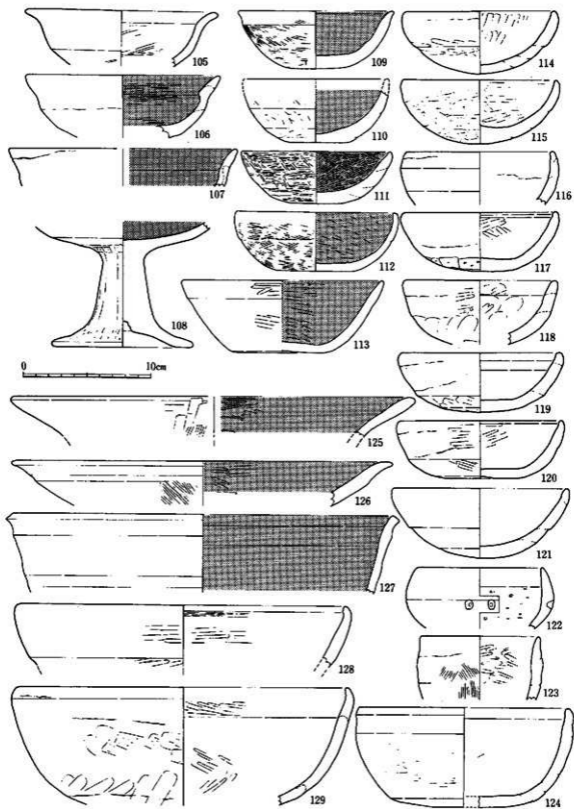
第35图 遗物实测图



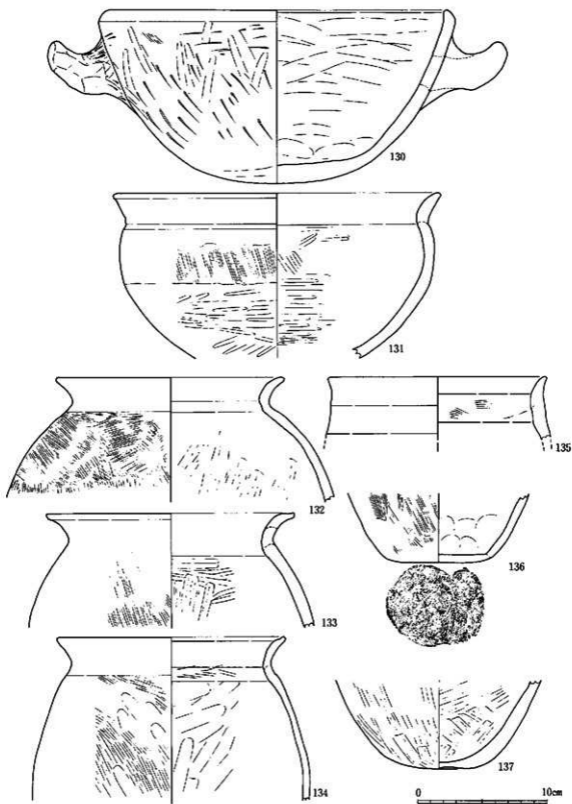
第36图 遺物実測図



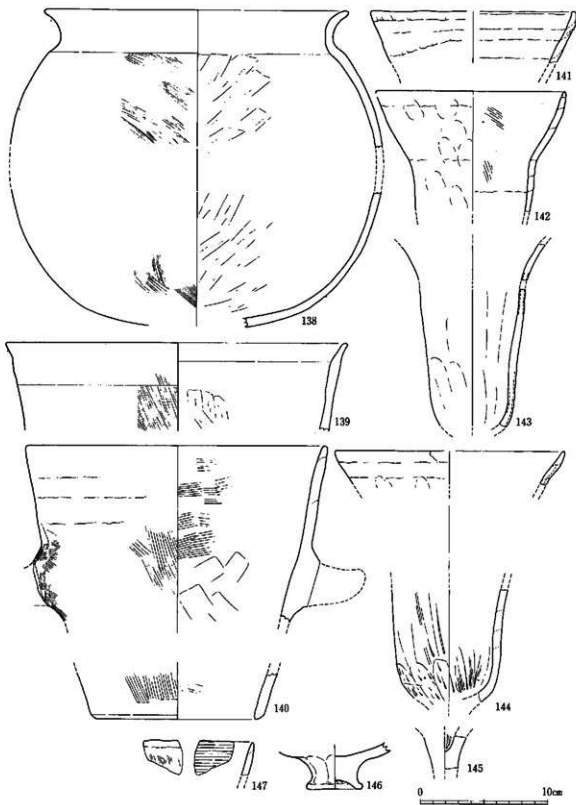
第37图 遗物实测图



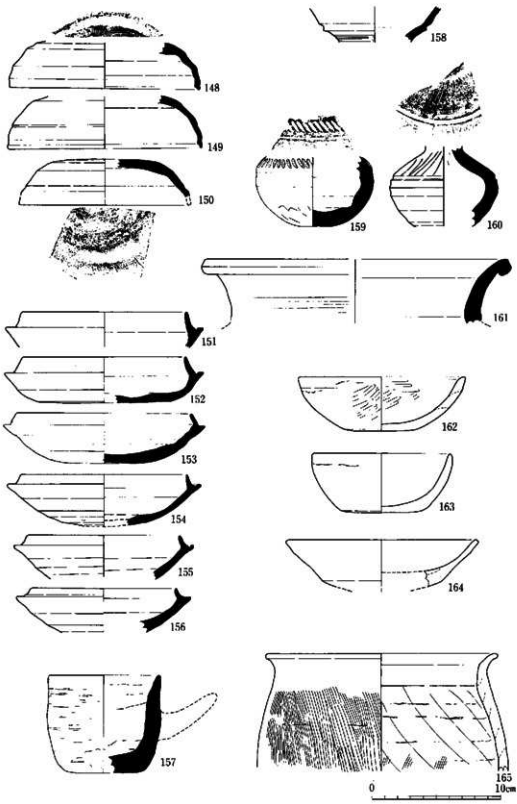
第38图 遺物実測図



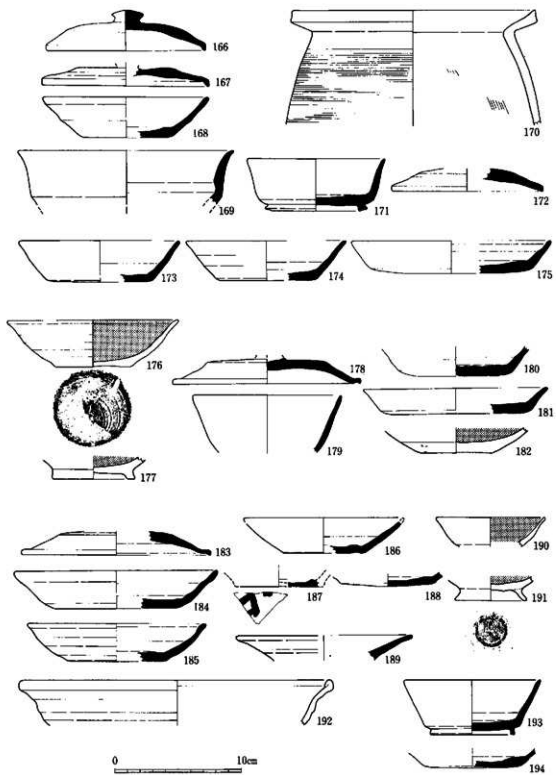
第39图 遗物実測図



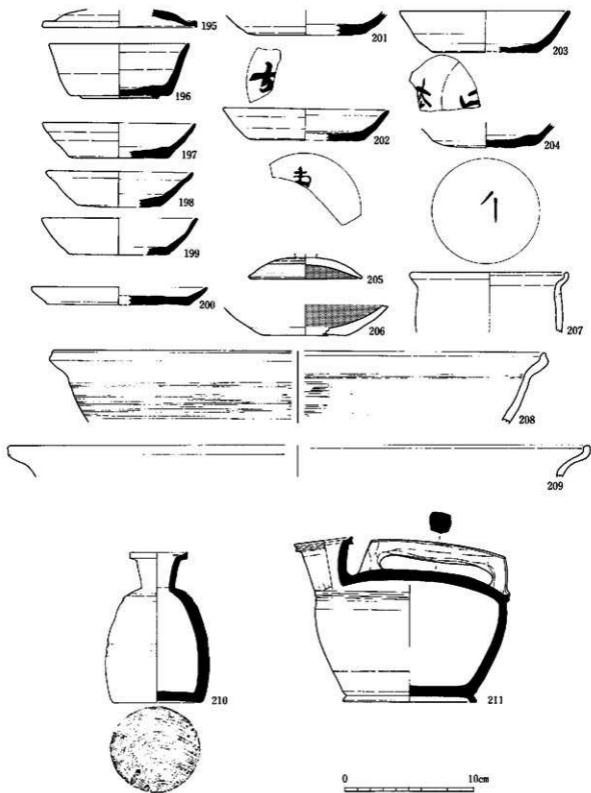
第40图 遗物实测图



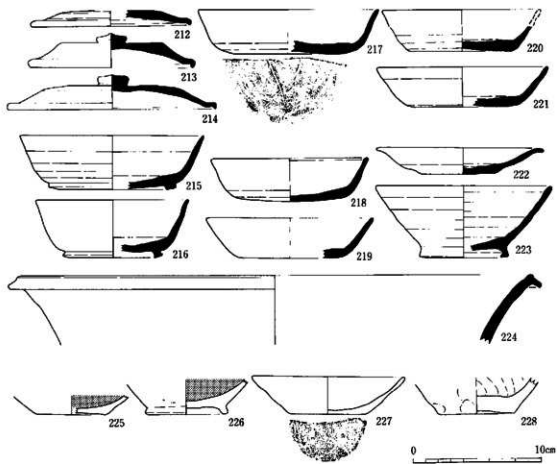
第41图 遺物実測図



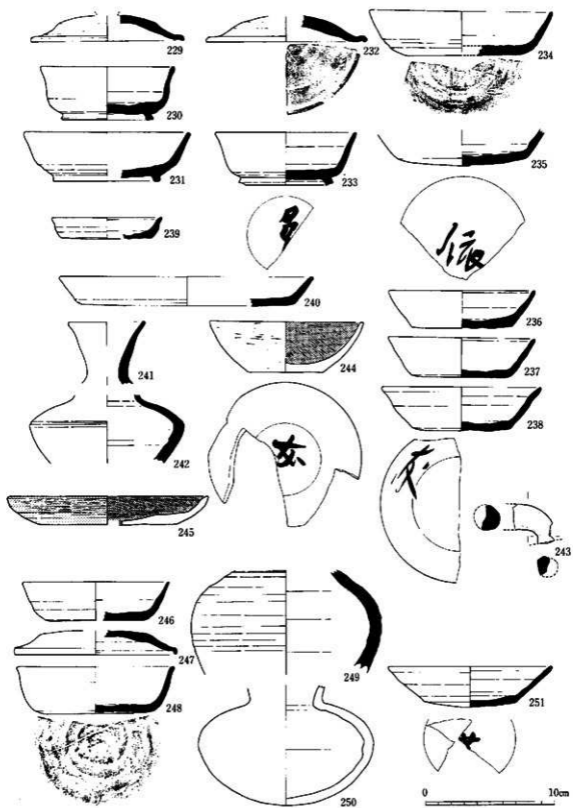
第42区 遺物実測図



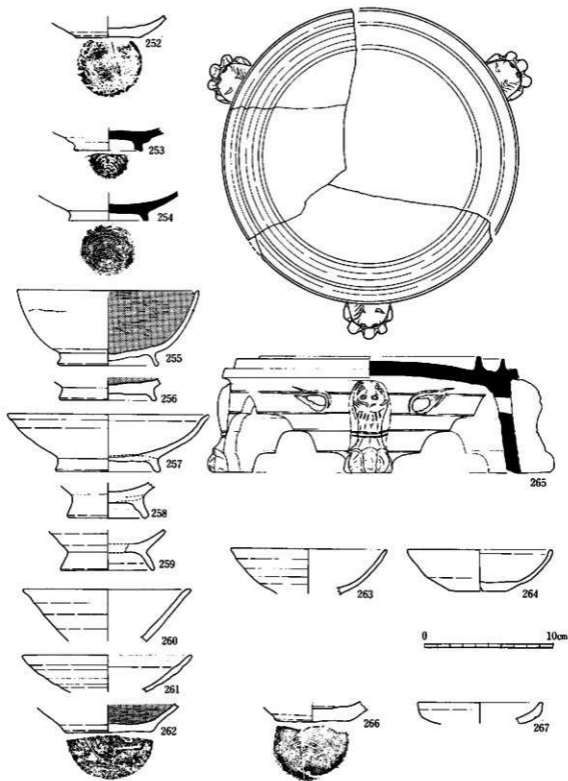
第43図 遺物実測図



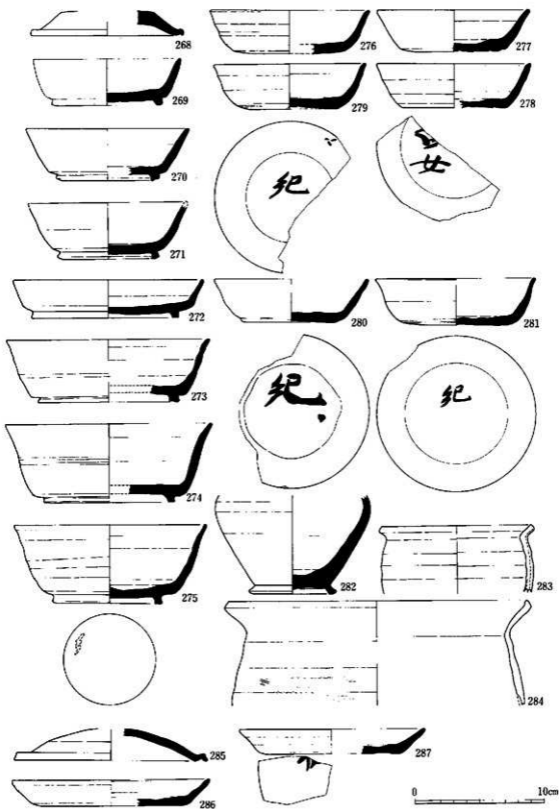
第44图 遗物実測図



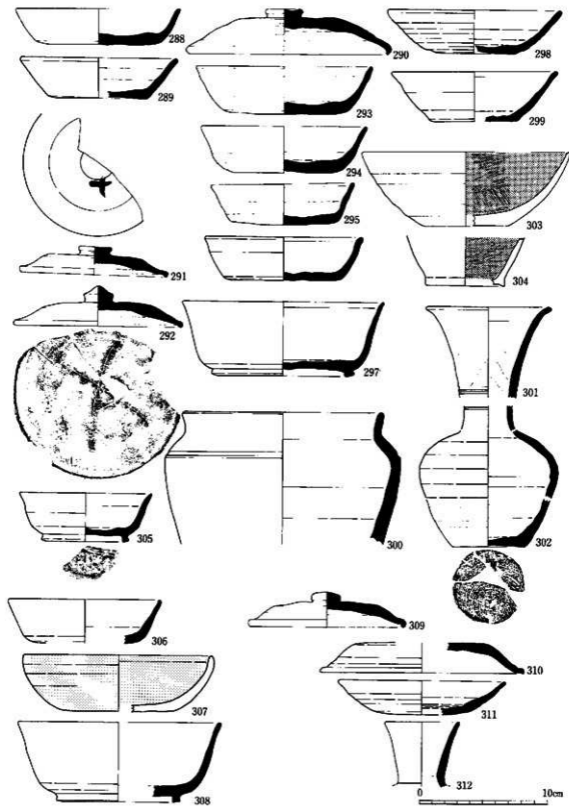
第45图 遗物実測图



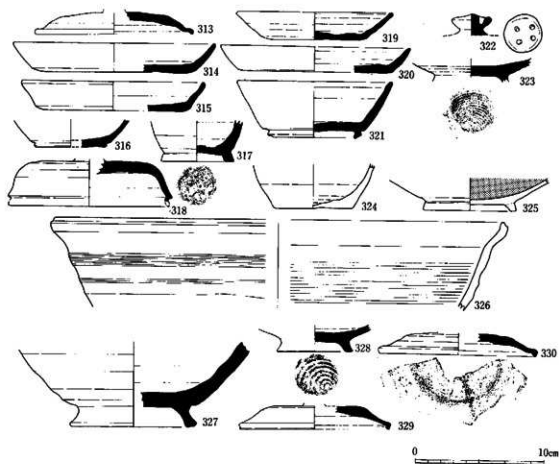
第46图 遺物実測図



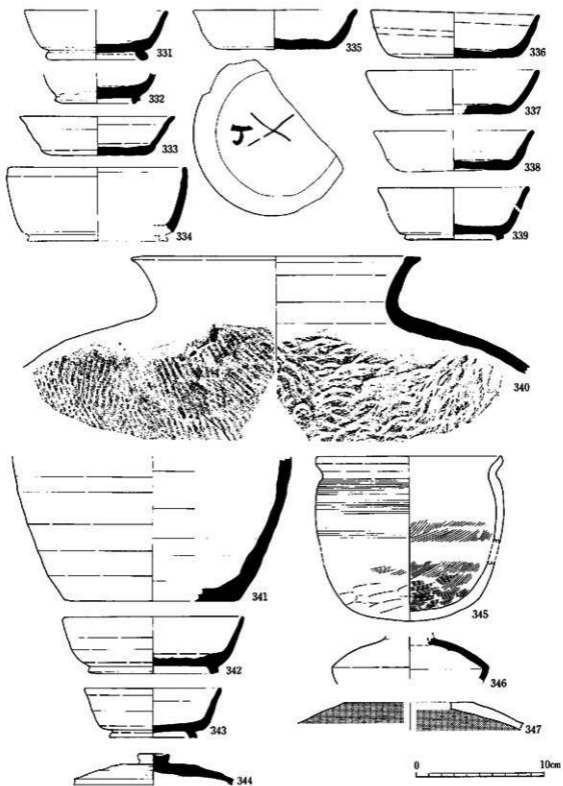
第47图 遺物実測図



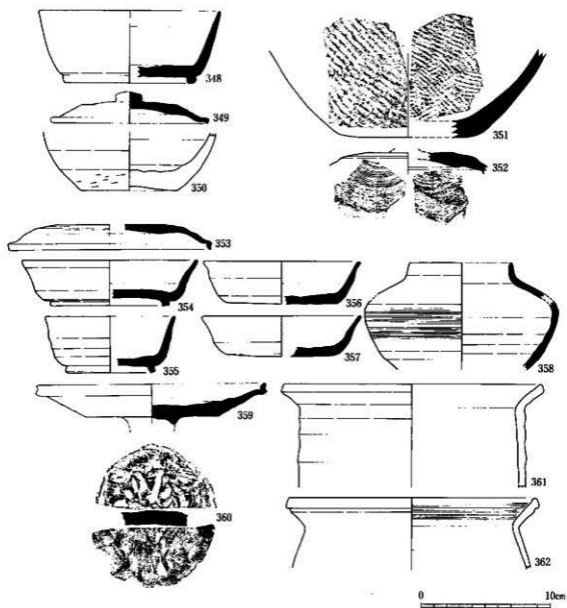
第48图 遗物实测图



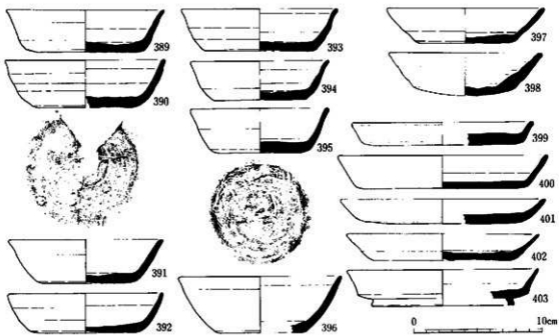
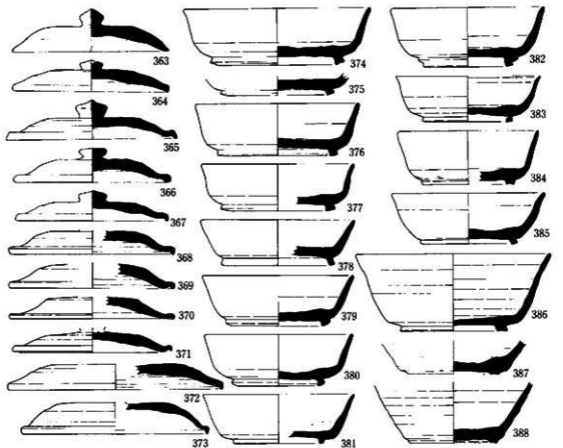
第49图 遗物实测图



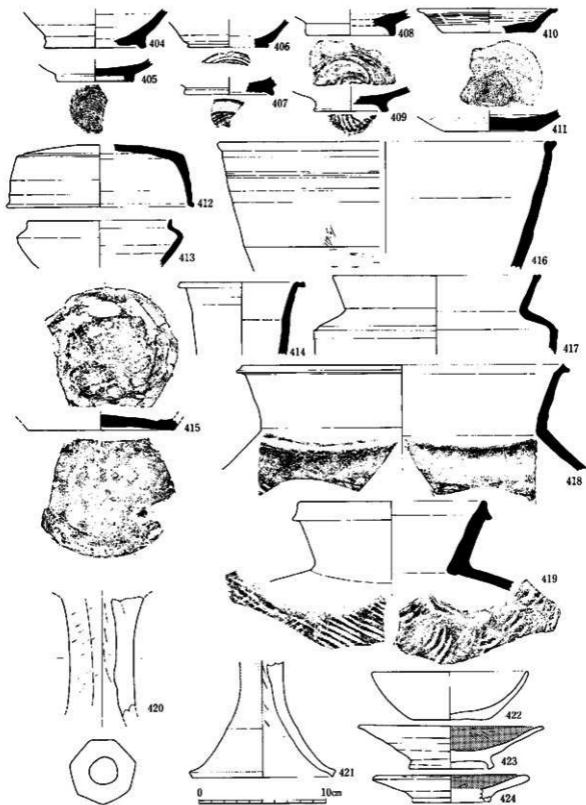
第50图 遗物实例图



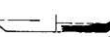
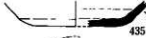
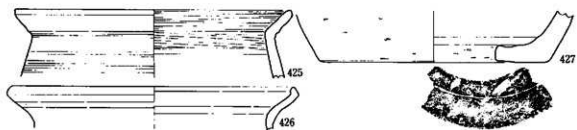
第51图 遗物实测图



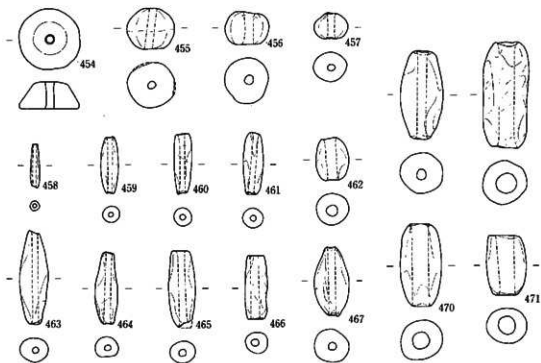
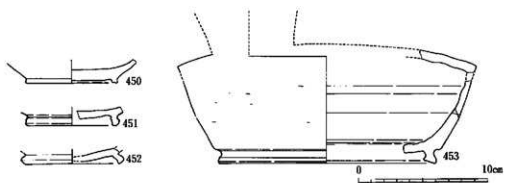
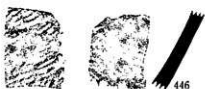
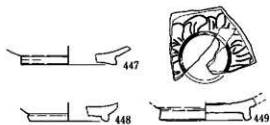
第52图 遺物実測図



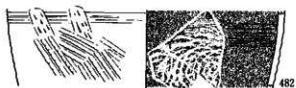
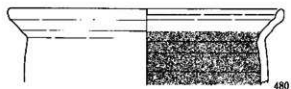
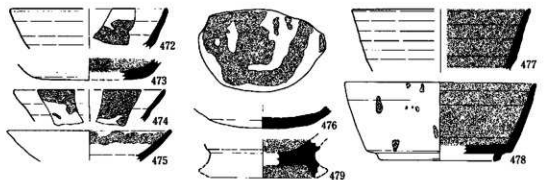
第53图 遗物夹测图



第54图 遺物実測図

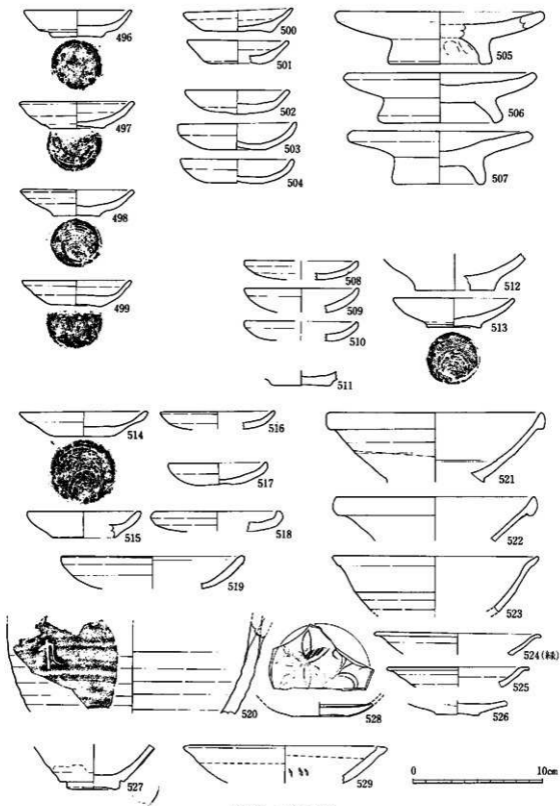


第55图 遗物实测图

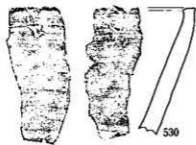


0 10cm

第56图 遗物实测图



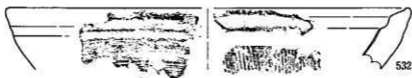
第57图 遺物実測図



530



531



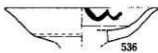
532



534



535



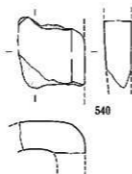
536



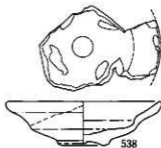
537



539



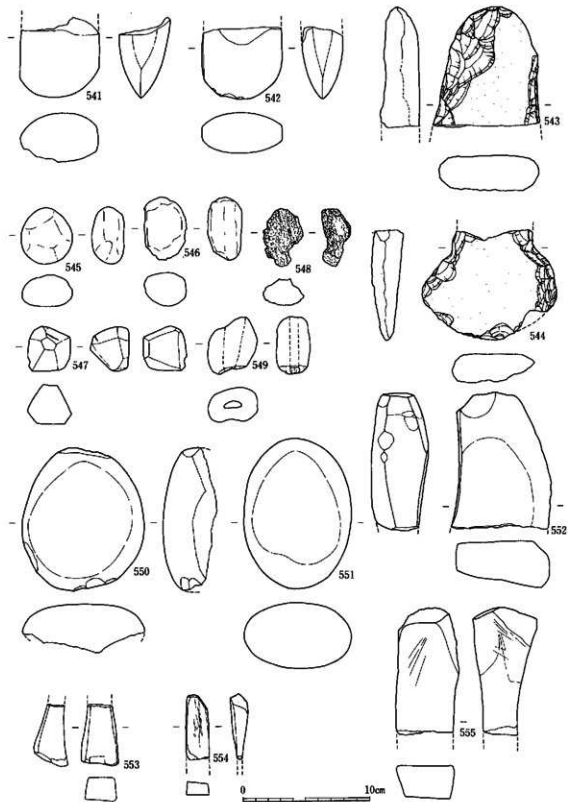
540



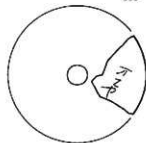
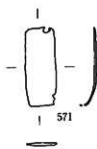
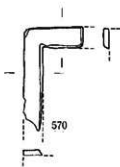
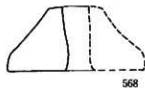
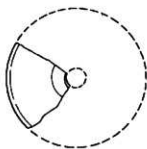
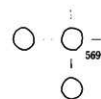
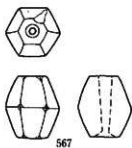
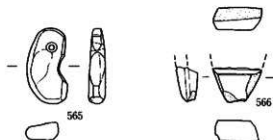
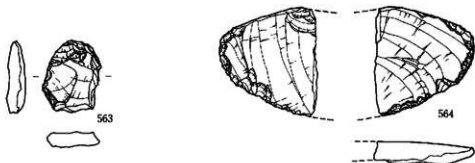
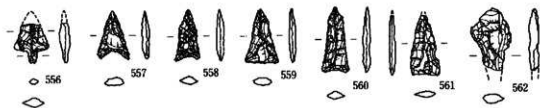
538



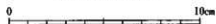
第58图 遗物実測図



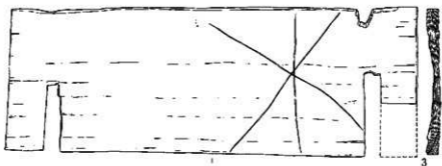
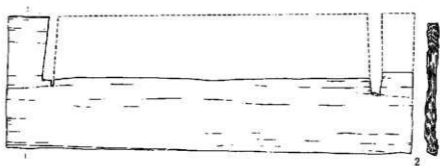
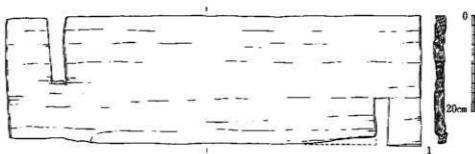
第59图 遺物実測図



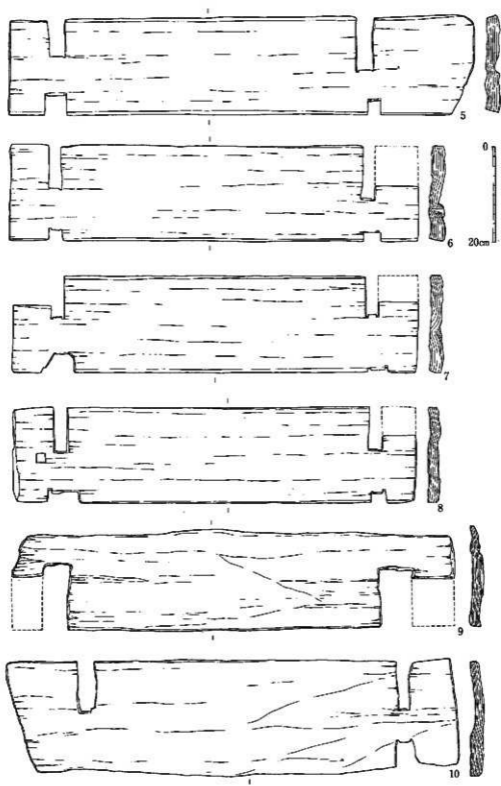
(565・567・568は原寸)



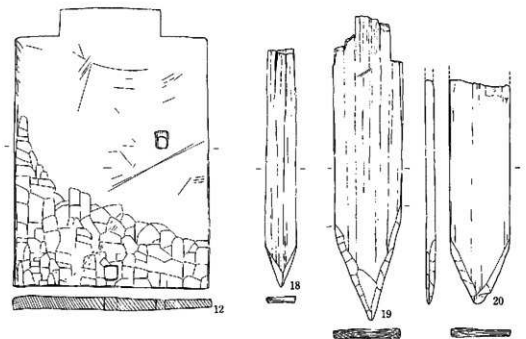
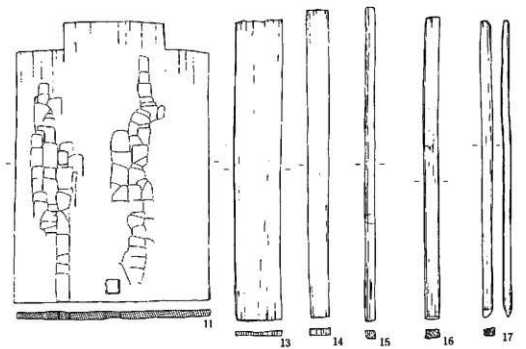
第60图 遺物実測图



第61図 SE702井戸側実測図

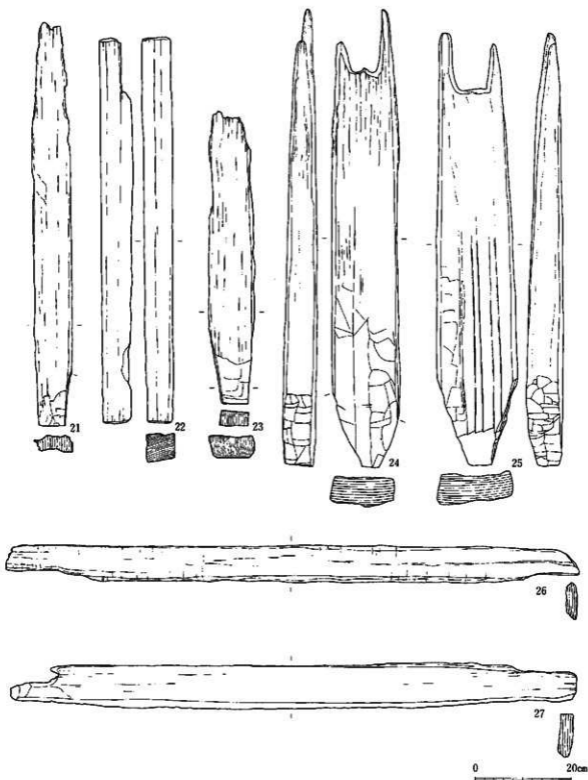


第62圖 SE702井戸側実測図

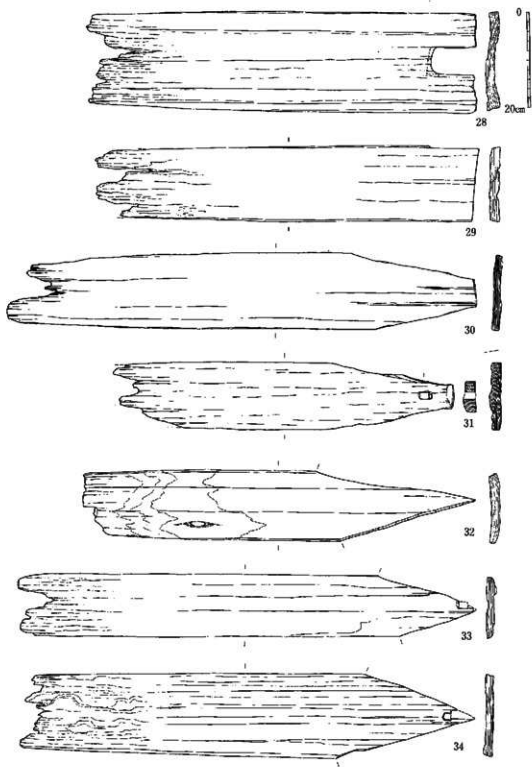


0 20cm

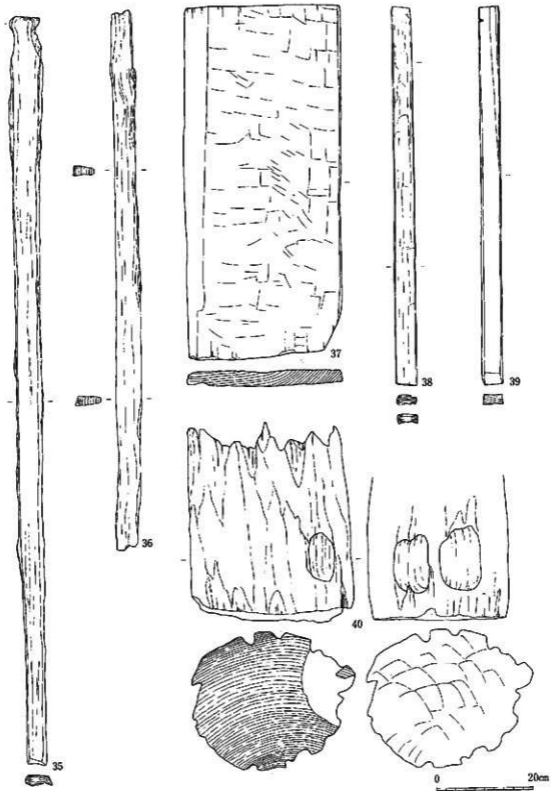
第63图 SE702井戸村実測図



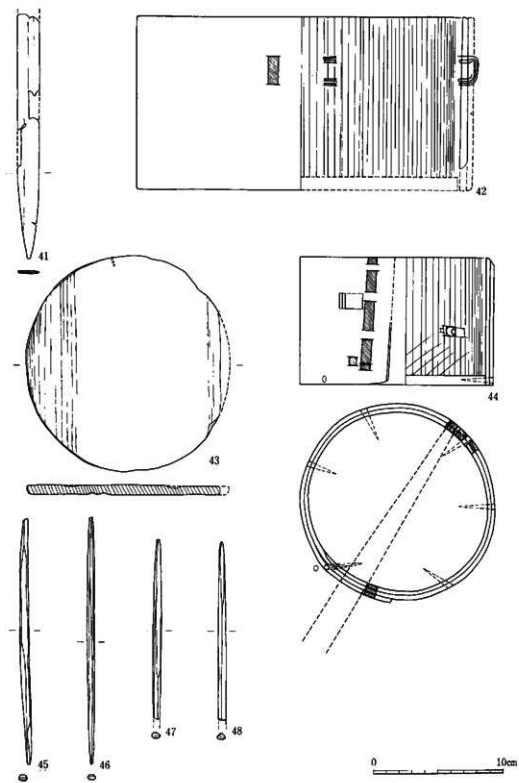
第64图 井戸材実測図



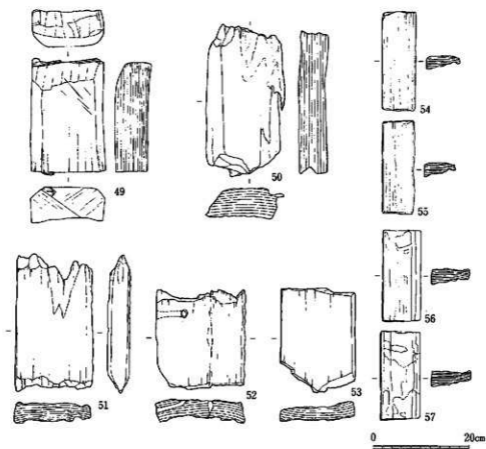
第65图 SE704井戸材実測図



第66图 木製品実測图



第67図 片戸跡出土木製品実測図



第68區 中世獨立柱建物跡出土磁板實測圖

遺物観察表

番号	出土地点	器種	径長 (cm)	備考	実測番号	番号	出土地点	器種	径長 (cm)	備考	実測番号
1	C-3区 SK796	弥生土器 蓋	A: 12.1		A 1	31	F 6-1 SK809	弥生土器 蓋	A: 14.1	P21	C14
2	E-5 SK717	弥生土器			A 3	32	F 6-1 SK809	弥生土器 蓋	A: 19.9 M: 12.8	P13 P10 P11 P14 P17	D497
3	E 5 SK717	弥生土器 蓋			A 2	33	F 6-1 SK809	弥生土器 蓋	A: 14.0	P14, P9, P10	D498
4	E 5-4 SK823	弥生土器	A: (40.0)	SK717	A 4	34	F 6-1 SK809	弥生土器 蓋	A: 15.5	P25	C20
5	D-4 SX709	弥生土器	A: 10.5		A 5	35	F 6-1 SK809	弥生土器 蓋	A: 18.0	P 6	C23
6	表線	弥生土器			A 6	36	F 6-1 SK809	弥生土器 蓋	A: 21.9	P16, P15, P20	C15
7	G7-1 P804	弥生土器			A38	37	F 6-1 SK809	弥生土器 蓋	A: 18.2	P11	C21
8	G7-1 SD802	弥生土器 深鉢	B: 11.0	G7-2 SX801 G7-1 P804	D443	38	F 6-1 SK809	弥生土器 蓋	A: 26.6	P25, P13, P14	C17
9	F-3 SK805	弥生土器 深鉢	A: (13.8)		A11	39	F 6-1 SK809	弥生土器 蓋	A: 17.0	P13 P23 P26 P27 P24	C25
10	F7-3 SK805	弥生土器			A 8	40	F 6-1 SK809	弥生土器 蓋	A: 15.2	P15	C19
11	G7-1 SK805	弥生土器	A: 20.6	SD8029番	A 9	41	F 6-1 SK809	弥生土器 蓋		P21, P13, P 8	C18
12	F7-3 SK805	弥生土器	B: 10.4		D496	42	D-5 SX709	弥生土器 深鉢形器	A: 18.0	下層	C 5
13	F7-3 SK805	弥生土器			A10	43	G7-3 SX80-1	弥生土器 蓋	A: 18.6	G7-1 G7-2	D388
14	G7-1 P805	弥生土器	A: 25.9		C40	44	F 6-1 P8015	弥生土器 蓋	B: 4.5		C24
15	G7-2 SK806	弥生土器 深鉢	A: 28.9 B: 11.0 H: (38.0)		A 7	45	F-4 P-7099	弥生土器 深鉢形器		包含層	C 4
16	G7-2 SK806	弥生土器 深鉢	A: 10.3 B: 6.5 H13.3		D488	46	D-3 SD707	土師器 高坪	A: 20.5 B: 15.6 H: 14.5		C 2
17	G7-2 SK806	弥生土器 深鉢	B: 10.5	G7-1, G7-2	D499	47	D-3 SD707	土師器 高坪	A: 12.0 B: 17.6 H: 9.8		C 1
18	G7-1 SD802	弥生土器	A: (28.6)	下層, 最下層	D482	48	G0-2 ST12	土師器 鉢	A: (10.3) B: 3.0 H: (8.4)	4層	C36
19	G7-1 SD802	弥生土器		下層の上	D333	49	G-6 ST12 4区	土師器 蓋		3区	C35
20	G7-1 SD802	弥生土器		砂層	D427	50	F-03 ST-1 2, 1区	土師器 蓋	A: 16.9 B: 3.2 H: 22.5	黒色土	D441
21	G7-1 SD802	弥生土器	B: 6.8	砂層上面	D396	51	E-2 ST11 1区	弥生土器 高坪	2区		C 6
22	F 6-1 SK806	弥生土器 深鉢	A: (30.0)	P 2	D484	52	G-8 ST11 4区	弥生土器 鉢	A: 十九.〇	中間, 西側	C33
23	F 6-1 SK809	弥生土器 高坪	A: 30.6	P24(P 9) (P10; (P 12) (P 2)	9	53	G-1 ST11 5区	土師器 深鉢	M: 19.5 B: 3.1	底部横成穿孔。底部 内面にトンボの中心 軸の跡。	C31
24	F 6-1 SK809	弥生土器 高坪	A: 25.6	P25, P15	C10	54	G-1 ST11 3-5区	土師器 蓋	B: 8.2	底部横成後穿孔。	C28
25	F 6-1 SK809	弥生土器 高坪	A: (28.5)	P25, P15, P14	C 8	55	G2 ST11 10区	土師器 蓋	A: 16.2 M: 27.2		C28
26	F 6-1 SK809	弥生土器 高坪	A: 30	P 4	C13	56	F-9 ST11 3区	土師器 蓋	A: 10.8 M: 27.8		C34
27	F 6-1 SK809	弥生土器 高坪	A: 27.6	P1, P16 SK809 (SD26) P24	C11	57	SD802	土師器 蓋	A: 14.2 M: 25.5	G7-1, G6-2, ST-6	
28	F 6-1 SK809	弥生土器 高坪	B: 16.8	P1 (P 3, P 4, P13)	C12	58	H2-1 SD802	土師器 蓋	A: 17.0		C37
29	F 6-1 SK809	弥生土器 深鉢形器			C 7	59	SD802	土師器 蓋	A: 30.0	F 6-1, 2区 F 6-4区 G6-2	D413
30	F 6-1 SK809	弥生土器 鉢	A: 14.5	P16	C16	60	F-25 J11, 13 区	弥生土器 蓋	A: 11.6 H: 4.5	上層	C 3

序号	出土地点	器 种	度量 (cm)	编 号	实例 序号
61	G-1 ST11 5区	卵石土磨 磨石		No.1	C32
62	G7-3 SX801	土钵 钵	B: (7.0) M: 25.2	SK803	C26
63	G 5- 1, 3区 SD802	灰素器 钵	A: 14.8	戴下等	D391
64	G7-1 SD802	灰素器 钵	A: 12.9	SX02	D281
65	G 5- 1, 3区 SD802	灰素器 钵	A: 15.0 H: 4.4	G7-1	D248
66	G 6-2 SD802	灰素器 钵	A: 12.0		D392
67	G7-1 SD802	灰素器 钵	A: 14.5		D278
68	G 6-2 SD802	灰素器 钵	A: 14.8 H: 3.9	G7-1 G4-3, G5-2	D282
68	G 6-4 SD802	灰素器 钵	A: 12.9 H: 4.3		D273
70	G 6-2 SD802	灰素器 钵	A: 14.5 H: 4.3		D368
71	G 5- 4 SD802	灰素器 钵	A: 13.0	砂磨	D284
72	G 6-2 SD802	灰素器 钵	A: 14.0 H: 4.5	G7-1	D271
73	G 6-2 SD802	灰素器 钵	A: 13.0 H: 4.4	G7-1, 包舍罐	D269
74	G7-1 SD802	灰素器 钵	A: 6.8 H: 3.7		D275
75	G7-3 SD802	灰素器 钵	A: 13.4 H: 4.6	G6-2	D276
76	G 6-1 SD802	灰素器 钵	A: 13.4 H: 4.7	G6-2	D270
77	G 6-2 SD802	灰素器 钵	A: 11.8 H: (3.8)		D272
78	F7-3 SD802	灰素器 钵	A: 11.8 H: 4.0		D274
79	G7-1 SD802	灰素器 钵	A: 13.8 H: 3.7	SX801	D279
80	G 2-4 SD802	灰素器 钵	A: 14.0		D244
81	G 6-1 SD802	灰素器 钵	A: 12.0 H: 4.2		D267
82	G 6-2 SD802	灰素器 钵	A: 11.9 H: 4.2		D266
83	G 6-2 SD802	灰素器 钵	A: 11.2 H: 3.9		D259
84	G7-1 SD802	灰素器 钵	A: 10.9 H: 3.3		D257
85	G7-1 SD802	灰素器 钵	A: 11.0		D261
86	G 6-2 SD802	灰素器 钵	A: 12.1		D264
87	G 6-2 SD802	灰素器 钵	A: 11.8 H: 4.4		D260
88	G 6-2 SD802	灰素器 钵	A: 10.9 H: 3.8		D256
89	G 6-2 SD802	灰素器 钵	A: 13.9		D265
90	G7-1 SD802	灰素器 钵	A: (16.4)		D293

序号	出土地点	器 种	度量 (cm)	编 号	实例 序号
91	G7-3 SD802	灰素器 钵	A: 15.0		G7-1
92	G 6-2 SD802	灰素器 钵	A: 11.6 H: 3.4		G5-4, P G6-1, 3 8057
93	G 6-2 SD802	灰素器 钵	A: 11.2 H: 3.8		D263
94	G 6-2 SD802	灰素器 钵	A: 11.0 H: 3.8		ST96北束席
95	G 6-2 SD802	灰素器 钵	A: 11.3 H: 4.3		D258
96	G 6-2 SD802	灰素器 钵	A: 11.0		D262
97	G 6-2 SD802	灰素器 钵	B: 14.2		D320
98	H1-2 SD802	灰素器 钵	A: 12.8		D243
99	G7-1 SD802	灰素器 钵	A: 14.5		D321
100	G7-1 SD802	灰素器 钵	A: (14.5)		D322
101	G4-3 SD802	灰素器 钵		包舍罐	D403
102	G7-1 SD802	灰素器 钵	M: (9.0)		D319
103	G 6-1 SD802	灰素器 钵		G6-3上席	D306
104	G7-1 SD802	灰素器 钵			D289
105	G7-1 SD802	土钵 钵	A: 15.0		D286
106	G7-1 SD802	土钵 钵	A: 15.2		G7-2 SX801
107	G7-1 SD802	土钵 钵	A: 17.9		D287
108	G3-4 SD802	土钵 钵	B: 11.1		G3包, G3 3包
109	G7-1 SD802	土钵 钵	A: 12.4 B: 4.1 H: 4.6		D285
110	H-1,2 SD802	土钵 钵	A: (11.6) B:		D242
111	G5-4 SD802	土钵 钵	A: 12.0 B: 4.0 H: 4.1		D251
112	G7-1 SD802	土钵 钵	A: 13.0 B: 6.0 H: 4.7		D292
113	G 6-2 SD802	土钵 钵	A: 16.0 B: 8.0 H: 3.7		D304
114	G7-1 SD802	土钵 钵	A: 12.5 H: 5.0		D297
115	G 6-1 SX802	土钵 钵	A: 12.4 H: 5.1		D313
116	G7-1 SD802	土钵 钵	A: (11.5)		D324
117	G 6-2 SD802	土钵 钵	A: 11.8 H: 4.7		D307
118	G 6-2 SD802	土钵 钵	A: (11.6)		D311
119	G7-1 SD802	土钵 钵	A: 13.0 H: 4.8		D293
120	G7-1 SD802	土钵 钵	A: 12.8 H: H: 4.5		D299

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	備考	実測 番号	番号	出土地点	器種	法量 (cm)	備考	実測 番号
121	G 6-2 S D802	土師器 埴輪	A : 13.9 H : 5.5		D308	151	E-6 S E704	埴輪器 埴輪	A : (12.9)		D481
122	F 6-4 S D802	土師器 埴輪	A : (9.6)		D317	152	G 5-3 S T89	埴輪器 埴輪	A : 12.8 B : 10.5 H : 3.7	古溝北	D280
123	G 7-1 S D802	土師器 埴輪	A : (9.5)		D290	153	B-3	埴輪器 埴輪	A : 13.9 H : 4.1		D290
124	G 7-1 S D802	土師器 埴輪	A : 7.0 B : 11.5 H : (8.0)		D294	154	D-5	埴輪器 埴輪	A : 13.9 H : (4.0)		D383
125	G 7-1 S D802	土師器 不明	A : (32.9)		D325	155	G 7-1 S D802	埴輪器 埴輪	A : (12.0)		G 7-2 S X801 S T06東溝アゼ G 6-4 S K801
126	G 7-1 S D802	土師器 高坪	A : (30.0)	G 7-2 S X801	D418	156	S D829	埴輪器 埴輪	A : (11.5)		D394
127	G 4-3 S D802	土師器 不明	A : (31.0)		D254	157	E-5 小ピット	埴輪器 埴輪	A : 8.7 B : 6.1 H : 7.8	B-3 排水北包含層	D72
128	G 7-1 S D802	土師器 鉢	A : (26.8)		D328	158	D 4 S K712	埴輪器 鉢			D43
129	G 6-2 S D802	土師器 鉢	A : (27.0)		D303	159	F 5-2 穴倉層	埴輪器 鉢	M : 9.3		D347
130	G 7-1 S D802	土師器 鉢	A : 26.6 H : 13.7	F 7 3 S X805	D291	160	F 4-4 穴倉層	埴輪器 鉢	M : 8.4		D346
131	S D802	土師器 鉢	A : (25.8)	G 7-1 G 7-3 G 6-2	D300	161	F 5-1 S X804	埴輪器 鉢	A : (24.3)		D388
132	S D802	土師器 鉢	A : 18.9	G 6-2 G 7-1	D323	162	G 4-1 S X806	土師器 鉢	A : 13.0 B : 5.6 H : 4.3	G 3-2	D389
133	S D802	土師器 鉢	A : (19.3)	F 6-4, G 7-1	D315	163	F 6-4 S T06	土師器 鉢	A : 11.0 B : 6.0 H : 4.7	東1ゾ	D135
134	G 6-2 S D802	土師器 鉢	A : (18.0)		D318	164	F 3-4 穴倉層	土師器 高坪	A : 15.0	G 4-2	D340
135	F 6-4 S D802	土師器 鉢	A : (17.0)		D318	165	D-5	土師器 鉢	A : 18.0	排水中運輸用成	D364
136	S D802	土師器 鉢	B : (8.0)	G 7-1, G 7-3, G 6-2	D327	166	S D701 P 7062	埴輪器 蓋	A : 12.5 H : 3.3	柱礎	D60
137	G 7-1 S D802	土師器 蓋			D489	167	S B 701 P 7052	埴輪器 蓋	A : 13.1	掘り方、転用研	D57
138	S D802	土師器 蓋	A : 24.0	G 6-1, G 4-3 F 7-3, G 6-1	D309	168	S D701 P 7054	埴輪器 埴輪	A : 13.1 B : 7.3 H : 3.2		D59
139	F 6-4 S D802	土師器 こしき	A : (27.1)		D316	169	S B 701 P 7053	埴輪器 埴輪	A : 17.0		D56
140	S D	土師器 こしき	A : 23.9	G 7 1, G 6 2 G 5 4, G 5 3, G 5-2	D326	170	S B 701 P 7062	土師器 蓋	A : 19.2		D58
141	G 5-1 S D802	製埴土器	A : (16.1)		D493	171	P 7060	埴輪器 有台鉢	A : 11.1 B : 8.0 H : 4.2	P 7857横	D61
142	F 7-3 S D802	製埴土器	A : (14.4)		D495	172	S B 703 P 7833	埴輪器 蓋	A : 11.9		D60
143	G 6-3 S D802	製埴土器			D302	173	S B 704 P 7047	埴輪器 埴輪	A : 12.6 B : 8.1 H : 3.2		D62
144	G 7-1 S D802	製埴土器	A : 18.0	G 6-2	D301	174	S B 704 P 7047	埴輪器 埴輪	A : 12.8 B : 8.1 H : 3.1		D64
145	S D802	製埴土器			D494	175	S B 704 P 7047	埴輪器 蓋	A : 15.8 B : 12.6 H : 2.6		D63
146	G 6-2 S D802	製埴土器	B : 4.4		D305	176	S B 801 P 8118	土師器 鉢	A : 13.3 B : 5.9 H : 3.7	柱礎部	D205
147	G 6-2 S D802	製埴土器			D490	177	S D801 P 8120	土師器 有台鉢	A : 6.4		D206
148	F-4	埴輪器 蓋	A : 15.0		D400	178	S B 802 P 8007	埴輪器 蓋	A : 15.0	掘り方、転用研	D200
149	E 4 S X 713	埴輪器 蓋	A : 15.2		D399	179	S B 802 P 8001	埴輪器 有台鉢	A : 11.9		D204
150	G 7-3	埴輪器 蓋	A : (13.5) H : (3.6)		D395	180	S B 802 P 8007	埴輪器 鉢	B : 8.0	柱礎	D201

番号	山土地点	基 種	流量 (cm)	備 考	実測 番号	番号	山土地点	基 種	流量 (cm)	備 考	実測 番号
181	S B 802 P 8002	噴霧器 器	A : 14.5 B : 10.1 H : 2.0	横り方	D198	211	〔 2, 4 区 P 8333	噴霧器 平軌	A : 4.6 B : 10.4 H : 13.1		D108
182	S B 802 P 8002	噴霧器 筒	B : 5.6	”	D199	212	S B 803 P 8156	噴霧器 器	A : 12.6		D189
183	S B 803 P 8294	噴霧器 器	A : 14.9		D195	213	E - 4 区 P 7005	噴霧器 器	A : 13.2 H : 2.7		D68
184	S B 803 P 8294	噴霧器 环	A : 16.0 B : 9.9 H : 3.0		D194	214	1 - 2, 3 区 P 8281	噴霧器 器	A : 16.4 H : 2.7		D226
185	S B 8 0 3, P 82 30	噴霧器 环	A : 14.2 B : 7.8 H : 3.0		D192	215	E - 3 区 P 7060	噴霧器 有台环	A : 14.9 B : 10.1 H : 4.3		D67
186	S B 803 P 8295	噴霧器 环	A : (12.8) B : 6.6 H : (2.5)		D188	216	D - 3 区 P 7048	噴霧器 有台环	A : (12.0) B : 6.6 H : 4.8		D55
187	S B 803 P 8295	噴霧器 环	B : (7.0)		D197	217	C - 3 区 P 7008	噴霧器 环	A : 14.4 B : 3.5 H : 9.0		D48
188	S B 803 P 8294	噴霧器 环	B : 7.4		D190	218	F - 6 2 区 P 8020	噴霧器 环	A : 12.6 B : 8.8 H : 3.4		D209
189	S B 803 P 8179	噴霧器 器	A : (14.1)		D191	219	E - 4 区 P 7005	噴霧器 环	A : 13.4 B : 8.5 H : 3.2		D49
190	S B 803 P 8177	土耕器 機	A : (8.6)		D202	220	G - 4, 1 区 P 8041	噴霧器 环	A : (12.5) B : 7.8 H : (2.0)		D210
191	S B 803 P 8230	土耕器 有台機	B : 5.7		D193	221	F - 4 4 区 P 8042	噴霧器 环	A : 13.4 B : 8.7 H : 3.2		D211
192	S B 803 P 8177	土耕器 機	A : (25.0)		D196	222	G - 3 2 区 P 8104	噴霧器 器	A : 12.7 B : 5.7 H : 2.1		D491
193	S B 804 P 8237	噴霧器 有台环	A : 10.7 B : 6.7 H : 4.4		D185	223	G - 3 2 区 P 8104	噴霧器 有台機	A : 13.9 B : 7.0 H : 5.7		D232
194	S B 806 P 8128	噴霧器 环	B : 7.6		D186	224	G - 1 2 区 P 8270	噴霧器 大機	A : 48.4		D227
195	S B 805 P 8292	噴霧器 器	A : 12.2		D178	225	S B 807 P 8136	土耕器 機	B : 5.4		D182
196	S B 805 K 838	噴霧器 有台機	A : 11.0 B : 4.3 H : 4.3		D173	226	G - 3 1 区 P 8114	土耕器 有台機	B : 6.6		D233
197	S B 805 S K 838	噴霧器 环	A : 12.0 B : 8.0 H : 2.8		D170	227	D - 3 区 P 7035	土耕器 機	A : 12.2 B : 6.1 H : 3.0		D66
198	S B 805 P 8182	噴霧器 环	A : 11.1 B : 5.5 H : 2.5		D172	228	G 7 - 1 区 P 8005	土耕器 機	B : 6.0		C39
199	S B 805 P 8285	噴霧器 环	A : 12.2 B : 7.9 H : 2.7		D183	229	E - 3 S E 702	噴霧器 器	A : 12.0	1 - 4 層	D19
200	S B 805 P 8285	噴霧器 器	A : 14.0 B : 11.0 H : 1.4		D175	230	E - 3 S E 702	噴霧器 有台环	A : 10.5 B : 7.2 H : 4.2	7 層	D 9
201	S B 805 P 8277	噴霧器 环	B : 9.8	農機	D181	231	E - 3 S E 702	噴霧器 有台环	A : 13.0 B : 8.4 H : 3.9	7 層	D11
202	S B 805 P 8182	噴霧器 环	A : 13.1 B : 9.2 H : 2.5	農機	D174	232	E - 3 S E 702	噴霧器 器	A : 12.8	南、西り方	D 4
203	S B 805 P 8285	噴霧器 环	A : 13.4 B : 8.3 H : 3.3	農機	D177	233	E - 3 S E 702	噴霧器 有台环	A : 11.2 B : 8.5 H : 4.2	畑面カクラン土、農 機	D14
204	S B 805 P 8227	噴霧器 环	B : 8.0	農機	D176	234	E - 3 S E 702	噴霧器 环	A : 14.4 B : 8.6 H : 3.9	横り方	D 3
205	S B 805 P 8227	土耕器 器	A : 9.0		D180	235	E - 3 S E 702	噴霧器 环	B : 10.0	土層、3層上位 農機「仮」	D15
206	S B 805 P 8227	土耕器 機	B : 6.6		D184	236	E - 3 S E 702	噴霧器 环	A : 11.4 B : 7.8 H : 3.9	7 層	D12
207	S B 805 P 8227	土耕器 器	A : 12.4		D179	237	E - 3 S E 702	噴霧器 环	A : 11.4 B : 7.4 H : 3.1	1 - 4 層、上層	D 7
208	S B 805 P 8292	土耕器 機	A : (38.0)		D171	238	E - 3 S E 702	噴霧器 环	A : 12.4 B : 7.5 H : 2.5	7 層、農機「仮」	D10
209	S B 804 P 8239	土耕器 機	A : (45.5)		D187	239	E - 3 S E 702	噴霧器 环	A : 8.6 B : 7.0 H : 1.7	畑面カクラン土	D 2
210	1 2 - 4 P 8777	噴霧器 小軌	A : 4.5 B : 7.0 H : 12.0		D100	240	E 3 S E 702	噴霧器 器	A : 20.0 B : 2.5 H : 17.1	畑面カクラン土	D415

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	備考	実測番号	番号	出土地点	器種	法量 (cm)	備考	実測番号
241	E-3 S E 702	埴輪器 瓶	A: 6.0	井戸側 南 下層	D 8	271	F1-3 S E 807	埴輪器 有台杯	A: (12.5) B: 8.0 H: (4.5)	東アゼ 1層 S区 -40cmまで	D119
242	E-3 S E 702	埴輪器 瓶	M: (12.1)	北側 掘り方	D18	272	F1-3 S E 807	埴輪器 有台杯	A: 15.0 B: 11.5 H: 3.0	土器群 一括	D124
243	E-3 S E 702	埴輪器 土瓶?		5, 6層	D 9	273	F1-3 S E 807	埴輪器 有台杯	A: 16.0 B: 11.1 H: 5.0	東アゼ 1層	D118
244	E-3 S E 702	埴輪器 瓶	A: 12.1 B: 5.8 H: 4.0	7層, 埴輪	C17	274	F1-3 S E 807	埴輪器 有台杯	A: 16.2 B: 10.2 H: 6.2	南北アゼ 1-2層	D117
245	E-3 S E 702	埴輪器 瓶	A: 15.8 B: 10.7 H: 2.2	7層	D16	275	F1-3 S E 807	埴輪器 有台杯	A: 15.1 B: 8.6 H: 6.3	4層 遺跡「紀」	D114
246	G3-2 S E 801	埴輪器 瓶	A: 11.2 B: 7.9 H: 3.1	E-60cm	D126	276	F1-3 S E 807	埴輪器 瓶	A: 12.6 B: 8.8 H: 3.4	南北アゼ 1-2層	D129
247	G3-2 S E 801	埴輪器 蓋	A: 12.7		D127	277	F1-3 S E 807	埴輪器 瓶	A: 12.0 B: 8.2 H: 3.3		D126
248	G3-2 S E 801	埴輪器 瓶	A: 12.4 B: 9.4 H: 3.7		D110	278	F1-3 S E 807	埴輪器 瓶	A: 12.0 B: 8.2 H: 3.5	E区 遺物の直上 遺跡「口K」	D125
249	F5-4 S E 801	埴輪器 瓶	M: 15.0	P 3	D112	279	F1-3 S E 807	埴輪器 瓶	A: 12.0 B: 7.4 H: 3.9	一括 外庭面遺跡「紀」	D122
250	G5-2 S E 801	土師器 壺	M: 13.8	幼生+器か	D111	280	F1-3 S E 807	埴輪器 瓶	A: 12.2 B: 7.5 H: 3.4	遺跡「紀」	D115
251	G4-4 S E 803	埴輪器 瓶	A: 12.8 B: 7.1 H: 3.2	最下層, 4層以下 40cm 遺跡	D128	281	F1-3 S E 807	埴輪器 瓶	A: 12.4 B: 8.2 H: 3.7	外庭面遺跡「紀」	D116
252	D-5 S E 701	土師器 瓶	B: 5.1	上層, F層	D 1	282	F1-3 S E 807	埴輪器 瓶	B: 7.0	E区 -50cm	D123
253	E-6 S E 704	埴輪器 有台皿	B: 5.4	埋土+掘り方-20cm	D26	283	F1-3 S E 807	土師器 壺	A: 12.0		D121
254	E-7 S E 704	埴輪器 有台皿	B: 6.2	埋土+掘り方-20cm	D25	284	F1-3 S E 807	土師器 壺	A: 24.0	K区 -50cm	D128
255	E-7 S E 704	埴輪器 有台皿	A: 14.3 B: 8.0 H: 5.95	上層, 埋土掘り方, 埋土 15cm	D21	285	J2-4 S E 809	埴輪器 蓋	A: 15.2		D229
256	E-7 S E 704	土師器 有台皿	B: 7.65	2-3層上	D23	286	J2-4 S E 809	埴輪器 瓶	A: 15.4 B: 12.4 H: 2.1		D230
257	E-7 S E 704	土師器 有台皿	A: 15.8 B: 8.2 H: 4.55	壁際埋土 2-3層上, 掘り方	D22	287	J2-4 S E 809	埴輪器 壺	A: 16.85 B: 11.3 H: 2.2	遺跡「宮」	D231
258	E-7 S E 704	土師器 有台皿	B: 6.4	埋土+掘り方 -20cm	D33	288	S D 701	埴輪器 瓶	A: 12.8 B: 7.95 H: 2.65		D50
259	E-7 S E 704	土師器 有台皿	B: 7.4	北 1-2層	D35	289	S D 701	埴輪器 瓶	A: 12.3 B: 7.8 H: 3.2		D50
260	E-5 S E 704	土師器 瓶	A: 13.2	南 掘り方 2-3層上, 埋土 掘り方	D32	290	E-4 S D 715	埴輪器 壺	A: 16.2 H: 3.6	SE-702上層	D52
261	E-6 S E 704	土師器 瓶	A: 13.3	北 1-2層	D34	291	I2-2 S D 802	埴輪器 壺	A: 11.4 B: 7.9 H: 2.2	遺跡, 上層	D241
262	E-6 S E 704	土師器 瓶	B: 6.6		D27	292	G4-1 S D 802	埴輪器 壺	A: 13.3 B: 3.2 H: 2.2	上層	D314
263	E-6 S E 704	土師器 瓶	A: 12.4	南 掘り方	D31	293	G7-1 S D 802	埴輪器 瓶	A: 14.0 B: 9.7 H: 3.6		D295
264	E-6 S E 704	土師器 瓶	A: 11.4 B: 4.5 H: 3.4	埋土 -15cm	D31	294	G7-1 S D 802	埴輪器 瓶	A: 12.2 B: 8.1 H: 3.7	上層	D296
265	B-3 S E 704	埴輪器 内面破	H: 9.2	1980・81年度分と複 合	D28	295	G6-1 S D 802	埴輪器 瓶	A: 11.4 B: 8.5 H: 3.2	上層	D312
266	F7-3 S E 805	土師器 瓶	B: 4.8	5層, アゼ	D129	296	G7-1 S D 802	埴輪器 瓶	A: 12.8 B: 9.0 H: 3.45		D298
267	J3-4 S E 802	土師器 小皿	A: 9.8	表から30cm上	D113	297	G5-3 S D 802	埴輪器 有台杯	A: 16.0 B: 11.3 H: 5.9	上層	D245
268	F1-3 S E 807	埴輪器 壺	A: 12.0	E-50cm	D120	298	G4-3 S D 802	埴輪器 瓶	A: 13.6 B: 6.3 H: 3.4	上層, 穴	D253
269	F1-3 S E 807	埴輪器 有台杯	A: 11.5 B: 8.65 H: 3.7	E -50cm	D127	299	G4-3 S D 802	埴輪器 瓶	A: 13.0 B: 6.6 H: 3.9	上, 下層	D252
270	F1-3 S E 807	埴輪器 有台杯	A: 12.8 B: 8.0 H: 4.9	南北アゼ 1, 2層	D120	300	G3-4 S D 802	埴輪器 壺	A: 16.0		D383

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	備考	実測番号	番号	出土地点	器種	法量 (cm)	備考	実測番号
301	G5-2 SD802	須恵器 灰土	A: 9.8		D329	331	C-3 SK701	須恵器 有台	A: 11.2 B: 8.1 H: 3.9	上層	D36
302	G7-1 SD802	須恵器	M: 10.8 B: 5.6		D356	332	C-2 SK705	須恵器 有台	B: 6.7	No 6	D41
303	G4-3 SD802	土師器 碗	A: 16.3 B: 6.7 H: 5.9	上層	D250	333	C-3 SK705	須恵器 碗	A: 12.2 B: 7.6 H: 3.1		D46
304	SD802	土師器 壺	B: 6.2	上層	D255	334	C-3 SK705	須恵器 有台	A: 14.1 H: (5.9)	No 4, C-3包	D39
305	E5-4 SD822	須恵器 有台	A: 10.4 B: 6.8 H: 3.8		D140	335	C-3 SK705	須恵器 碗	A: 13.1 B: 9.7 H: 3.1	No 1 墨書	D37
306	SD802	須恵器 碗	A: 12.0		D150	336	C-3 SK705	須恵器 碗	A: 13.2 B: 10.2 H: 3.5	No 8	D42
307	H6-2 SD827	土師器 口	A: 15.0 B: 9.0 H: 4.5	内外両面彫	D148	337	C-3 SK705	須恵器 碗	A: 13.6 B: 7.7 H: 3.5	No 5, 直線	D40
308	F5-2 SD828	須恵器 有台	A: 16.0 B: 9.7 H: 6.4		D149	338	C-3 SK705	須恵器 碗	A: 12.5 B: 9.0 H: 3.2	No 2	D38
309	E5-4 SD836	須恵器 壺	A: 12.4 H: 2.8		D146	339	C-3 SK705	須恵器 有台	A: (11.8) B: 7.8 H: (4.1)		D47
310	H6-2 SD837	須恵器 壺	A: 16.0		D144	340	C-3 SK705	須恵器 壺	A: 23.0		D44
311	H6-2 SD837	須恵器 碗	A: 13.2 B: 7.2 H: 2.7		D444	341	C-3 SK705	須恵器 碗	B: 13.8		D45
312	G5-3 SD837	須恵器 碗	A: 6.9		D145	342	G-7 SK804	須恵器 有台	A: 14.3 B: 10.2 H: 4.4	灰面	
313	I5-4 SD854	須恵器 壺	A: 12.5		D142	343	F4-4 SK825	須恵器 有台	A: 10.8 B: 6.9 H: 2.9		D132
314	F4-3 SD864	須恵器 壺	A: 16.0 B: 10.6 H: 2.3		D406	344	F4-4 SK834	須恵器 壺	A: 12.6 H: 2.5	縦用祝	D131
315	I3-1 SD810	須恵器 壺	A: 14.5 B: 12.2 H: 2.3		D154	345	G6-4 SK861	土師器 小壺	A: 14.4 H: (13.0)	G6-4, SD802	D343
316	J3-1 SD8103	須恵器 碗	B: 6.7		D162	346	J3-3 SB805	須恵器 灰土	M: 13.0	SK838	D167
317	I2-1 SD813	須恵器 小壺	B: 5.7		D155	347	J3-4 SK845	土師器	灰土 (10.0)		D408
318	I2-1 SD814	須恵器 壺	A: (12.8)		D152	348	C-2 SX702	須恵器 有台	A: 14.2 B: 10.3 H: 3.7		D74
319	H1-4 SD877	須恵器 碗	A: 12.4 B: 7.2 H: 2.2		D167	349	E-4 SX713	須恵器 壺	A: 12.4 H: 2.5		D75
320	H3-4 SD877	須恵器 壺	A: 15.0 B: 12.1 H: 2.9	I 4 枕の痕	D165	350	G7-2 SX801	土師器 小壺	B: 7.5		D483
321	H3-4 SD888	須恵器 有台	A: 12.2 B: 7.4 H: 4.4		D164	351	E-4 SX713	須恵器 壺	B: (10.7)	西	D77
322	H3-3 SD877	須恵器		頂上孔 4	D445	352	F-5 SX804	須恵器 壺			D398
323	H2-3 SD877	須恵器 壺			D481	353	F5-1 SX804	須恵器 壺	A: 16.0		D376
324	J2-2 SD8112	土師器 小壺	B: 6.0		D153	354	F5-1 SX804	須恵器 有台	A: 13.7 B: 9.3 H: 3.5		D369
325	I2-2 SD815	土師器 壺	B: 7.2		D157	355	F5-4 SX804	須恵器 有台	A: 10.2 B: 7.0 H: 4.4		D375
326	I2-1 SD815	土師器 碗	A: (33.0)		D158	356	G5-1, 2 SX804	須恵器 碗	A: 12.4 B: 8.8 H: 3.4		D373
327	H2-2 SD8130	須恵器 碗	B: 10.0		D159	357	F5-3, 4 SX804	須恵器 碗	A: 12.6 B: 9.0 H: 3.2		D374
328	G-0 SD8140	須恵器 有台	B: 6.0		D160	358	F-G SX804	須恵器 石蓋付 壺	A: 8.0 M: 15.0	紳士から表面採集	D404
329	ST	須恵器 壺	A: 12.0	縦用祝	D143	359	F5-3, 4 SX804	須恵器 有台	A: 16.2		D372
330	E-F-6 ST95	須恵器 壺	A: 12.0		D141	360	F5-1 SX804	須恵器 壺			D371

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	備考	資料番号
361	F5-3.4 S X 804	土師器 壺	A: 20.4		D482
362	F5-1 S X 804	土師器 壺	A: 19.6		D370
363	G-3 瓦合甕	埴輪器 壺	A: 12.2 H: 3.4		D355
364	H6-2	埴輪器 壺	A: 12.2 H: (2.5)		D360
365	E5-3	埴輪器 壺	A: 13.5 H: (3.1)		D412
366	E5-4	埴輪器 壺	A: 12.4 H: 2.7	G3-3	D354
367	F6-4	埴輪器 壺	A: 12.0 H: 2.4		D344
368	G6-1	埴輪器 壺	A: 13.0	転用魂	D416
369	G7-1	埴輪器 壺	A: 13.0		D336
370	F5-3	埴輪器 壺	A: 13.0	転用魂	D342
371	E-3	埴輪器 壺	A: 12.5	井戸周辺 カクラン	D96
372	H6-1	埴輪器 壺	A: 17.0		D361
373	E-4	埴輪器 壺	A: 14.8		D101
374	I2-1	埴輪器 有台杯	A: 14.9 B: 10.7 H: 4.3		D380
375	B-2	埴輪器 有台杯	B: 10.0	御水北、転用魂	D42
376	G6-1	埴輪器 有台杯	A: 13.0 B: 9.5 H: 4.1		D332
377	D-3	埴輪器 有台杯	A: 12.1 B: 9.0 H: 3.7		D92
378	E-5	埴輪器 有台杯	A: 12.3 B: 9.1 H: 3.6		D102
379	E-3	埴輪器 有台杯	A: 12.2 B: 8.4 H: 4.0		D94
380	E-4	埴輪器 有台杯	A: 11.8 B: 7.4 H: 4.1		D100
381	G5-2	埴輪器 有台杯	A: 7.0 B: 7.2 H: 3.9		D336
382	F-3	埴輪器 有台杯	A: 12.0 B: 7.0 H: 4.7		D104
383	G5-1	埴輪器 有台杯	A: 11.2 B: 7.0 H: 3.6		D338
384	E-3	埴輪器 有台杯	A: 10.9 B: 7.2 H: 4.2	井戸周辺 カクラン	D95
385	E-3 S E 702	埴輪器 有台杯	A: 12.0 B: 7.7 H: 4.0	7層	D13
386	G-2.5	埴輪器 有台杯	A: 17.0 B: 8.4 H: 8.1	H1-3, 4	D357
387	F5-1	埴輪器 有台杯	B: 7.0		D500
388	D-2	埴輪器 有台杯	B: 6.8		D78
389	G3-3	埴輪器 壺	A: 12.4 B: 7.7 H: 3.3		D351
390	G5-2	埴輪器 壺	A: 12.6 B: 7.4 H: 3.7	へう記号	D337
391	E-3 瓦合甕	埴輪器 壺	A: 12.1 B: 7.7 H: 3.5		D485
392	E-4	埴輪器 壺	A: 12.2 B: 8.7 H: 3.2	瓶より重へ6m	D49
393	F5-2	埴輪器 壺	A: 12.4 B: 9.0 H: 3.3		D345
394	G6-4	埴輪器 壺	A: 11.0 B: 7.4 H: 3.1		D334
395	B-3	埴輪器 壺	A: 11.4 B: 7.3 H: 3.5	御水北	D84
396	C-4	埴輪器 壺	A: 13.0 B: 7.4 H: 4.5		D79
397	I2-2	埴輪器 壺	A: 12.3 B: 7.9 H: 2.8		D382
398	G4-1.2	埴輪器 壺	A: 7.0 H: 3.4		D350
399	F6-1	埴輪器 壺	A: 14.2 B: 10.0 H: 1.8		D340
400	H5-2	埴輪器 壺	A: 16.4 B: 11.2 H: 2.6		D358
401	I2-4	埴輪器 壺	A: 16.0 B: 12.2 H: 2.0		D384
402	I2-2	埴輪器 壺	A: 15.1 B: 10.8 H: 2.1		D381
403	G5-3	埴輪器 有台甕	A: 15.0 B: 11.2 H: 2.9		D341
404	不明	埴輪器 有台甕	B: 8.0		D87
405	G6-1	埴輪器 有台甕	B: 6.0		D442
406	E-2	埴輪器 有台甕	B: 6.4		D88
407	D-4	埴輪器 有台甕	B: 7.0		D69
408	C-2	埴輪器 有台甕	B: 7.0		D81
409	H2-4	埴輪器 有台甕	B: 5.8		D452
410	E-2	埴輪器 甕	A: 11.0 B: 7.2 H: 1.9		D90
411	F-2	埴輪器 甕	B: 7.0		D502
412	H3-3	埴輪器 甕	A: 14.7 B: 3.1 H: 4.9		D362
413	B-3	埴輪器 甕	A: 11.3		D83
414	J2-4	埴輪器 甕	A: 10.9		D405
415	E-3	埴輪器 甕	B: 11.4	カクラン 井戸周辺	D97
416	C	埴輪器 甕	A: (26.5)		D105
417	H5-1	埴輪器 埴輪甕	A: 16.2		D359
418	不明	埴輪器 甕	A: 28.0		D365
419	不明	埴輪器 甕	A: 15.5		D366
420	I2-3	土師器 高杯		7面	D378

番号	出土地点	器種	数量 (cm)	備考	実測番号	番号	出土地点	器種	数量 (cm)	備考	実測番号
421	E-3 包含層	上脚部 高杯	B : 11.5	井戸周辺	D93	451	C-2 包含層	灰物陶器 有台皿	B : 7.3		D430
422	F-3	上脚部 杯	A : 12.1 H : 3.9		D106	452	E-3	灰物陶器 有台皿	B : 8.0		D429
423	G3-2	上脚部 有台皿	A : 14.3 H : 3.4	B : 6.5 G3	D352	453	E-4 SX713	灰物陶器 平底	B : 17.0	SX802, 分銅方ア SD706, E2包, E 3包	D78
424	I4-2	上脚部 皿	A : 10.2		D385	454	F-4 包含層	上脚部 砂鉢	W : 4.9 H : 2.1		D53
425	D-3	土師器 壺	A : 21.9		D91	455	G8- 1,3 SD802	土師器 土鉢	W : 3.8 H : 3.3 G : 37.3x		D471
426	G5-2	土師 壺	A : 23.0		D339	456	E-3 SE702	土師器 土鉢	W : 3.6 H : 2.7 G : 28.0x	7層	D465
427	C-3	上脚部 こしき	B : 18.0		D80	457	SD802	土師器 土鉢	W : 2.8 H : 2.1 G : 10.2x	砂層上層	D472
428	G-6	灰物器 杯	A : 12.8 H : 3.1	B : 9.8	D383	458	J2-3,4 SX843	土師器 土鉢	W : 0.8 H : 3.6 G : 1.1x		D468
429	G5-3 SD802	灰物器 杯	B : 9.2		D246	459	J3-4 SE806	土師器 土鉢	W : 1.4 H : 4.5 G : 5.4x		D467
430	I7-4 SD811	灰物器 杯	B : 6.0		D151	460	E6-1 SE704	土師器 土鉢	W : 1.5 H : 4.9 G : 8.7x	埋土, 掘り方	D469
431	F-4 包含層	灰物器 杯	B : 8.5		D107	461	E-3 SE702	土師器 土鉢	W : 1.7 H : 5.0 G : 8.7x	7層	D473
432	F5-1 SX894	灰物器 杯	B : 7.0		D377	462	SD877	灰物器 土鉢	W : 2.6 H : 3.5 G : 20.7x		D461
433	P8013	灰物器 杯	B : 8.0		D208	463	SD898	土師器 土鉢	W : 2.3 H : 7.5 G : 23.5x		D477
434	G5-4 SD802	灰物器 有台皿	B : 8.0		D247	464	E-4 包含層	灰物器 土鉢	W : 1.9 H : 6.8 G : 13.6x		D483
435	H1-4 包含層	灰物器 杯	B : 7.0		D414	465	E-4 SX713	灰物器 土鉢	W : 2.1 H : 6.2 G : 22.8x		D464
436	J2-3 P-8297	灰物器 杯	B : 8.0		D228	466	D-3 SD707	灰物器 土鉢	W : 1.8 H : 5.2 G : 21.4x		D462
437	J3-1 P-8167	灰物器 杯	B : 8.0		D235	467	SD701	土師器 土鉢	W : 2.8 H : 5.6 G : 31.0x		D466
438	E-4 P65	灰物器 杯	B : (9.6)		D417	468	J2-4 P8295	土師器 土鉢	W : 3.3 H : 7.0 G : 80.3x		D476
439	I1-2 包含層	灰物器 杯	B : 7.8		D329	469	E-3 井戸周辺	土師器 土鉢	W : 3.6 H : 8.4 G : 76.1x		D474
440	G4-4 SD802	灰物器 杯	B : 6.4		D249	470	I2-3 P-8283	土師器 土鉢	W : 3.3 H : 6.7 G : 50.9x		D475
441	F4-4 SD828	灰物器 杯	A : 12.8 H : 3.3	B : 9.4	D147	471	SD8104	土師器 土鉢	W : 3.2 H : 4.9 G : 29.7x		D470
442	G6-1 SD892	灰物器 壺	A : 13.6 H : 2.7		D416	472	E-4 SX713	灰物器 杯	A : (12.4)	埋付層・最小片あり	D73
443	F4 P7194	灰物器 有台皿	A : 15.4 H : 3.0	B : 10.9	D70	473	E5- 3,4 SD836	灰物器 杯	B : 9.2	埋置り	D419
444	G2-3 SD8135	灰物器 有台皿	B : 14.8 H : (6.0)		D134	474	E-3 SE702	灰物器 杯	A : (12.0)	井戸側 上層, 埋置り	D54
445	E-3 SE702	灰物器 私用碗			D5	475	S-E802 P8	灰物器 杯	A : 13.0	掘り方, 埋置	D203
446	E-3 SE702	灰物器 私用碗			D24	476	G8-1 SD802	灰物器 杯		埋付層	D422
447	D-4 SD706	灰物器 有台皿	B : 7.5		D486	477	H2-3 SD877	灰物器 有台皿	A : (14.0)	埋付層	D133
448	E2 包含層	灰物器 有台皿	B : 6.4		D480	478	E-4 クワラン	灰物器 有台皿	A : 15.0 B : 9.6 H : 6.2	埋付層	D98
449	G5-1,4	灰物器 有台皿	B : 7.2		D485	479	S-B801 P8083	灰物器 板	B : (10.0)	埋置り 掘り方	D207
450	C-3 SD701	灰物器 有台皿	B : 7.2	中央	D428	480	G6-1 SD802	土師器 灰壺	A : 22.0	上層, 内面埋中り	D451

番号	出土地点	群 種	法量 (cm)	備 考	実測番号	番号	出土地点	群 種	法量 (cm)	備 考	実測番号
481	G 5 - 3 S 802	土師器 長袋		内面塗盛り (赤)	D 458	511	I 2 - 4 P - 8194	土師器 小皿	B : 4.6	回転未切り	D 225
482	S 8802 P 8002	土師器 長袋		張り方、内面塗盛り (黒)	D 454	512	I 2 - 4 P - 8194	土師器 板	B : 6.2	*	D 238
483	F - 1 S E 807	土師器 長袋		張り方、内面塗盛り (黒)	D 457	513	I 2 - 4 P - 8194	土師器 小皿	A : 9.4 B : 4.2 H : 1.3	*	D 238
484		土師器 長袋		内面塗盛り (赤)	D 456	514	I 3 - 2 P - 8134	土師器 小皿	A : 10.0 B : 4.8 H : 2.0	*	D 234
485	C 3 S D 701	土師器 長袋		中央部、内面塗盛り (黒)	D 453	515	G 3 - 2 P - 8047	土師器 小皿	A : 8.9 H : 2.1	*	D 212
486	D - 4 S X 709	土師器 長袋		下層、内面塗盛り (赤)	D 460	516	I 3 - 4 S D 8101	土師器 小皿	A : 9.0	赤ロクロ	D 161
487	E 5 - 4 S E 802	土師器 長袋		各層、内面塗盛り (黒)	D 452	517	H 1 - 4 S D 877	土師器 小皿	A : 7.8 B : 3.5 H : 1.7	*	D 166
488	E - 3 S E 702	土師器 長袋		上層、内面塗盛り (黒)	D 455	518	E - 5 P - 7136	土師器 小皿	A : 10.4	*	D 71
489	G 4 - 3 S 809	土師器 長袋		内面塗盛り (黒)	D 420	519	S D 894	土師器 小皿	A : 14.4	*	D 163
490	G 4 - 3	土師器 長袋		内面塗盛り	D 459	520	I 2 - 1 S 809	埴土 片白鉢		へうき「九」	D 386
491	E - 3 S F 702	埴土器 メソコ	L : 2.4 W : 2.3	7層	D 447	521	I - 2 P - 8180	白磁 碗	A : 17.0	黒色土	D 431
492	E - 2 S E 702	埴土器 メソコ	L : 2.8 W : 2.7	下層、井戸内	D 448	522	表層	白磁 碗	A : 15.8		D 432
493	E - 3 S E 702	埴土器 メソコ	L : 1.9 W : 2.6	下層、井戸内	D 449	523	E - 4 S K 715	白磁 碗	A : 18.0		D 49
494	E - 3 S E 702	土師器 メソコ	L : 2.3 W : 2.5	井戸内 上層	D 448	524	F 6 - 4 S 809	緑釉陶 器	A : 13.0		D 487
495	B - 3 S 809	青磁 メソコ	L : 2.2 W : 2.1		D 450	525	F 4 - 2 S 809	白磁 碗	A : 11.0	F 5 - 1	D 433
496	I 2 - 3 P - 8208	土師器 小皿	A : 8.5 B : 4.0 H : 2.1	回転未切り	D 220	526	D - 3 S 809	白磁 碗	B : 3.3		D 439
497	I 2 - 3 P - 8208	土師器 小皿	A : 9.1 B : 4.2 H : 2.1	回転未切り	D 219	527	E - 2 S 809	白磁 碗	B : 4.3		D 425
498	I 2 - 3 P - 8208	土師器 小皿	A : 5.0 B : 3.7 H : 2.1	回転未切り	D 218	528	F - 4 S 809	黒土 灰白鉢	B : 4.1		D 436
499	I 2 - 3 P - 8208	土師器 小皿	A : 8.8 B : 4.3 H : 2.0	*	D 215	529	F 5 - 3 S 809	黒土 灰白鉢	A : 16.0		D 438
500	I 2 - 3 P - 8208	土師器 小皿	A : 8.7 B : 5.3 H : 1.7	回転未切り	D 224	530	H 4 - 4 S D 875	緑釉 鉢			D 478
501	I 2 - 3 P - 8208	土師器 小皿	A : 8.6 B : 4.2 H : 1.8		D 221	531	E 4 S X 713	埴 土		押印	D 501
502	I 2 - 3 P - 8208	土師器 小皿	A : 8.3 H : 1.9	赤ロクロ	D 213	532	F - 0 S 809	埴土 すり鉢	A : (32.2)	G - 0	D 479
503	I 2 - 3 P - 8208	土師器 小皿	A : 9.4 B : 4.0 H : 2.1	*	D 217	533	H 5 - 4	埴土 鉢	A : 10.6		D 434
504	I 2 - 3 P - 8208	土師器 小皿	A : 9.0 B : 4.3 H : 1.9	*	D 216	534	H 5 - 3 S 809	埴土 鉢	B : 6.4		D 435
505	I 2 - 3 P - 8208	土師器 有孔器	A : (18.4) B : 8.1 H : 4.1	*	D 223	535	F - 2 S 809	青磁 鉢	B : 4.0		D 103
506	I 2 - 3 P - 8208	土師器 有孔器	A : 15.0 B : 9.6 H : 4.9	*	D 222	536	F 5 - 1 S 809	青磁 鉢	A : 12.0	F 4 - 2	D 440
507	I 2 - 3 P - 8306	土師器 有孔器	A : 14.4 B : 7.2 H : 4.2	*	D 214	537	D - 3	青磁 鉢	B : 6.1		D 437
508	I 2 - 4 P - 8194	土師器 小皿	A : (9.0)	*	D 240	538	F - 4	青磁 鉢	A : 12.2 B : 4.0 H : 3.5	F 2	D 424
509	I 2 - 4 P - 8194	土師器 小皿	A : (9.0)	*	D 239	539	H - 1 S 809	青磁 鉢			D 421
510	I 2 - 4 P - 8194	土師器 小皿	A : (9.0)	*	D 237	540	G 5 - 3 S D 851				D 423

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	備考	実測番号	番号	出土地点	器種	法量 (cm)	備考	実測番号
541	H 2-1 遺骨層	磨製石斧	L: (6.4) W: 6.2 C: 4.9 G: 183.6g		G19	571	S 自907 P8306	銅製			D409
542	F 5-1 土層	磨製石斧	L: (5.7) W: 6.4 C: 3.2 G: 152.3g	F 4-2	G21						
543	排水溝	打製石斧	L: (8.5) W: (8.4) C: 3.1 G: 327.9g		G22						
544	F 5-1 遺骨層	打製石斧	L: (8.7) W: 10.5 C: 2.5 G: 226.3g	F 4-2	G28						
545	H 1-2 SD802	礫石 礫石	G: 18.8g		G15						
546	C-3 SK715	礫石 礫石	G: 13.6g	アセ	G12						
547	G 5-2 SD802	礫石 礫石	G: 18.9g		G14						
548	H-1- 2 SD802	礫石 礫石	G: 8.1g	アセ	G13						
549	G 6-3 遺骨層	礫石 礫石	G: 17.6g	G 3-6	G11						
550	G 7-3 S 711- 10E	礫石	L: 11.3 W: 9.6 C: (4.2) G: 542.7g		G17						
551	H 3-1 SK836	礫石	L: 11.9 W: 8.35 C: 5.3 G: 790.3g		G16						
552	排水溝	礫石	L: (10.8) W: 7.3 C: 4.5 G: 498.7g		G18						
553	H 2-2 SD802	礫石	L: (5.0) W: 3.8 C: 2.8 G: 37.6g	上層	G24						
554	G 6-2 SD802	礫石	L: 5.2 W: 1.86 C: 1.36 G: 15.7g	上層	G25						
555	H 2-1 SD8132	礫石	L: (10.1) W: 4.9 C: 5.0 G: 298.6g		G23						
556	E-2 ST14	石鏃	L: 2.94 W: 1.98 C: 5.2 G: 1.3g	有蓋	G4						
557	E-5- SK717	石鏃	L: 2.5 W: 1.62 C: 0.4 G: 1.3g	下層 (-40cm)	G1						
558	G 5-2 SK814	石鏃	L: 2.67 W: 0.4 C: 0.4 G: 0.9g		G5						
559	E-5 SK-17	石鏃	L: 2.88 W: 1.78 C: 0.36 G: 1.3G	上層 (-10cm)	G2						
560	G 6-1 SX802	石鏃	L: 3.4 W: 1.37 C: 0.4 G: 1.5g	砂層	G6						
561	E-2 ST14	石鏃	L: 3.17 W: 1.5 C: 0.3 G: 1.4g		G3						
562	G-7	石鏃	L: 3.24 W: 2.1 C: 4.7 G: 3.4g	表層	G10						
563	SD877	磨製石鏃	L: 3.8 W: 3.1 C: 0.9 G: 12.8g		G29						
564	H 6-2 遺骨層	スクリュー パル	L: 5.75 W: 5.3 C: 1.2 G: 39.0g		G30						
565	G 2-4 a	勾玉	L: 1.96 W: 1.4 C: 0.43 G: 1.7g	小さい	G7						
566	F-2 a	土製品	G: 9.0g	水石調 のすい、施溝	G26						
567	E-2	ゆず玉	L: 1.77 W: 1.4 C: 1.3 G: 3.8g	靑銅製 水玉	G9						
568	G 5-2 SK813	滑石 磨製車	L: (3.6) W: (3.6) C: 1.7 G: (5.6g)		G8						
569	F-3 遺骨層	鉄線下	G: 7.6g		D411						
570	J 3-4 SK845	瓦			D418						

番号	出土地点	器種	流量 (cm)	備考	実測番号
1	E-3 S E 702	井戸刷	L: 86.8 W: 27.0 C: 2.8	西-4	水54
2	"	井戸刷	L: 84.8 W: 27.7 C: 2.8	東-4	水50
3	"	井戸刷	L: 86.1 W: 31.4 C: 2.6	北-3 水-50と部 合 離れあり	水50
4	"	井戸刷	L: 83.9 W: 31.5 C: 3.1	南 3, 4	水51, 52
5	"	井戸刷	L: 88.1 W: 21.1 C: 3.3	南-2	水49
6	"	井戸刷	L: 86.6 W: 20.4 C: 3.5	東-3	水57
7	"	井戸刷	L: 85.3 W: 20.4 C: 3.0	西-2	水56
8	"	井戸刷	L: 84.6 W: 20.3 C: 2.9	北-2	水85
9	"	井戸刷	L: 83.0 W: 21.3 C: 3.2	北-1	水87
10	E-3 S E 702	井戸刷	L: 85.2 W: 24.9 C: 3.0	東-1	水66
11	E-3 S E 702	井戸刷板	L: 88.9 W: 41.3 C: 3.8		水29
12	"	井戸刷板	L: 88.8 W: 42.2 C: 3.1		水28
13	E-3 S E 702	井戸刷	L: 83.4 W: 10.3 C: 1.2	東-3	水59
14	"		L: 84.7 W: 4.6 C: 1.6	東-3下	水58
15	E-3 S E 702	井戸刷板 止め	L: 86.0 W: 2.6 C: 1.7	止め北	水31
16	E-3 S E 702		L: 83.6 W: 3.7 C: 2.8	掘り方	水39
17	E-3 S E 702	井戸刷板 止め	L: 82.4 W: 2.5 C: 1.7	底板止め 東	水41
18	E-3 S E 702	井戸刷打 ら込み材	L: 86.2 W: 6.7 C: 1.4	北-2	水37
19	E-3 S E 702	井戸刷打 ら込み材	L: 64.0 W: 14.5 C: 2.2		水53
20	"	井戸刷打 ら込み材	L: 47.2 W: 12.7 C: 2.0	北-4	水38
21	F 1-3 S E 807	井戸刷板	L: 85.1 W: 8.0 C: 2.5		水42- 43
22	F 1-3 S E 807	井戸刷板	L: 81.2 W: 6.5 C: 5.9	井戸村	水83
23	F 1-3 S E 807	井戸刷板	L: 61.7 W: 9.8 C: 4.8	井戸村	水82
24	E-8 S E 704	井戸刷板	L: 86.4 W: 14.5 C: 6.3	支柱口	水88
25	E-8 S E 704	井戸刷板	L: 86.9 W: 16.8 C: 7.1	支柱口	水89
26	E-8 S E 704	井戸刷板	L: 120.3 W: 8.0 C: 2.4	E-3, S E 04 サン目	水44
27	E-8 S E 704	井戸刷板	L: 116.0 W: 10.1 C: 3.2	サンA	水45
28	" S E 704	井戸刷板	L: 81.5 W: 21.4 C: 2.8	N-2	水84
29	" S E 704	井戸刷板	L: 88.4 W: 16.0 C: 2.3	S-9	水55
30	" S E 704	井戸刷板	L: 88.6 W: 16.3 C: 1.9	W 12	水58
31	E-6 S E 704	井戸刷板	L: 71.4 W: 14.3 C: 3.6	W-1 N-2 取 材	水71
32	" S E 704	井戸刷板	L: 82.3 W: 14.9 C: 2.1	N-9	水33
33	" S E 704	井戸刷板	L: 86.4 W: 13.3 C: 2.1	N-15	水70
34	" S E 704	井戸刷板	L: 84.7 W: 18.2 C: 2.3	W 11	水72
35	G 3-3 S D 802		L: 158.1 W: 7.3 C: 2.3		水86
36	J 3-4 S E 808	井戸刷板	L: 172.3 W: 8.7 C: 3.3		水59
37	J 3-4 S E 808	井戸刷	L: 74.5 W: 33.9 C: 3.4		水81
38	J 2-2 S E 805	井戸刷板	L: 79.6 W: 4.4 C: 2.3	P-222	水80
39	J 2-2 S E 805	井戸刷板	L: 78.4 W: 4.3 C: 2.3	P-222	水32
40	J 2-1 S E 805	柱礎	L: 42.4 W: 34.2 C: 29.5	P-8291	水75
41	E-3 S E 702	薄板	L: (19.3) W: 1.8 C: 0.2	7層	水73
42	E-3 S E 702	動物容器 残板	A: 26.0 H: 13.7	6, 7層 (破片)	水74
43	F 1-3 S E 807	動物容器 蓋板	長さ: 17.0 C: 0.8		水27
44	J 2-2 S E 808	動物物	A: 14.1 H: 10.1	木打6本 柄穴挿	水30
45	J 3-4 S E 808	蓋	L: 19.5 W: 0.8 C: 0.5	底から30cm上	水78
46	J 3-4 S E 808	蓋	L: 19.6 W: 0.6 C: 0.4	底から30cm上	水78
47	J 3-4 S E 808	蓋	L: 14.3 W: 0.7 C: 0.5	底から30cm上	水78
48	J 3-4 S E 808	蓋	L: 14.1 W: 0.7 C: 0.5	底から30cm上	水78
49	I 2-3 P 8213	破板	L: 24.6 W: 15.7 C: 7.8		水47
50	J 2-1 P-8278	破板	L: 32.1 W: 16.7 C: 6.6		水77
51	J 2-1 P-8296	破板	L: 29.0 W: 16.4 C: 4.5		水36
52	J 2-1 P-8293	破板	L: 21.2 W: 19.0 C: 4.7		水35
53	J 2-1 P-8303	破板	L: 22.0 W: 16.0 C: 4.3		水34
54	J 2-4 P 8172	破板	L: 21.0 W: 7.1 C: 2.7		水76
55	"	破板	L: 19.6 W: 6.7 C: 2.7		水76
56	"	破板	L: 18.7 W: 8.3 C: 3.3		水76
57	"	破板	L: 19.1 W: 8.1 C: 3.1		水76

第4章 考 察

1. 縄文から弥生時代中期の土器

1はSK706出土である。条痕文系壺であり、受口状口縁を持つ。屈曲部下端に粘土を張りつけた後に指で刻みを入れる。口縁部には縦の浮文を張り付け、口唇部には刻みを入れる。胎土には1～2mm大の砂粒を非常に多く含む。色調は淡茶褐色である。

2・3はSK717出土である。2は条痕文系壺の頸部突帯と思われる。指頭による刺突文を2列持つ。胎土には2～3mm大の砂粒を含む。色調は外面浅い肌色、内面くすんだ灰色である。3は条痕文系壺の頸部である。施文順序は条痕調整のち跳上文的な横条痕(文様)である。胎土には1～2mm大の砂粒を多く含む。色調は表面浅い肌色、断面暗灰色である。4はSK717・SK823出土である。大型の深鉢であり、外面は横方向の条痕調整、内側は横方向のナデ調整である。口唇部を軽くナデでやや面取り風に仕上げる。内外面に一部余った粘土が盛り上がっている。胎土には1～2mm大の砂粒を多く含む、海綿骨針は微量含む。色調は浅い肌色である。

5はSX709上層出土である。条痕文系壺で、受口状口縁を持つ。内面には5条の条痕、外面には3条の条痕で直線文様を描く。受口状口縁外面には波状文、屈曲部には指による刻みを持つようである。胎土には2～4mm大の砂粒を多く含む、色調は淡い黄白色である。a・b・cはSX709下層出土であり、大地型の精製壺と思われる。a～cは同一個体と思われる。口縁部が大きく外反する壺であり、ゆるい波状を呈すると思われる。aは口縁部内外面に直線文を持ち、突起部分に刻みを持つ。bはaに続く部分と思われる。cは半截竹管による菱形状の文様を持つ可能性がある。胎土には砂粒を少量含む。色調は淡茶褐色である。

6は表探資料である。表面が荒れており調整は不明であるが、内傾接合である。縄文時代晩期後葉の長竹式であろう。沈線の上に押引列点文を持つ。胎土には1～3mm大の砂粒を非常に多く含む。色調は暗灰色である。

7・7bは同一個体でP8004出土である。精製壺と思われ、渦巻き文ないし同心円文を持つものと思われる。内外面ナデ調整、内面にはおこげが付着する。胎土には0.5mmの砂粒を多く含む、2mm大の砂粒も若干入る。色調は暗茶褐色である。

9はSK802出土である。深鉢と思われるが、定かではない。口縁部には浮線状の四字状文を持つ。胎土には2mm大の砂粒を含む。色調は外面くすんだ白色、内面淡灰色である。

10はSD802・SK805出土である。精製壺と思われ、肩部に工字状文ないし隅円長方形帯流水文を持つ。横の沈線を引いてから、縦に沈線を入れて文様を描いている。胴部には同心円文ないし渦巻き状文をもつ。胎土には2mm大の砂粒を含む。色調は外面黄白色、くすんだ灰色、内面灰褐色である。8はSD802・SX801出土である。深鉢の底部と思われ、外面条痕、内面ナデ調整と思われる。揚底であるが外側が擦れて減っている。底部にはすだれ状圧痕がみられ、縦糸間隔2～3mm、横糸間隔2mmである。胎土には1～2mm大の砂粒を多く含む。色調は外面黄白色、内面黒灰色である。11はSD802・SK805出土である。内外面はナデ調整であり、外面は少し凹凸

がある。胎土には1mm大の砂粒を非常に多く含む。色調は暗灰褐色である。12はSK805出土である。底部であり、すだれ状圧痕を持つ。縦糸間隔2・3mm、横糸間隔2・3mmである。胎土には2～3mm大の砂粒と海綿骨針を多く含む。色調は灰褐色～暗灰色である。13はSK805・SD802出土である。浅鉢と思われ、屈曲部に長さ3.5cm、幅1cmの突起を張り付けている。突起の横には幅広の沈線が続く。上部には幅広の沈線が3ないし4条引かれ、その下には棒を折ったままの先端で刺突文を入れる。胎土には0.5～1mm大の砂粒を多く含む、色調は暗い灰褐色である。

14はP8005から出土した。深鉢であり、口縁部に突起を持つ。突起を工具により2つに割っている。条痕施文後に口唇部を丸く仕上げている。外面にはスガが付着する。胎土には1～2mm大の砂粒と海綿骨針を含む。色調は外面暗灰褐色、内面灰褐色である。

15はSK808出土である。縦条痕調整の深鉢である。口唇部には指による刻みを持つ。胎土には2～3mm大の砂粒を多く含む、海綿骨針も含む。色調は暗灰褐色、淡い肌色である。底部には網代圧痕を持つ。16はSK808・SD802下層出土である。間隔の粗いハケ状工具で調整された深鉢である。胎土には0.5mm大の砂粒を含む。色調は淡灰褐色である。17はSK808出土である。深鉢の底部と思われ、網代状圧痕を持つ。

18～21はSD802出土である。18深鉢であり、指頭による直線文と山形文を持つ。口唇部には棒状具による斜めの刻みが入る。胎土には0.5～1mm大の砂粒を非常に多く含む、海綿骨針を若干含む。19は同一個体がSK805から出土している(図左側拓本)。条痕文系壺であり、幅広の突帯を張り付け、指頭で凹ませた後に刺突を2列入れる。刺突は棒を折ったままの先端で入れる。口縁端部には指による刺突を入れる。胎土には1mm大の砂粒を非常に多く含む、海綿骨針も含む。色調は黄白色である。20は壺の口縁部ないし蓋と思われる。本体に二瘤条の突起を張りつけ、紐掛け用の穴を開けている。指頭沈線文の両側に爪による刻みを持つ。胎土には2～3mm大の砂粒と海綿骨針を多く含む。水に含まれる鉄分のため鉄錆色が付着しているが、本来は外面浅い肌色、内面暗灰色と思われる。21はすだれ条圧痕を持つ底部である。縦糸・横糸間隔2mmである。胎土には0.5～1mm大の砂粒を多く含む。色調は浅い橙色である。

まとめ 6(表採)が縄文時代長竹式土器の可能性がある。4・10～13・15～17は縄文土器ないし条痕文土器と思われる。条痕系壺の1・5は受口状口縁を持つこと、3は跳上文を持つことから東海地方西部の岩滑式との関連がある。7・9は条痕文系土器の精製壺である。肩部に渦巻き文ないし同心円文を持つのが通例である。県内では松江市八田中遺跡、乾遺跡に前期の出土例がある。尚遺跡出土土器と比較すると、7・9も文様の連結部分を削り込まないこと、9は文様の間が大きく開いていること、9の肩部の文様が浮線文ではないこと(沈線化)などの違いが認められる。よって7・9は中期の可能性もあろう。aは東海地方西部の中期に類別があり、5と出土していることから矛盾しない。

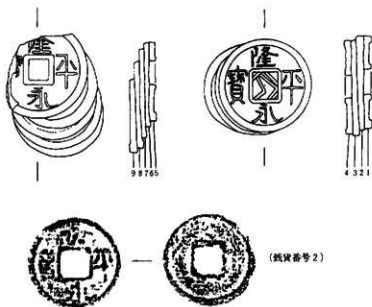
過去の調査では遠賀川式土器の甕1点、中期前半の衝描文土器2点、前期～中期前半の条痕文系土器の精製壺・条痕壺が数点報告されている。本調査区では中期前半の条痕文系土器群が多く、一部に縄文土器ないし前期の条痕文系土器の可能性もある。SD802以外は条痕文系土器の遺構であり、SK717以外は調査区北側に比較的集中していた。(久田正弘)

3. 戸水C遺跡の出土銭貨

今次の発掘調査より「隆平永寶」3枚と銭種不明銭6枚の計9枚が検出されている。当銭貨は9世紀末～10世紀初頭にかけて営まれたSB801（東西棟2×4間）西側付近より出土したもので、7世紀代に機能していた南北に走る溝部の上層面の少し深んだ地点から一括に取り上げられたものである。その取り上げの際に4枚と5枚の2個体に分離したものと恐れ、本来は9枚の銭貨がひとつなぎとなっていたものと解せられる。剝離面や鏽の状態などの観察から4枚鏽着銭が上部になっていたとおもわれる。いま仮に、銭文を上にした状態を(面)、そうでないものを(背)で示すと、前者は(面)、(面)、(背)、(面)で、後者は(面)、(背)、(不明)、(不明)、(背)の順になっており、一見その配順に規則性をみることも可能といえなくもないが、不明銭2枚、ならびに数量の僅少なことからこの点は留意するだけに留めておきたい。

検出銭貨のうち判読できた「隆平永寶」は西暦796年の初鑄年で、皇朝十二銭の4番目に鑄造されたものである。1は、平および寶字の上部で左右に折損するものである。銭型はやや小形で、

外輪は幅広く、小字。鏽化が著しいため肉太にみえる。2は、内郭がやや広く、平字の末画が長い。隆字は鏽のため見づらい。5は、約2分の1を欠失する。鑄あがり良く、細字である。この3銭貨と不明銭6枚の銭貨の状態は、相対的に良好なものである。なお、「隆平永寶」は単種で出土する傾向があり、6枚の不明銭は同銭貨の可能性が高い。



第70図 銭貨実測図、拓影(原寸)

第1表 銭貨計測表

番号	銭種	鑄造年	径(cm)	内郭(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	隆平永寶	796年(延暦15)	2.47	0.63	0.16	1.4	折損若干欠失 (面)
2	"	" (")	2.48	0.64	0.19	2.3	完形 (面)
3	不明	不明	2.55	0.63	0.19	5.9	鏽着 完形 (背)
4	"	"	2.45	0.67	0.15		完形 (面)
5	隆平永寶	796年(延暦15)	2.50	0.60	0.18	13.4	1/2欠失 (面)
6	不明	不明	2.47		0.21		完形 (背)
7	"	"	2.50		0.15		鏽着 完形 (不明)
8	"	"	2.49				完形 (")
9	"	"	2.44	0.62	0.16		完形 (背)

ところで、現代の人達は家や建物を建てる時に、工事の安全や平穩無事を願って地鎮祭を執り行う。このような祭祀行為は古代においても行われていたものであるが、そのことは発掘調査事例でしばしば知られるところである。建築の進行にともない、地鎮祭や鎮壇祭、立柱祭などいろいろな儀式が行われたのであるが、その祭儀に際して使用されたと考えられる瓶子や土師皿などと共に、銭貨が埋納されている場合がある。つまり、これらの銭貨は貨幣としてではなく、非経済的な宝物として用いられ、一般的には地鎮供養銭と呼ばれているものである。その出土位置から立柱祭にともなうもの、あるいは屋敷地の地鎮に使用したものであるなどの識別がなされている。この様な出土事例は平城京を中心にして全国にかけて数多く確認されているが、とくに本果は当検出例の比較的多い地域といえよう。

本例の銭貨9枚は、先にも述べたが掘立柱建物(2×4間)の約35cmを隔てた地点より検出したものである。このような建物の近辺や建物と直接的に関係の見られない場所から出土した類例をあげると、まず本果の金沢市三小牛サコヤマ遺跡では、寺院建物の東南方約100m隔てた土坑から鉄製品、金銅鈴に共伴して「和同開珎」約600枚、同市千木ヤシキダ遺跡の掘立柱建物身舎内の土坑から「和同開珎」2枚、「萬年通寶」2枚、「神功開寶」6枚、「富寿神寶」1枚の計11枚、同市畝田遺跡の掘立柱建物の南西隅柱穴脇の小土坑より皇朝銭約10枚、松任市宮丸遺跡では掘立柱建物付近の小土坑より「和同開珎」5枚、「神功開寶」2枚、不明銭6枚の計13枚、そして小松市高堂遺跡の土坑2基からは「和同開珎」2枚、「萬年通寶」6枚、「神功開寶」3枚、不明銭16枚の計27枚と、「和同開珎」4枚、「萬年通寶」22枚、「神功開寶」12枚、「隆平永寶」1枚、不明銭29枚の計68枚が確認されている。また県外では、平城京左京三条二坊三坪より小型の須恵器壺内に「和同開珎」2枚、平城京右京八条一坊十三坪の円形土坑から土師器皿、ガラス小玉、金箔片と共に「和同開珎」32枚、法隆寺境内西院地区の参道の土坑から土師器碗に内蔵して金箔と共に「和同開珎」2枚、熊本県七城町上鶴頭遺跡の土坑2基から、それぞれ「隆平永寶」1枚と同銭貨3枚の出土などが管見にのぼる。

掘立柱建物の柱穴やその掘形に銭貨を埋納する事例は上記例の他にもかなりの数が検出されている。これは建物の柱を建てる時に行なう祭祀、いわゆる立柱祭にともなう埋納と考えられており、その埋納の位置は一方の隅柱穴に埋められている場合が多いといえる。本例はそうした建物と直接関係するとみられる具体的な要素は欠くが、埋納の位置がSB801東西棟の西側付近であることを考慮すると、当掘立柱建物との関係が指摘されてこよう。とすれば、本出土銭貨は当建物の屋敷地内の土地神を鎮める祭祀、すなわち地鎮祭にともなって埋められたものであると推察される。

なお、本調査区からはこれ以外にもう一か所祭祀遺物が検出されている。前段階の時期の建物に付属すると考えられるものであるが、これは祭祀の供献具である瓶子と平瓶のセットを直に埋納したきわめて祭儀色の強い貴重な事例である。これについては、第3章に詳述されているのでそれにゆずることにするが、当事例の銭貨の埋納例はともに祭祀儀礼にもとづいて行われたものである。しかし、この両者の埋納物には顕著な相違がみられる。埋納銭の意味については先記した如く、地鎮・宅鎮の願いをこめて埋めたものであるが、当供献具例の埋納行為も大要意味するところは同様と考えてよからう。

(芝田 悟)

4. 戸水C遺跡出土の初期貿易陶磁器

1) 戸水C遺跡の初期貿易陶磁器 (第71図)

ここで報告する初期貿易陶磁器は、本遺跡の第4次調査区(1980)を中心とする地点から出土した長沙窯青磁と越州窯系青磁の2点¹⁾である。いずれも遺物包含層からの出土品である。

1は長沙窯産の青磁碗である。口径は13cmと小形で、体部が弱く内湾する。胎土は灰白色で、釉は灰オリーブ色を呈し細かい貫入がみられる。釉下の化粧土は外面の中程までかかり、下半は露胎である。器形と法量からしても福岡市多々良込田遺跡²⁾と同一タイプの製品である。

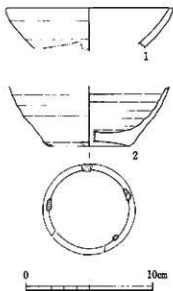
2は越州窯系青磁の壺の底部片とみられる。底径は6.3cmで、平底ながらも弓なりのあげ底となる。胎土は精良で灰白色を呈する。釉は光沢のある灰オリーブ色で、全面に施釉される。

二点とも調査区の状況から、本遺跡に受容された時期は9世紀後半と推定される。また、長沙窯産の青磁碗は、北陸地方では初例の製品で、越州窯系青磁の壺との関連からも注目される。

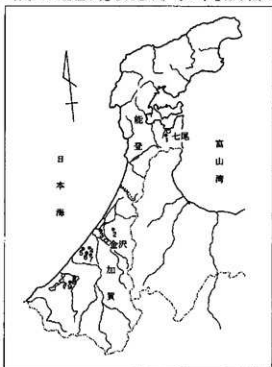
2) 能登・加賀出土の初期貿易陶磁器 (第72図 第2表)

現在の石川県は、旧能登国と旧加賀国を行政区とするが、この二国で確認された初期貿易陶磁器は、越州窯系青磁、邢州窯系白磁、長沙製品の三種類で、第2表に整理した9遺跡の22点を知ることができる。それを国別にみると、能登か能登国分寺跡の2点の越州窯系青磁碗³⁾だけであるのに対して、加賀は本遺跡を含め8遺跡から20点が出土し濃厚な分布を見せている。

この初期貿易陶磁器を製品別に整理すると、越州窯系青磁17点、邢州窯系白磁2点、長沙窯製品3点となる。器種では碗・鉢・杯・壺・水注・合子の六器種が見られるが、その中心は9点の



第71図 初期貿易陶磁器実測図



第72図 初期貿易陶磁器出土遺跡分布図

第2表 能登・加賀出土の初期陶磁器一覽

No.	遺跡名	所在地	種別	遺構	種類(器種・点数)	年代	文献
1	能登国分寺跡	七尾市	寺院	包含層	越州窯系青磁(碗2)	10世紀	
2	千木ヤシキダ遺跡	金沢市	官衙カ	包含層	越州窯系青磁(碗1)、白磁(碗1)	10世紀	註(9)
3	戸水C遺跡	"	官衙カ	包含層	長沙窯(碗1)、越州窯系青磁(壺1)	9世紀	
4	横江庄遺跡	松任市	庄家	溝	越州窯系青磁(合子蓋1)	9世紀	註(10)
5	北安田北遺跡	"	集落	溝	越州窯系青磁(碗1)	10世紀	註(5)
6	三浦遺跡	"	集落	包含層	越州窯系青磁(鉢1)	10世紀	註(6)
7	安養寺遺跡	鶴来町	集落	包含層	越州窯系青磁(碗1)	11世紀	註(7)
8	佐々木アサバタケ遺跡	小松市	集落	土坑・溝	越州窯系青磁(碗2・壺1)、長沙窯(水注1)	9・10世紀	
9	浄水寺跡	"	寺院	大溝	越州窯系青磁(碗2・鉢2・輪花環1・水注1)、白磁(碗1)、長沙窯(水注1)	9・10世紀	

越州窯系青磁碗である。これを亀井明德氏の研究⁴⁾に照らすと、加賀の初期貿易陶磁器の様相は、京都や奈良を中心とする畿内で見受けられる様相に近似したものと理解される。また、加賀で初期貿易陶磁器を受容した遺跡は、その器構成と点数から三群に分けて捉えることができる。

A群は初期貿易陶磁器の中でも、普及的な性格をもつ越州窯系青磁の碗が単品で受容された場合で、手取川扇状地の集落遺跡である北安田北遺跡⁵⁾、三浦遺跡⁶⁾、安養寺遺跡⁷⁾などが該当する。

B群は碗に加えて、越州窯系青磁の壺や長沙窯の水注などの調度品的な陶磁器を併せて受容した場合で、碗と壺、碗と水注などの二器種組の使用が復元され、官衙的な本遺跡や国府に隣接する、有力な在庁官人に関わる集落遺跡の佐々木アサバタケ遺跡などが該当する。

C群は初期貿易陶磁器を構成する三種類が揃い、点数・器種とも豊富な内容で受容された場合で、山間寺院の浄水寺跡が唯一該当する。また、この群はB群で復元された二器種組が複数で受容され、宗教用具(仏具)として利用されたタイプとも理解される。

なお、以上の分類に属さない遺跡がある。能登国分寺跡は、白磁碗が2点出土している越中国府関連の美野下遺跡⁸⁾と同一質量の遺跡で、千木ヤシキダ遺跡⁹⁾を含めてB群の係系と理解したい。また、横江庄遺跡¹⁰⁾の越州窯系青磁の合子は、緑釉陶器の三足盤・鉄鉢・香炉などの陶製宗教用具(仏具)を補完する受容と理解するならば、C群の祖形に位置付けられると考えられる。

さらに、A群の集落遺跡に関しては、集落の構造や変遷から古代社会に論及した研究はあるが、各遺跡で豊富に消費されている灰釉陶器や緑釉陶器の用途や受容者層に論及したものはない。今回、整理した初期貿易陶磁器は少量ではあるが、その様相と性格からしてもA群の陶磁器の受容層は、郷長クラスが想定され、各集落は郷長を核とした集落と理解しておきたい。(垣内光次郎)

註(1) 製品の同定については、山本信夫氏のご指示による。

(2) 山崎純男『多々良込田遺跡』福岡市教育委員会 1985 福岡。

(3) 能登国分寺跡の第1～3次調査の出土品から確認。また、寺家遺跡の壺は13世紀の施釉陶器であることが知られた。

(4) 亀井明德『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎出版 1986 京都。

(5) 前田清彦『松任市北安田北遺跡II』松任市教育委員会 1990 松任。

(6) 石川考古学研究会編『加賀三浦遺跡の研究』石川県教育委員会 金沢。

(7) 中島俊一『安養寺遺跡群発掘調査報告書』図版編 石川県立埋蔵文化財センター 1985 金沢。

(8) 山口辰一『美野下遺跡調査概報』高岡市教育委員会 1986 高岡。

(9) 出越茂和『金沢市千木ヤシキダ遺跡II』金沢市教育委員会 1991 金沢。

(10) 金山弘明『松任市横江庄遺跡発掘調査概報』松任市教育委員会 1990 松任。



遺跡より南を望む
調査区の南は輸入木材の仮置き場



表土除去作業
2m以上の客土が遺跡を覆う



金沢港と調査区
御水溝に海水が逆流



SK717 (823)
弥生中期初



SK805
弥生中期初



SK808
弥生中期初



P8004
弥生中期初



SK809
弥生後期



SD802（7世紀）内の弥生
後期～古墳初期の土器出土
状態



ST-04

南から



同上 土器出土状態

2点の高杯を併置



古墳群

手前左がST06、右がST05



ST09検出状態

東から



ST06調査風景



ST09北溝断面



ST10西溝断面



ST11検出状況

西から



ST11周溝調査

西から



ST11完掘

東から



同上

南から



ST11
後方部西溝



ST11
後方部南溝



同 上
墳丘側の掘り込みは垂直に近い。
土層は墳丘側からの流れ込みが顕著。



ST11南側くびれ部
上部は溝底からかなり深くて出土



ST11前方部北溝
墳丘側の掘り込みは急傾斜



ST11前方部全面の溝断面
SD802に先行



ST12
西から



ST12北東コーナー
土層断面



ST12土器 (50)
出土状態



SD802調査風景



SD802 (G 6区)



SD802 (G 4区) 土層断面
上層は平安時代の埴積層



SB701・702

東から



SB703・704他

南から



SB801～807建物群全景

南から



SB802検出状況

東から



SB801・802

東から



SB803・807

北から



SB804

南から



SB806

北から



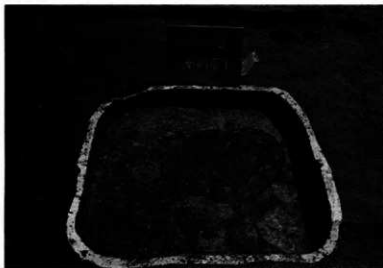
SB802調査風景



SB801 (P8118)
柱痕部土器出土状況



SB801 (P8096)
土層断面



SB802
柱痕部検出状況



SB803・805の拡張区
西から



SB803 (P8291)
柱埋検出状況



SB806 (P8128)
土層断面

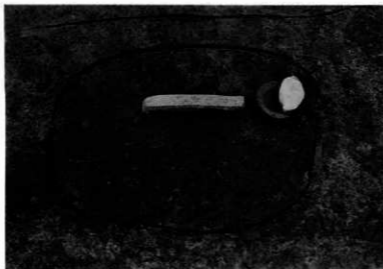


P8333・8777土器出土状態



P8777小瓶検出状況

東から



P8333平瓶検出状況
西から



同上ピット半截



同上完掘



SE702
土層断面



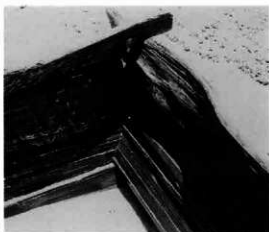
SE702
井戸側



SE702
調査風景



SE702 井戸側北西隅



同左 北東隅



SE702井戸側 南東隅



同左



SE702井戸側 北壁
掘り方側に縦板が打ち込まれる



同左 縦板



SE801検出状況
上層から土器が出土



同上 調査風景



同上 完掘



SE803 土層断面



同上 調査風景



同上 完掘



SE807 土層断面



同上 遺物出土状態



同上 完掘



SE704検出状況
奥のピンボールの位置から数脚
付円面視出土



同上 井戸側内土層断面
掘り方内は地山質土多く含む



同上 掘り方半截



SE704 北西隅柱
隅柱の周囲にも多くの縦板が打ち込まれる



同上
縦板抜きとり作業



休憩
SE704を囲んで



SK705

遺物は底からかなり浮いて出土



SK804

底面から宛影の杯B出土



SD8132

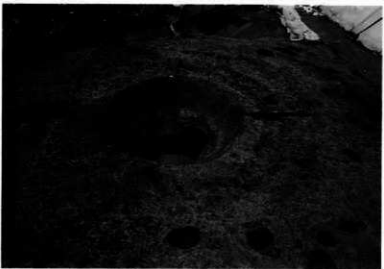
布張り状の溝



SE703と建物跡
北から



SE703土層断面



同上 完掘



SE805
作業風景



SE805遺物出土状態
杓・沈石・横枝などが出土



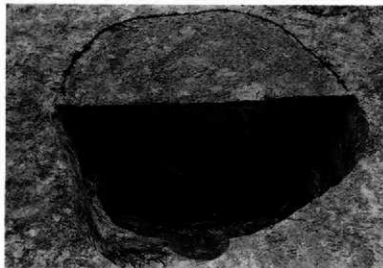
P8180 (井戸)
底から大形の石が5個出土



SE701



SE802



SE804



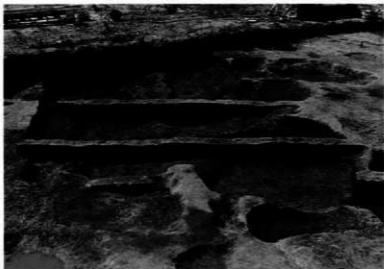
SE808



SD869周辺
作業風景



F-H-5-7区畝溝
左奥の壁みはゴイサギが営巣
中。真下にはST09が存在。



SX709
土取り穴か

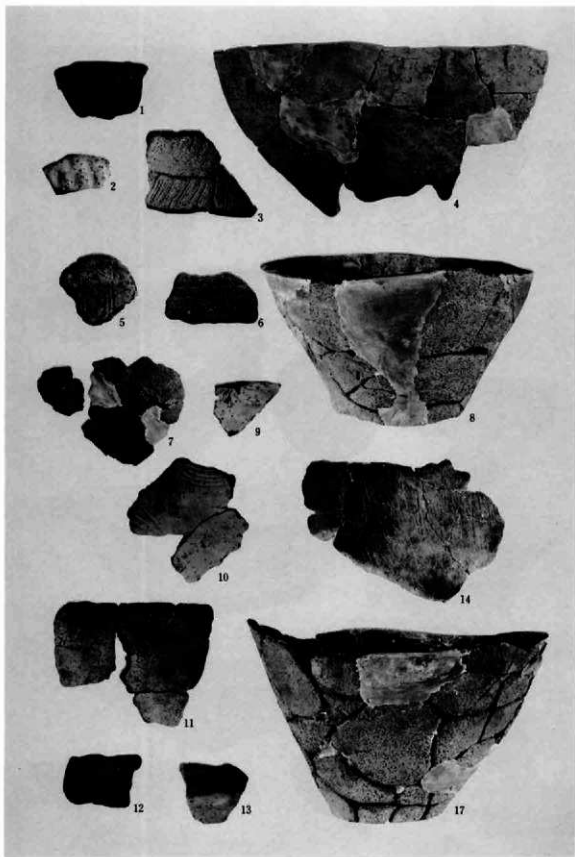


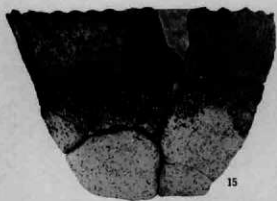
SX712・713
土取り穴か

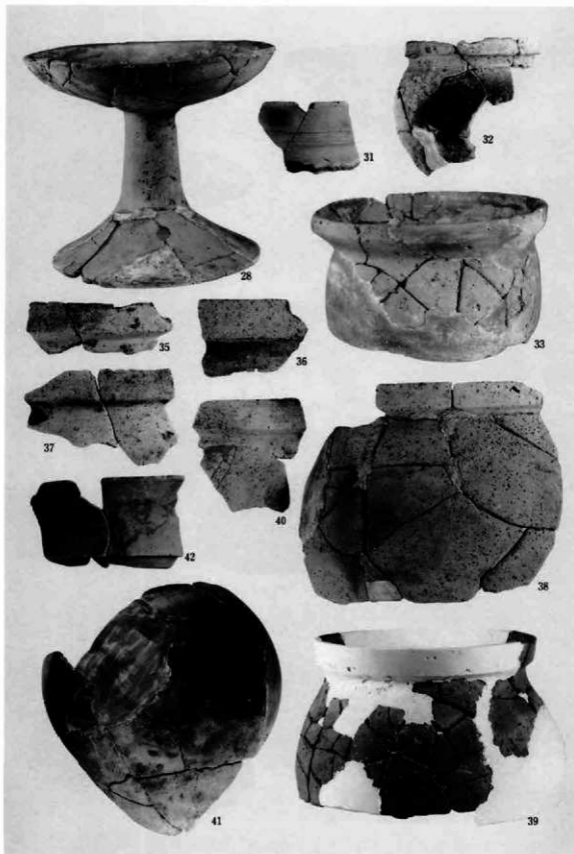


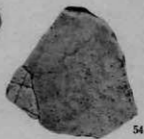
1991年9月27日夜半から28日未明の大型台風19号による被害。プレハブは倒壊をまぬがれ、被害は奇跡的に少なかった。















55



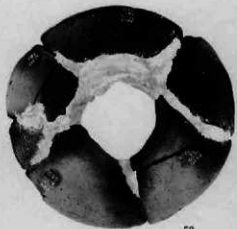
56



57



59



58

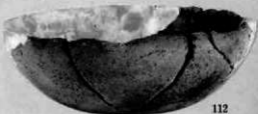
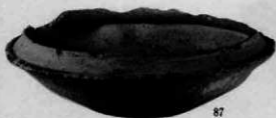


68



69







113



115



117



120



122



123



124



116



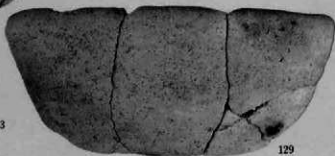
114



119



121



129



125



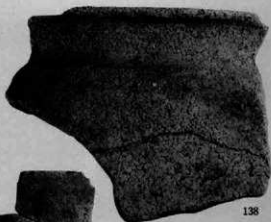
126

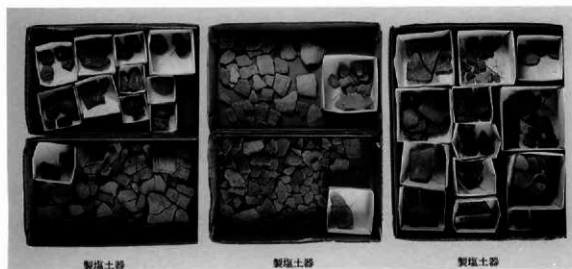
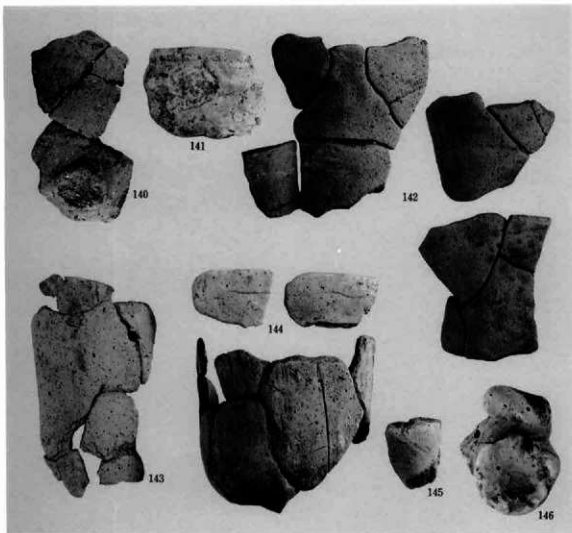


128



127

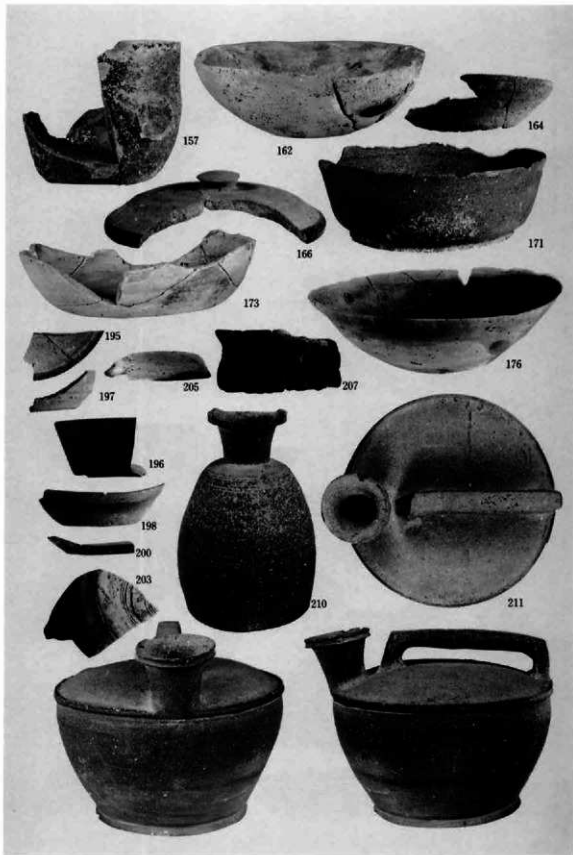




製塩土器

製塩土器

製塩土器





221



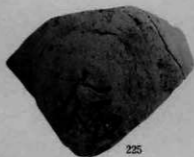
222



223



225



225



238



231



244



232



233



244



245





248



255



249



253



254



258



259



260



263



250



264



251



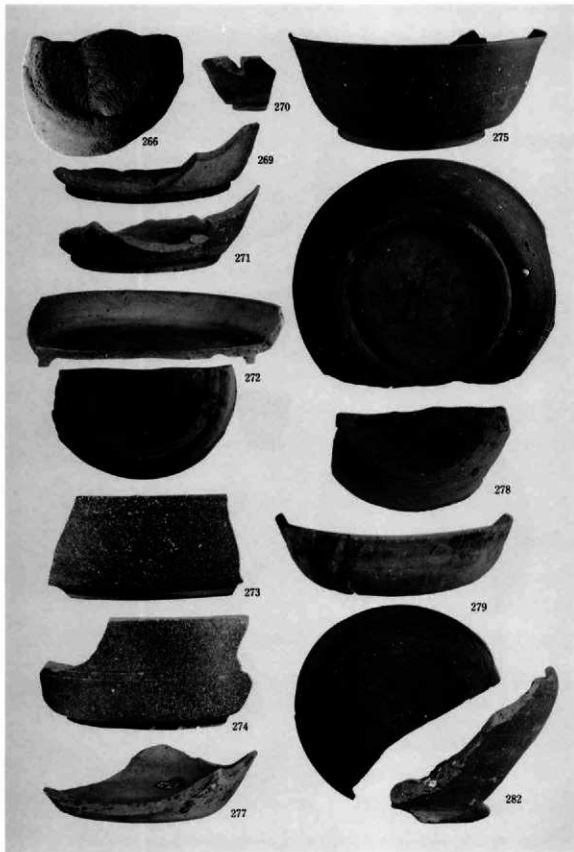
264





265

獸脚付円面碗





280



281



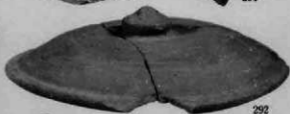
283



288



291



292



300



303

304

311

315



320



329



331



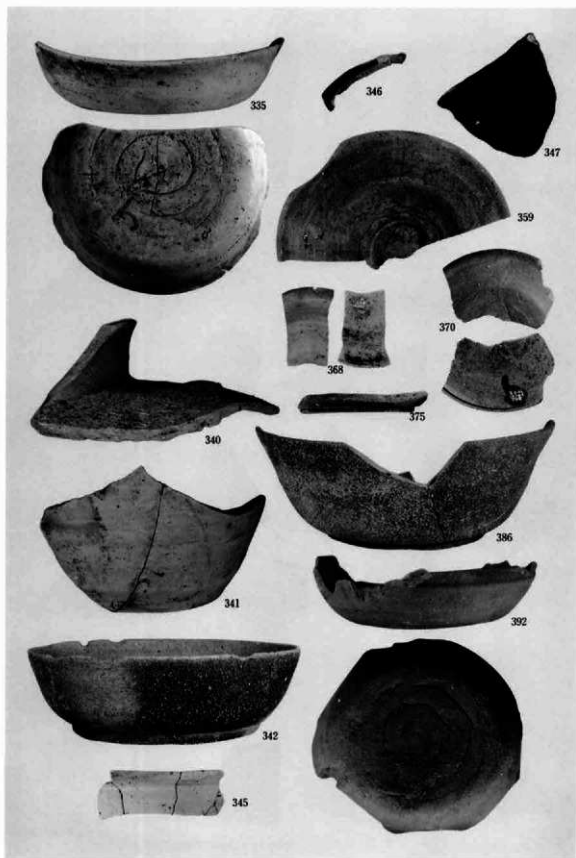
333



337



338





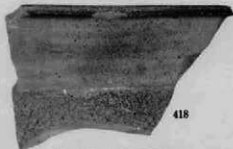
401



403



420



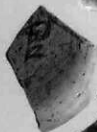
418



423



419



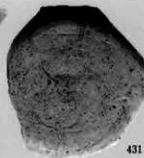
428



429



430



431



432



433



435



437



438



445



443



444



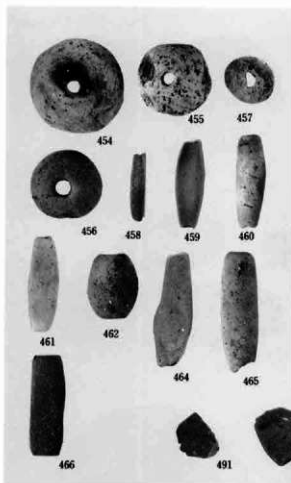
446



475



475





496



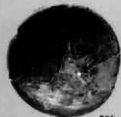
497



498



499



500



496



497



502



499



498



500



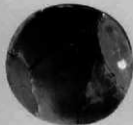
502



504



506

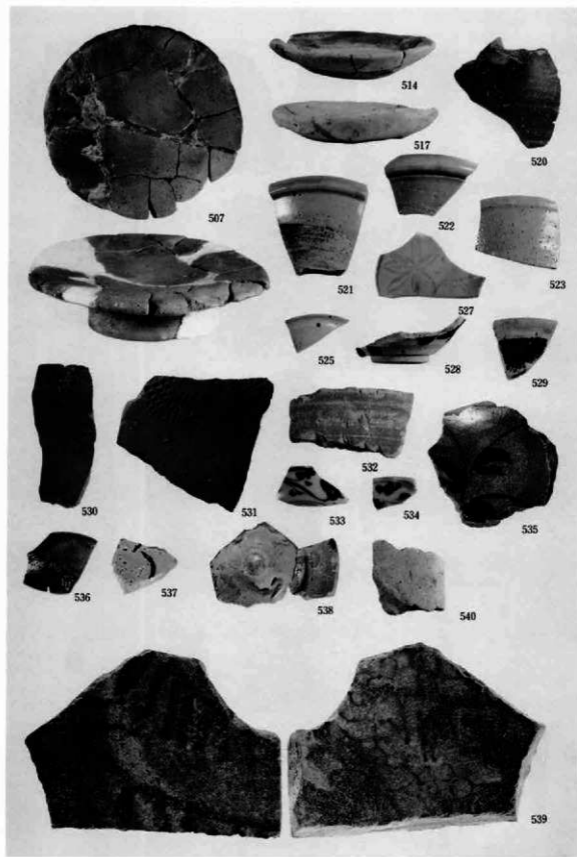


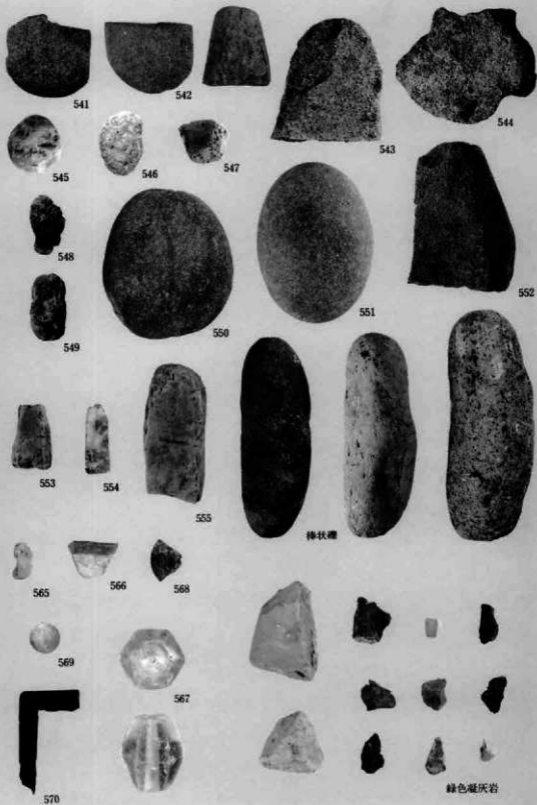
503

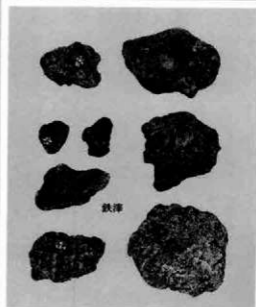
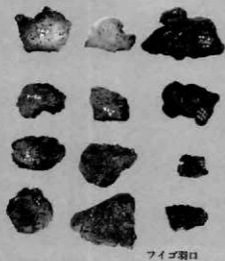
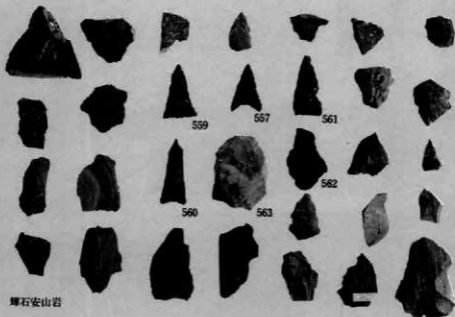
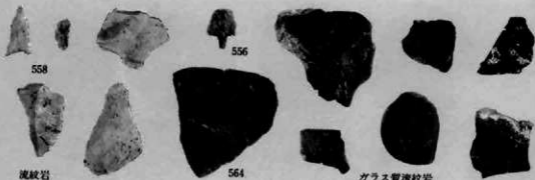


505











隆平永寶

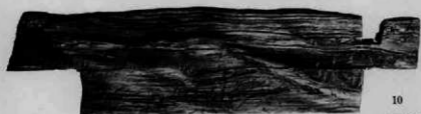


牛馬齒

SE-702井戸材



9



10



14

15



11



12

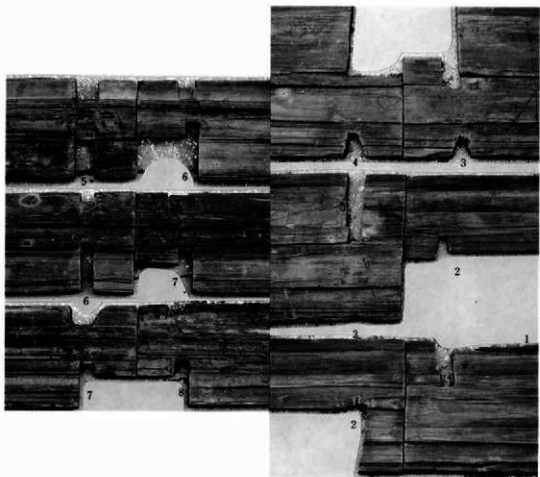
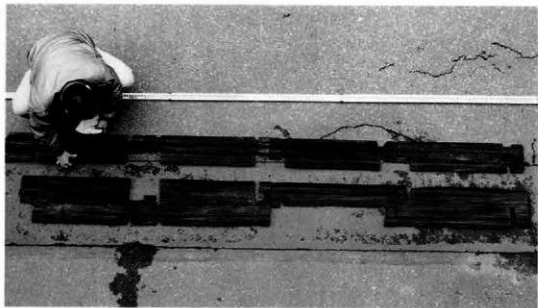


13



16

17



SE702井戸側



18



19



20



SE807井戸側



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30

SE704井戸側

SE704井戸側



31



32



33



34



SD802

35

SE808井戸側



36



37



38



39

SE805

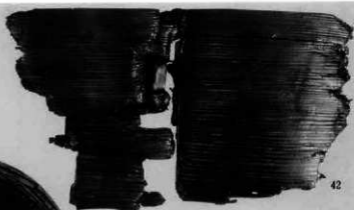


40

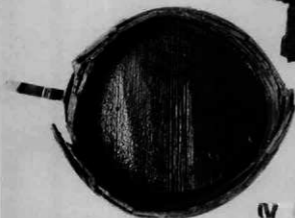


SB803柱根

SE702



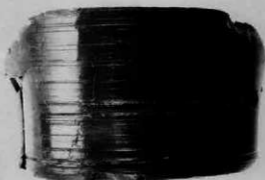
42



43



SE-805 44



45



41

SE702



46



47



48

SE808



43

礎板



P 8278



P 8290



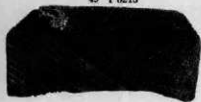
P 8213



P 8293



P 8303



54

P 8172



55



56



57



石川県金沢市

戸水C遺跡

平成2・3年度発掘調査報告書

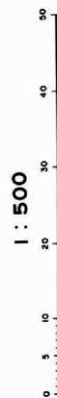
印刷・発行 1993年3月31日
編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921 電話 (0762) 43-7692
印刷 関橋本礎文堂



昭和55・53～57年度調査区

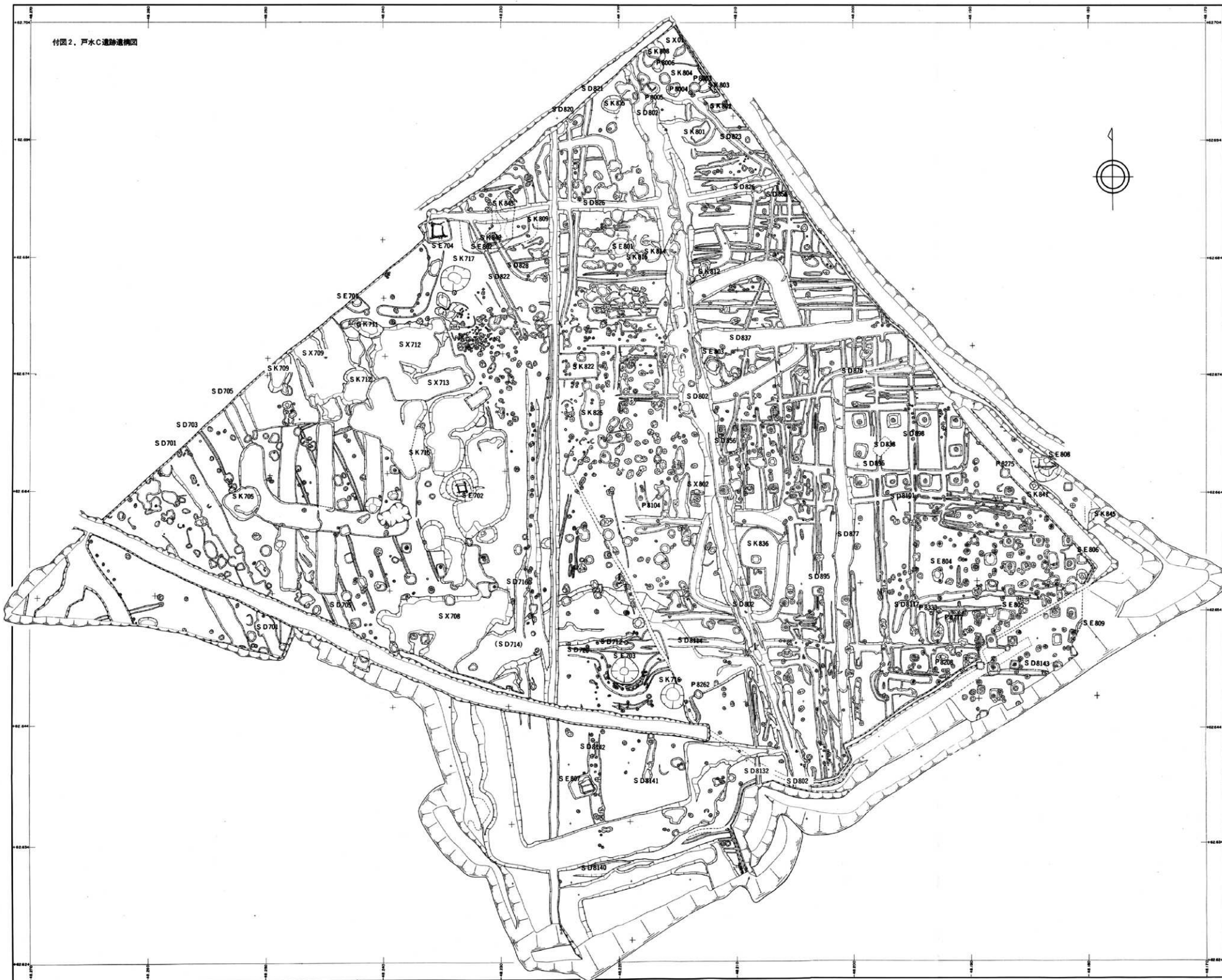


平成2・3年度調査区



1 : 500

付図2. 戸水C遺跡遺構図



S = 1 : 200